国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和27年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001180

昭和27年度

国立国語研究所年報

—4—

国立国語研究所

1953

はじめに

この年報4は，昭和27年度における調査研究の概況である。

年を重ねるに従って，調査研究の成果が加わり，借用している絵画館内の室々も手ぜまになっていたところ，山本有三氏の好意によって，進駐軍の使用が解かれるとともに，三鷹市の閑静な邸宅を分室として一時借用することが出来，所員の一部はそこに移って調査研究を進めた。

本年度の調査研究の状況は，それぞれ担当者が報告している。これらの調査研究は，多くは前年度の調査研究を土台として，もう一歩前進させたものである。本年度に，一応の完了を見て，印刷刊行することの出来たものは，「現代語の語彙調査　婦人雑誌の用語」「地域社会の言語生活―鶴岡における実態調査―」である。

研究所が所期の目的を果そうとするためには，予想外の困難や障害につきあたる。そのためにも，ただ力をあわせて着実な前進を続けるほかはない。御支援を賜りたい。

1953年12月

国立国語研究所長　西尾　実

目　　次

はじめに

昭和27年度の調査研究のあらまし …… 1

話し言葉の調査研究 …… 5

書き言葉の調査研究

婦人（生活）雑誌の語彙の調査研究 ……27

地域社会の言語生活の調査

地方言語の敬語に関する調査 ……33

三重県上野市における敬語の調査 ……38

国語の学習と指導に関する研究

文字言語の学習負担についての研究 ……42

言語能力の発達に関する調査研究

国語の学力標準設定に関する調査研究 ……64

新聞に対する態度・経験・能力の発達に関する調査 …… 105

言葉の効果に関する調査研究

読みやすさの基礎調査 …… 114

ラジオ・ニュース文体の研究 …… 132

文字配列の合理化に関する実験的研究 …… 134

国語の歴史的発達に関する調査研究 …… 148

辞典の編集方法に関する調査…… 148

国語関係文献の調査 …… 149

図書の収集と整理 …… 151

庶務報告 …… 158

昭和27年度の調査研究のあらまし

昭和27年度は，国立国語研究所が設置され調査研究を始めてから第4年目に当る。前年度を受けついで，昭和27年度の研究項目を次のように定めた。

(1) 話し言葉の調査研究

現代話し言葉の実態と性質を明らかにする。材料としては主として日常談話による。

(2) 書き言葉の調査研究

語彙調査と漢字使用状況の調査。語彙調査としては，前年度来の婦人雑誌を資料とする語彙調査を完了する。

(3) 地域社会の言語生活の調査研究

全国各地方における敬語使用の実態調査。特定の地域社会における敬語使用の社会心理学的調査。

(4) 国語の学習と指導に関する調査研究

文字言語の学習負担に関する調査研究で，主として読みの方面から調査する。

(5) 言語能力の発達に関する調査研究

国語の学力標準設定のための調査研究

(6) 言葉の効果に関する調査研究

文字配列の合理化に関する実験的研究

マス・コミュニケーションに関する調査研究

(7) 国語の歴史的発達に関する調査研究

音韻史資料の収集

古辞書の語彙索引の作成

(8) 辞典編集方法に関する調査研究

既刊の国語辞書・対訳辞書を資料とする語別一覧表の作成

(9) 国語関係文献の調査および，収集整理

(10) 特殊問題の調査研究

外部への委託研究としては，各都道府県に地方調査員を委嘱したことは例年の通りで，今年度は，各地における敬語の使用状況の調査を課題とした。また，放送文化研究所に対しては「ラジオ・ニュース文体の研究」を依頼した。

前述の調査研究を担当するものとして次のような研究機構を定めた。前年度においては，2部5研究室と資料室とから出来ていたのを本年度は研究室を一つふやし，2部6研究室と資料室とにした。

研究第1部
部　長　岩淵悦太郎
- 第1研究室
  - 中村通夫（主任）　大石初太郎　飯豊毅一
  - 宇野義方　進藤咲子　金田一春彦
- 第2研究室
  - 林　　大（主任）　永野　賢　大野弥穂子
  - 斎賀秀夫　水谷静夫
- 第6研究室
  - 岩淵悦太郎（主任・兼）　柴田　武　北村　甫
  - 島崎　稔　野元菊雄　上村幸雄　山之内るり

研究第2部
部　長　草島　時介
- 第3研究室
  - 平井昌夫（主任）　上甲幹一　高橋　進　寺島　愛
- 第4研究室
  - 輿水　実（主任）　高橋一夫　芦沢　節
- 第5研究室
  - 草島時介（主任・兼）　森岡健二

資料室

岩淵悦太郎（主任・兼）村尾　力　有賀憲三　広浜文雄　友部　浩　味岡善子

以上のほかに，事務上の仕事を担当して調査研究を助けるものとして庶務部（部長細井房夫）があり，庶務課（課長真取正二），会計課（課長黄木得二郎）に分れている。

上記研究項目のうち，(1) (2) (3) は第一部が，(4) (5) (6) は第2部が (7) か

ら (10)までは資料室が担当した。

第1部は現代語を調査研究する部門である。これまで現代語を話し言葉と書き言葉とに分けて研究調査を進めて来たが，話し言葉においては，共通語として広く行われるものと，地域社会において行われるものとがあり，これらはそれぞれ別に研究調査を進める必要を認めて，前者を第1研究室が，後者を新設の第6研究室が担当することとした。

日本語では，話し言葉と書き言葉との間にかなり大きなへだたりのあることはよく知られている。それでは話し言葉がどのような特性を持っているかというと，従来常識的なことしか知られていない。そこで，本年度から話し言葉の特性を第1研究室において本格的に調査することにした。

第2研究室は，前年度に引き続き語彙調査に力をつくした。婦人雑誌の用語用字について統計的調査を進めたのであるが，これは，現代における基本語彙を制定するための一連の仕事のうちの一つである。

第6研究室は，第1研究室で担当して来た地域社会における言語生活上の問題を特に取り上げる研究室として発足した。敬語がわれわれのコミュニケーションの上に大きな問題を投げかけていることに着目して，本年度は三重県上野市を調査地点として，市民の敬語の使いかたを各方面から調査した。(この調査は，文部省総合研究費の補助を受けて実施した) この仕事は次年度にもう一地点について調査した上，まとめようと考えている。またこれと関連して，各都道府県の地方調査員に対して各地における敬語使用の状況を調査してもらった。敬語の使いかたは，各地方地方によってかなりの変異があると考えられるからである。

第3研究室は，国語の学習の上でも，特に文字上の負担について実状を調査し，その対策を考えることとし，その第一歩として本年度は，読みの上での障害の種類と原因を分析した。

第4研究室では，前年度に引き続き，国語学力の標準設定の問題を取り上

げたが，本年度においては，国立教育研究所の全国的な学力水準調査に参加し国語科に関するものの問題作製を受け持ち，調査の方法や整理の方法等にも協力した。

第5研究室では，印刷物における文字配列の合理化を計る調査研究を，前年度に引き続き行った。また，マス・コミュニケーションにおいては，表現が大衆に理解されることが重要なことになるが，理解しやすい度合を明かにするものとして，教科書文章について調査した。

新聞がどのように利用され理解されているか，この問題を東京および千葉県の農村における小・中学校生徒について調査した。この調査は，日本新聞協会と共同して実施したものであり，国語研究所からは，第4研究室および第5研究室が参加した。

日本放送協会放送文化研究所に対する委託研究は，ラジオ・ニュースの文体としては，どのようなものがよく理解され，また効果があるかを明らかにするもので，本年度と次年度の二か年で完成する予定のものである。

（岩　淵）

話し言葉の調査研究

A. 調査の目的

話し言葉の調査研究については，その資料としての話し言葉が，瞬間的に流れ去り，捕捉することが困難であったため，待望されつつ，これまで大量的な調査研究がほとんどなされなかった。そこで，本年度を研究の第1年度として，共通語としての話し言葉の本格的な調査に着手することになった。

研究第1年度である本年度は，話し言葉の特質といわれているものを具体例について検討し，その構造における基本的な諸問題の所在を具体的なかたちで提出し，次年度以降の調査研究の基礎とすることを目標とした。

B. 本年度の計画

この目標のために，本年度は，まず調査対象として日常の談話を選び，それらをテープ録音器を用いて録音し，ソク・タイプによって文字化した後，音節を単位とする問題，語（文節）を単位とする問題，文を単位とする問題に着目しつつ，直接には，

語・文節・文の長さ
文の構造
イントネーション
品詞のあらわれかた

を知ることをその課題とした。

C. 調査研究の担当者

調査対象の決定，その採集のための現場の録音作業，定められた記載様式によって文字化する作業，語・文節・文等の共通所要記号を記入する作業は全員がこれに当ったが，分析の段階では，次のように分担してその作業を進

めた。

語・文節・文の長さ	中村通夫　進藤咲子
文の構造	飯豊毅一
イントネーション	宇野義方
品詞のあらわれかた	大石初太郎

D. 実施経過

1. 資料の採集までの準備

録音テープの入手は7月初旬と予想されたので，6月末日まで次のような作業を行った。

a．話し言葉に関する諸説の検討

話し言葉に関する基本的な諸問題について，とくに，

1　共通語について（飯豊）
2　基本語彙について（宇野）
3　話し言葉について（大石）
4　場面について（進藤）
5　内外の調査研究文献について（中村）

従来の諸説を調査し，1～3は謄写に附して以後の調査に役立てようとした。

b．調査資料の決定

この調査は東京都内で行うことを予想し，またそのために準備される録音テープの数は約80巻（1巻約30分）であったため、それらを東京における日常談話の言葉の資料に集中させることとした。そして日常の談話が多く得られる場合として，衣食住・社交等の生活機能と家庭・近隣・職場・市町村などの生活環境との切点から具体的な談話の場面を収集し、また、性・年齢・教養・相手（の数・未知既知）・地域などになるべく片寄りの少いことを目安として，調査地点・調査対象・調査場面の予定表を作成した。

c．分析のための言語単位の検討

雑誌「言語生活」の「録音器」欄を資料として、それらの資料を、従来の

各種の言語単位を用いて分析し、その得失を検討した結果、この調査のためには、おおむね文部省中等文法によりつつ，若干の修正を施すことに止め、談話語の実際に即した言語単位の設定は、調査課題の一つとして調査の終末において検討することとした。

2. 資料録音のための現場の作業

7月初旬から，9月末日までの間に，資料として録音テープ80巻の採集を終了した。録音作業中ならびに文字化の作業中に電力事情が悪く，ことに電圧低下が甚だしかったので，これらの作業に多くの日時を要し，また多くの使用不能の録音テープを生じ，かろうじて分析に堪える明瞭度に録音されたテープは60巻に過ぎなかった。

3. 録音テープを文字化する作業

録音テープを資料化する第一着手としての文字化のためには，もしも所員の手書きによる照合聴取の方法をとる時は，多くの日時を要することが従来の経験によって明らかになっていたので，当初から機械速記（soku-taipu）による文字化を計画した。そして，機械速記によってローマ字文による第一次タイプ原稿正副2通を作成し，さらに録音テープとタイプ原稿とを照合して，誤脱を正し，所要の記入を終了したのは1月中旬であった。

4. 本年度分析用定本の作業

上述の経過によって，本年度内に分析のために予定される日時が僅少となり，録音テープのすべてを年度内に処理することが危ぶまれたので，録音テープ60巻を，ほぼ諸条件の同質を予想されるA（30巻）B（30巻）両資料群に分ち，今年度は主としてA群の資料によって分析を行うこととした。そして，A資料群について，語・文節・文などの区分のための記号を施した。A資料群を具体的に示せば次の通りである。

Reel No.	略称	録音の可否	地区 下町	山手	周辺	場所 家庭	近隣	学校	職場	公共施設	性 男男	女女	男女	女男	年齢 若若	壮壮	若壮	壮若	教養 義義	専専	義専	専義	相手 1人	2～4人	5～7人	8人以上	既知 未知
3	I夫妻	可		×		×							×	×	×					×			×				×
7	T家雑談	可		×		×					×	×	×	×			×	×			×	×		×				×
67	N家座談	可			×	×					×		×	×		×	×	×	×		×			×			×	×
86	トタン屋	可			×		×				×						×	×			×	×		×			×	
76	じいさんばあさん	可			×	×					×	×	×	×		×					×			×			×	×
93	魚屋雑談	可			×		×						×	×	×						×	×		×				×
97	U氏談	可			×	×					×			×		×				×				×			×	×
61	学生座談1	可			×		×				×				×					×					×			×
66	井戸端	可			×		×					×					×	×	×	×	×	×			×			×
98	友の会	可			×		×					×						×	×	×	×	×		×				×
2	女子学生	可			×			×				×			×				×	×					×			×
59	松根屋	可	×						×		×					×			×		×				×			×
57	高島屋	可	×						×		×		×	×		×	×	×			×	×				×	×	
100	柳橋美屋	可	×						×		×	×					×	×	×				×	×				×
図5	絵画館おばさん	可		×					×			×	×			×			×		×	×			×		×	×
25	床屋	稍可		×					×		×						×	×	×		×	×	×					×
51	一研雑談	可		×					×		×		×	×			×	×		×				×				×
64	三鷹女工	稍可			×				×			×			×				×					×				×
62	学生座談2	稍可			×		×				×		×	×	×		×	×		×				×				×
104	三越美容室	稍可	×						×			×					×	×			×	×		×			×	
15	結婚申込	可		×						×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×				×	
87	職安男子	可		×						×	×						×	×			×	×	×				×	
88	職安女子	可		·×						×		×	×	×	×						×	×	×				×	
79	無尽の会	可			×		×					×	×		×		×	×						×				×
70	女子大事務室	可			×				×		×	×	×	×			×	×			×	×		×				×
21	煙草雑談	可	×							×	×					×				×				×				×
22	女性→男性	可	×							×		×	×	×		×				×				×			×	×
54	男性→女性	可	×							×	×					×				×				×				×
90	独身者座談会	可	×							×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×					
83	世相王手箱	可	×							×	×		×	×		×					×	×	×					

（注） 1. 性の男男・女女・男女・女男，年齢の若若・壮壮・若壮・壮若は，それぞれ話し手と聞き手との性別・年齢を示す。
2. 年齢の若は39歳まで，壮は40歳以上を示す。
3. 教養の義は義務教育終了者を，専はそれ以上の学歴を示す。

5. 分析の作業

1月下旬以降，分担に従って分析の作業を進めた。分析の経過および年度内に到達した成果は次項の通りである。

E. 分析の経過とその成果

1. 語・文節・文の長さの調査

日常の談話における語・文節・文は，どのような長さであろうか，またそれは書き言葉と比べてどのような差異を持っているであろうか，それらの点を明らかにすることがこの調査の目標であるが，そのために年度内に行った作業とその成果の一端は次の通りである。

(a) A資料群から表1に示す資料5巻を選んで準備調査を行った。その結果は次の通りである。

なお，表5は資料1・3・5の3巻，表6は資料5の1巻についての集計であり，その他は全巻についての集計である。

〔表 1〕

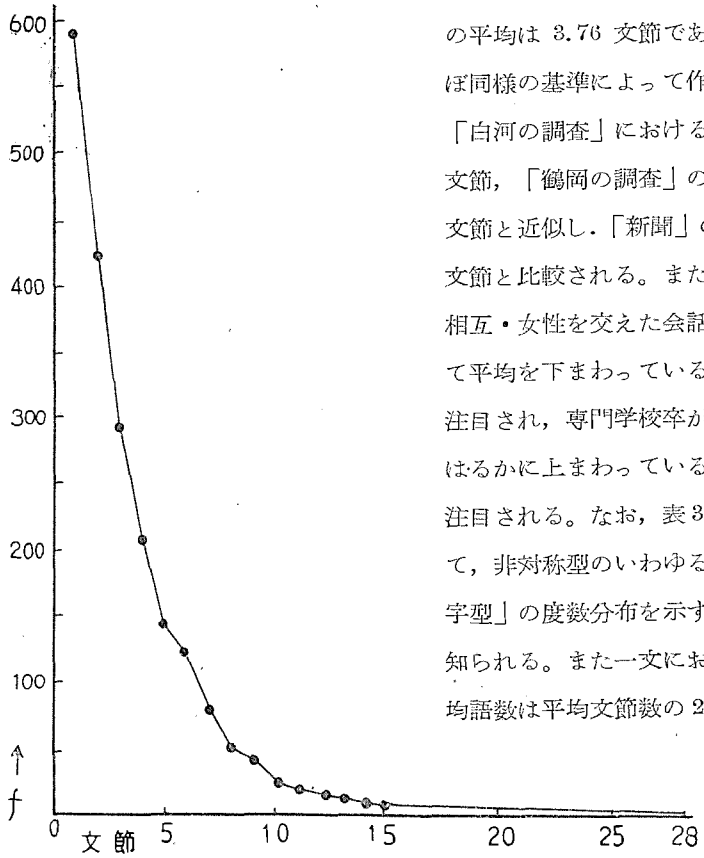
	採集場所	地域性		年令	学歴	人数	親疎	基礎語調
1	美容院	下町中心部	女女	30～45	小中卒	1≧1	未知	でございます
2	井戸端	近郊周辺部	女女	〃	中卒	1≧多	既知	だ，です
3	建築工事場	下町中心部	男男	〃	小卒	〃	〃	だ
4	家庭	近郊周辺部	男男	〃	専卒	1≧1	未知	です
5	結婚式申込所	山手中心部	男女	〃	まじり	〃	〃	〃

〔表 2〕

	文	文節	語	音節
		1文平均文節数	1文平均語数	1文平均音節数
1	149	417 (2.80)	791 (5.31)	1735 (11.64)
2	544	1855 (3.59)	3595 (6.60)	7354 (13.51)
3	596	2307 (3.87)	4953 (8.31)	10046 (16.86)

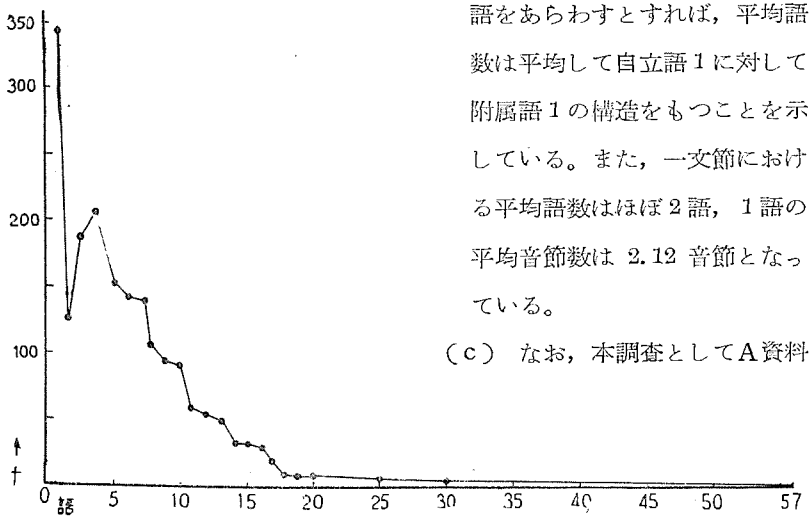
4	498	2259 (4.53)	4482 (9.00)	9802 (19.68)
5	276	930 (3.37)	1755 (6.36)	4040 (14.63)
T	2063	7768 (3.76)	15526 (7.52)	32977 (15.98)
		文節平均	(1.99)	(4.24)
		語 平 均		(2.12)

〔表 3〕 1 文 の 文 節 数



(b) この表によれば，文の長さの平均は 3.76 文節であり，ほぼ同様の基準によって作業した「白河の調査」における 3～4 文節，「鶴岡の調査」の 2～3 文節と近似し．「新聞」の 18.8 文節と比較される。また，女性相互・女性を交えた会話がすべて平均を下まわっていることは注目され，専門学校卒が平均をはるかに上まわっていることも注目される。なお，表 3 において，非対称型のいわゆる「しの字型」の度数分布を示すことが知られる。また一文における平均語数は平均文節数の 2 倍であ

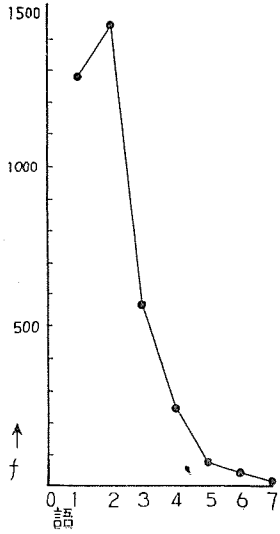
〔表 4〕 1 文 の 語 数



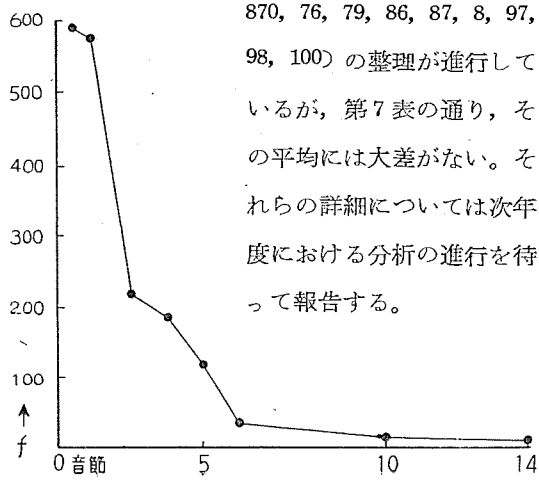
り，平均文節数がおおむね自立語をあらわすとすれば，平均語数は平均して自立語1に対して附属語1の構造をもつことを示している。また，一文節における平均語数はほぼ2語，1語の平均音節数は 2.12 音節となっている。

（c） なお，本調査としてA資料群のうち18巻〔Reel. 2, 3, 15, 24, 59, 61, 62, 66, 67, 870, 76, 79, 86, 87, 8, 97, 98, 100〕の整理が進行しているが，第7表の通り，その平均には大差がない。それらの詳細については次年度における分析の進行を待って報告する。

〔表 5〕 1 文節の語数



〔表 6〕 1 語の音節数



〔表 7〕 文・文節・語の長さ

種類	文の総数	文節の総数	語の総数	音節の総数	一文における 平均文節数	一文における 平均語数	一文における 平均音節数	一文節における 平均語数	一文節における 平均音節数	一語における平均音節数
本調査(18巻)	10118	38606	77520	163757	3.81 (3.13～5.49)	7.66 (6.12～10.78)	16.15 (13.09～23.34)	2.01 (1.88～2.14)	4.24 (3.96～4.50)	2.11 (1.97～2.31)
準備調査(5巻)	2053	7768	15526	32977	3.76	7.52	15.98	1.99	4.24	2.12

(d) 次年度においては進行中の本調査を終了し，日常談話以外の資料，ラジオのニュース，ニュース解説，座談，講演などを採集して，その長さを調べ，これと談話との異同を比較する予定である。

(注) 「白河の調査」「鶴岡の調査」「新聞」はそれぞれ
言語生活の実態——白河市および附近の農村における——(国立国語研究所)
地域社会の言語生活——鶴岡における実態調査—— (〃)
新聞文章研究第一段階「新聞文章の構成調査」(朝日新聞社 新聞用語改善委員会)を示す。

2. 文の構造の調査

日常の談話における文の構造はどのようなものであるか，またその特徴はどのような点にあるかを明らかにするのが，この調査の目標であるが，そのために年度内に行った作業とその成果の一端は次の通りである。

(a) 文の構造についての従来の内外の諸説を収集，検討し，その結果として，文の構造を調査するためには，主語・述語・連体修飾語・連用修飾語・独立語などの文の成分を単位とし，これら5成分の組合わせにより，文の構造を考えることが妥当であろうとの結論に達した。なお，連体修飾語は文の構造という面からは主語や連用修飾語と同格に取り扱うべきではなかろうが，構造の特徴を調査する上からは重要な成分と思われたので，ここでは一応それをも含めて5成分を取り扱うこととした。

(b) これらの五つの成分については，さまざまな考え方があるので，それらのうちから一応「中等文法」の線に沿うこととし，文節と文節との関係

を重視することとした。なお，これらの5成分の組合わせだけを考えたのでは，より細かな分析に堪えられないので，それらを，さらに下位分類した。

その分類およびそのコードは以下の表の通りである。

〔表 8〕 5 成分，および下位分類1けた目のコード

5 成 分		下位分類1けた目（独立語を除く）		下位分類1けた目（独立語の場合）	
主語	a	体言	1	接続を表わす 順接	1
述語	b	動詞	2	接続を表わす 逆接	1
連体修飾語	t	形容詞	3	同格を表わす	2
連用修飾語	y	形容動詞	4	感動を表わす	3
独立語	d	副詞	5	間投を表わす	4
		連体詞	6	応答を表わす	5
		接続詞	7	呼掛を表わす	6
		感動詞	⑦	提示を表わす	7
		助動詞	8		
		助詞	9		

〔表 9〕 主語・述語の下位分類2けた目，および述語の下位分類3けた目・4けた目

a		b	
主格を表わす助詞がない	0	～です・～ます・～だ などの語を伴わない	0
～は	1	～です・～ます	1
～が	2	～だ	2
～も	3	～です・～ます・～だ に相応する他の語	×
～の	4	（以上下位2けた目）	
～では	5		
～には	6		
その他の主格を表わす助詞	×		

助辞がない	0		
～ね	1	～わ	6
～よ	2	～って	7
～か	3	～さ	8
～の（終助詞）	4	～た	9
～な（終助詞）	5	その他	×

（以上下位3，4けた目）

〔表 10〕　連体修飾語の下位分類 2 けた目
連用修飾語の下位分類 2 けた・3 けた目

t		y			
連体格を表わす助辞がない	0	連用格を表わす助辞がない			00
～の	1	～に	01	～が（接続）	15
～ん	2	～ん	02	～ので	16
～た	3	～を	03	～から（接続）	17
～的	4	～と	04	～ば	18
他の助動詞	5	～え	05	～たら	19
他の助詞	6	～い	06	～ても	20
		～から	07	～なら	21
		～で	08	～たって（逆接）	22
		～より	09	～だって（逆接）	23
		～て（で）	11	～でも（逆接）	24
		～と（接続）	12	～でも	25
		～けれど（けど）	13	～と（も）（逆接）	26
		～のに	14	その他の助動詞	80
				その他の助詞	90
				以上の他の語	XX

〔表 11〕　主語・連体修飾語の 3 けた目
独立語の 2 けた目，連用修飾語の 4 けた目

間投助詞がない	0	～な	4
～ね	1	～さ	5
～ですね	2	～よ	6
～だね	3	他	7

（注）(1)　これらの語に他の語が付いており，その付いている語がコードされないときは ′ をもって示す。　例　ワタクシダケガ……a 1′20

(2)　述語などの場合に多くの助詞・助動詞が付いているときは，文の末尾より優先的にコードする。　例　行キマセンデシタカネ……b 2′1′31

(3)　形式名詞・補助用言などを含む文節（附属の関係にある文節など）は連文節においてその機能を考える。
（形式名詞は m．補助用言は f．てる，てく，ちゃう，は F とコードする。
例　猫デアル……bf 2000）

(4)　成分はすべて第一次の関係による。　第二次は（　）第三次は〔　〕第四次は「　」とする。

第二次・第三次中に第一次があるときは（//）〔//〕とし // の中のものが第一次であることを示す。

（a　　y）　　b y　　a　　b
ジブンガ　シゴトオ　スレバ　オカネガ　ハイルンデスヨ。

この場合，同時に二つ以上の関係を持っているものは，たとえば上記の……
b y
スレバ……のように表わす。

(5)　y・a などが一文に二つ以上あるときは，原則として，前のものはそれ以下にかかる（対する）ものとする。

y　　y　　b
例　アラタメテ　ハナシオ　スル

a　　a　　b
グンビワ　ヒツヨー　ナイデス

しかし場合により 1，2，3……イ，ロ，ハ…… などの順位をつけることがある。このとき1は2以下を修飾する。（または2以下に対して主語となる）

1 y　　d　　2 y　　b
キノー　アノー　アナタニ　アゲマシタ

(6)　t は原則として次の文節を修飾する。しかし次の文節ではなく，被修飾の文節がはなれているときは，1，2，3，などの数字により示す。

-1 t　　d　　2 a
キミノ　ホラ　ハンカチワ

y　　2 a　　b　　1 t
キョー　テガミガ　キタノヨ　ドーソーカイノ

t が二つ以上重なっているときの取扱いは，y に準ずる。

t　　t　　a
アナタノ　アカイ　ハンカチワ

(7)　同格・対立などの関係，提示の関係などは，次の例のように，数字・かななどの符号をもって示す。

d2①　　a①　　y　　b
キミト　ボクガ　ソレオ　シヨー

（y　　）　　b d2①　　y　　b①
カイシヤニモ　ユクシ　ガツコーニモ　イク

(8)　一般には，主語・連用修飾語の形であるものが，その文では述語としての機能を果している場合には，次のように示す。

a　　b
ヤタケサンガ　イクンデスツテ

a b
ヤタケサンガ？

（ a ）　　b. yb
モンダイガ　アルヨーデスケドネ

(9) 聞きとれない場合，あるいは，何らかの妨害により，文が中断された場合などは，それぞれ……や——をもって示す。また前記 (8) のような場合には，ooooooをもって示す。これらのものはさらに別に考慮することにした。

この方法で，橋本進吉博士の「文節による文の構造について」(『国語学』第十三・十四輯) の例文をコードすれば次のようになる。

(y 1030) b.t 230 a 110 b 2009
① 不意を くらつた 敵は あはてた。

d 20① t 600① a 120 bf 2000
② 白く 大きな 木星が 見えてゐる。

([「t 110 y 1030」 by 2110」 bt 200) t 110 y 1900)
③ 千古の 雪を 戴いて そそり立つ 富士の 姿ほど

bam 110 b 210×
崇高なものは ありません。

a 120 y 1030 b 2000
④ 飛行機が 空を 飛ぶ。

a 110 d 20① y 1040① b 2009
⑤ 彼は 風や 波と 戦ひ通した。

d 20① d 20① a 110① t 110 ⓑf 2000
⑥ 東京 京都 大阪は 日本の 三大都市である。

a 110 y 1070 y 1010 y 1030 b 2109
⑦ 先生は 戦地から 私たちに お手紙を 下さいました。

d 60 a 110 y 1080 y 5000 bf 2000
⑧ 佐藤さん あなたは ここで 暫く お待ち下さい。

(a 120) bam110 (y 1010) b y 2200 b 1200
⑨ 春が 来ることは 誰に とつても 喜びだ。

d 20① (y 1010) bft 230① a 120 bf 2000
⑩ 重苦しくて 寒さに ちゞこまつてゐた 冬が 去つてゆく。

(y 1'040) bft 230 t 110 a 120 y m101'0
⑪ 灰色だと 思つてゐた 畑の 土が いつの間にか

(a 140) bt 200 t 230 t 1010 bf 2000
うるほひの ある 黒ずんだ 色に なつてゐる。

t 110 a 110 (y 1010) by 2120 t 110 y 1070 (1030) bt200
⑫ 私の 村は 夜に なると 所々の 家から 藁を 打つ

t 110 t 120 b 2000
槌の 音が 聞える。

(y 1900 y 4000) bft 230 a 110 (y 400〔t 300〕
⑬ そこまで 元気に 飛んで来た 彼等は 急に 寒い

t 110 y 1050) b y 2110 y 3000 bf 2009
気温の 中へ 入つて 全く 弱つてしまつた。

⑭ t110 彼等の　t300 かぼそい　t300 小さい　y101′0 体には　tm110 その時の　t110 ウイーンの　a110 気候は　ⓑmf2009 たへ難いものであつた。

⑮ (y1010) 大江山に　bfy 2120 来て見ると　(〔a140〕 bt200 鬼の　y1900〕 住む　by2110 処だけ　あつて　〔a120 大木が　y5000〕 こんもり　by2000 生ひ茂り　y1240〕 昼でも　by3110) 薄暗くて　bt300 ものすごい　b1109 山でした。

⑯ (d20① t300①) 永い　永い　t110 冬の　y101′0 後には　t110 これらの　a120 花が　y1010 一度に　b2′200 咲き出すのだ。

（c） 前項のコードにより，まず録音テープ5巻を選んで，その文の構造を調査した。その結果の一部は次の通りである。

〔表　12〕

略称	文の数	型の種類 (%)	主語を含む文 延(%)	倒置 延(%)	二次以下の成分 延(%)	成分六以上 延(%)
学生座談(1)	400	112 (28.0)	116 (29.0)	41 (10.3)	81(20.3)	14(3.5)
女子学生	563	138 (24.5)	130 (23.1)	29 (5.2)	67(11.9)	36(6.4)
N家座談	353	159 (45.0)	109 (30.9)	28 (7.9)	82(23.2)	33(9.3)
三鷹女工	590	143 (24.2)	126 (21.4)	44 (7.5)	80(13.6)	29(4.9)
友の会	478	168 (35.1)	117 (24.5)	41 (8.6)	88(18.4)	33(6.9)

〔表　13〕

略称	型の種類	主語を含む文 種類 (%)	倒置 種類 (%)	二次以下の成分 種類 (%)	成文六以上 種類 (%)
学生座談(1)	112	62 (55.4)	30 (26.8)	49 (43.8)	13 (11.6)
女子学生	138	71 (51.4)	22 (15.9)	41 (29.7)	36 (26.1)
N家座談	159	79 (49.7)	28 (17.6)	62 (39.0)	32 (20.1)
三鷹女工	143	77 (53.8)	35 (24.5)	58 (40.6)	29 (20.3)
友の会	165	82 (48.8)	37 (22.0)	52 (31.0)	33 (19.6)

以上は，すべて第一次の文の構造による結果である。これによれば，次のようになる。

(1) 文の数が 400～500 の場合には文の型の種類は，その 30% 程度あらわれる。つまり約三つに一つの割合で，新しい型があらわれている。（文の数が少なくなれば，その割合は，もっとひんぱんになることは，もちろんである。）

(2) 主語を含む文は，ほぼ 25% あらわれている。つまり，四つに一つの割合で主語のある文があらわれている。

(3) 倒置（この場合は，主に述語について考えている）は 10% 以内である。

(4) 二次以下の成分を含む文は 20%～10% あらわれている。

(5) 一次の成分が6以上あるものは，10%～5% である。

これを巻ごとの差ということに着目すれば次のようになろう。巻ごとの「話し手，聞き手」の構成は表 14 の通りである。

〔表 14〕

略称	地区	場所	性	年齢	学歴	話題
学生座談(1)	周辺	家庭	男(女)	若	大学在	野球，アルバイト，酒，ビール，写真，すもう
女子学生	周辺	学校	女	若	大学在	修学旅行，先生
N家座談	周辺	近隣	男(女)	壮若	義務教育専門卒	選挙，再軍備，株，戦災，住宅難，カナリヤ
三鷹女工	周辺	職場	女(男)	若	女学校卒	会社と学校との違い，昼休み読書，終戦時の懐旧，仕事
友の会	周辺	近隣	女	若壮	専門卒女学校卒	針箱整理，洗濯，選挙，家計，うわさ話

巻ごとの差に着目すれば，型の種類は「N家座談」や「友の会」など比較的年齢の高い人々に多い。主語を含む文は「学生座談」や「N家座談」など男子にやや多く，倒置の文は「学生座談」にやや多いことが注目される。二次以下の成分を多く含んでいるのも「N家座談」や「学生座談」に多く，反対に「女子学生」や「三鷹女工」のように若い女性にはすくない。成分6以

上の文は「N家座談」に割合に多い。

以上は5巻だけについての結果であつて，一般的な結論とはし難いが，文の構造と，性・年齢・教養・話題・個性などとの間には何らかの相関があるらしいことがうかがわれる。

（d） 文の型の種類と，その一つ一つの使用度数についても調査を行つたが，5巻だけではまだ不十分なので，これについては，さらに調査例を加えた後に報告することとしたい。

（e） 本年度は分析のために多くの日時をさくことができなかつたので，明年度は引続き次の課題について分析を進める予定である。

(1) 話し言葉の文の構造の型の種類と，その一つ一つの型の使用度数を，本年度分を合わせて計15巻について調査する。

(2) その構造の型の種類や使用度数と，「はなし」の環境，話題，話手・聞き手の社会的，文化的条件などとの関係のおよそを調査する。

(3) 主語・述語・連体修飾語・連用修飾語などの構成のしかたや，用いられかたなどを調査する。

(4) 文脈が途中で変るもの（乱れるもの），二人で一文をなす場合，途中で完結しないままに文を終るもの，言いなおし，不完全な形式の文など，話し言葉の特徴の一部分をなすと思われるものの追求も来年度に予定されている。

3. イントネーションの調査

日常談話におけるイントネーションを調べることを目標とし，そのために年度内に行った作業とその成果の一端は次の通りである。

（a） イントネーションに関する参考文献を調べ，イントネーションの型のうち，主として文末の2音節に注目することにした。文末をとる理由は大体，金田一春彦「コトバの旋律」（『国語学』第五輯）における考え方と同様である。従って文中における息の切れ目（大体文節の終り）も問題とす

る。また終りの2音節をとるのは，国語におけるイントネーションの重要な点がここにあり，これで大体の見当がつけられると考えたわけである。

なお，イントネーションをどのように表示するかについてはいろいろの方式があるが，本年は K. L. Pike "The Intonation of American English" にならい，高さに4段階を認めた。音の高さのうち一番高いものを 1，次のものを 2，その次を 3，最も低いものを4で表わす。

これは国語のアクセントの上が2に，下が3に当り，その上下に1と4とが当てられることになる。

（b） 録音テープを担当者がくり返し耳で聞きとりながらイントネーションを記入する方法によった。これに使用した材料は10巻で，発言者の性別・年齢(老・若)・生育地域（東京の下町・山の手・周辺）などを考慮し，片寄りの少いように努めた。

10巻の内訳は次の通りである。

Reel 2	女子学生	Reel 3	I 夫妻
〃 59	松根屋	〃 61	学生座談（2）
〃 67	N家座談	〃 79	無尽の会
〃 86	トタン屋	〃 93	魚屋雑談
〃 97	U 氏談	〃 100	柳橋美髪

（c） 集計の結果は表15の通りである。文末のイントネーションの型の種類は 42で，文中の切れ目の場合は 32 種類である。なお，電圧が低かったり二人が同時に発言したりした場合に聞きとれないものが若干あった。これははぶいてある。一音節よりも短いように思われる発音が認められた場合には，その高さを小字で表わした。

文末のイントネーションと文中のイントネーションとの合計の‰（千分比）を調べて，それが 10‰ 以上になっているものは 21, 22, 22_3, 23, 31, 31_2, 32, 32_3, 33 の九つである。このうち 33 が最も多く，32, 31, 22 がこれに次いでいることは注目される。

なお〃デショ〃，〃デショウ〃の発音は区別の難かしい場合が多かったので，かりに2音節として扱った。

〔表 15〕 話し言葉のイントネーションの型と分布

型	文末		文中		合計	
		%		%		%
1	21	4.99	6	2.81	27	4.26
1_1	1	0.24			1	0.16
1_2	4	0.95	4	1.88	8	1.26
1_3	4	0.95	1	0.47	5	0.79
11	10	2.38	2	0.94	12	1.89
11_2	3	0.71			3	0.47
11_3	3	0.71	1	0.47	4	0.63
12	11	2.62			11	1.74
13	5	1.19	3	1.41	8	1.26
2	35	8.32	10	4.69	45	7.10
2_1	2	0.48			2	0.32
2_3	1	0.24			1	0.16
21	130	30.91	82	38.44	212	33.44
21_1	3	0.71	2	0.94	5	0.79
21_2	19	4.52	19	8.91	38	6.00
21_3			1	0.47	1	0.16
22	382	90.82	262	122.83	644	101.59
22_1	8	1.90	3	1.41	11	1.74
22_3	61	14.50	126	59.07	187	29.50
23	421	100.10	189	88.61	610	96.23
23_1	17	4.04	7	3.28	24	3.79
23_2	21	4.99	19	8.91	40	6.31
23_3	1	0.24			1	0.16
3	2	0.48	1	0.47	3	0.47
31	533	126.72	114	53.45	647	102.07
31_1	4	0.95	1	0.47	5	0.79
31_2	53	12.60	12	5.63	65	10.25
31_3	14	3.33	9	4.22	23	3.63
32	686	163.10	461	216.13	1147	180.94
32_1	13	3.09	4	1.88	17	2.68
32_2	12	2.85	1	0.47	13	2.05
32_3	181	43.03	313	146.74	494	77.93
33	1494	355.21	467	218.94	1961	309.35
33_1	7	1.66	1	0.47	8	1.26
33_2	7	1.66	9	4.22	16	2.52
33^4	3	0.71			3	0.47
34	21	4.99			21	3.31
4_2	1	0.24			1	0.16
42	7	1.66	1	0.47	8	1.26
42_3	1	0.24			1	0.16
43	1	0.24	1	0.47	2	0.32
43_2	1	0.24			1	0.16
44	2	0.48	1	0.47	3	0.47

（d） 今後に残された問題のうち重要なものを述べると，日常会話のほかに特殊な型（あるいは型の分布）が出るかもしれないと思われる，ニュース，ニュース解説，（劇や講談，落語）などについても調べる必要がある。

文末については，だいたい最後の一文節の言葉をとり，特に終助詞などとイントネーションとの関連も見たい。

発言者別にイントネーションの型の分布を調べ，さらに進んで場面との関係にまで及びたい。

できればピッチレコーダーなどの器械によって，音の高さを調べて，耳で聞いたものと比べてみたい。

4. 品詞のあらわれかた

語に関する問題の調査の最初に，品詞によって語を分けて，それが，どんな数量において用いられているか（使用度数の割合）を調べてみることにした。書き言葉については，小説の文章，新聞の文章等を対象として，この種の調査がいくつか行われているが，話し言葉については，児童語についてのわずかの調査のほか，それに類するものを見ていない。今，話し言葉の一類としての日常談話について，この調査をしてみることは，話し言葉の実態の一面を明らかにするものとして，また特に書き言葉と対比してみることによって，話し言葉の特性を明らかにしようとする試みの一つとして意味のあることと思ったからである。

（a） この作業のための資料としては，A資料群から下の20巻を選んだ。

（リール番号をもって示す）

2	3	15	24	57	59	61	62	66	67	70	79
86	87	88	97	98	100	104					

（b） 各語の品詞のきめ方については，主として 文部省発行「中等文法」，その他，橋本進吉述「新文典別記口語篇」，岩淵悦太郎編「図表国文法」，国立国語研究所報告3「現代語の助詞・助動詞」，金田一京助編「明解国語辞典」等を参考にし，調査資料の言葉の分析検討にもとづいて基準を立て，

各語の品詞を決定し，集計を行った。

〔結果〕 調査した総語数は 83,620 で，これを品詞別にして総使用度数の百分比を見ると，次の通りである。

〔品　詞〕	〔百分比〕	
体　言	20.5	
名　詞	16.2	
代名詞	2.6	（うち，コソアド語　70.3%）
数　詞	1.7	
動　詞	12.2	（うち，補助動詞　12.3%）
形容詞	2.7	（うち，補助形容詞　15.7%）
形容動詞	1.2	（うち，コソアド語　19.5%）
副　詞	6.1	（うち，コソアド語　29.2%）
連体詞	0.8	（うち，コソアド語　92.4%）
接続詞	1.9	
感動詞	4.7	
感動詞 Ⅰ	1.0	
感動詞 Ⅱ	1.9	
感動詞 Ⅲ	1.7	
助　詞	34.7	
助動詞	12.9	
融合形	2.3	
自立語合計	50.1	
付属語合計	47.6	

（注　融合形 2.3% を加えて総計 100%となる）

コソアド語合計	4.6

（注） 1. 補助動詞・補助形容詞は，橋本進吉「新文典別記上級用」に準じて，次のようなものに限定して採った。

(1) 涼しくありません，　おじょうずでいらっしゃいます，　陽気でございます，　おもしろくない，　丈夫ではない　の類。

(2) 私ではありません，　五時でございます，　これではない　の類。

(3) おたずねいたします，　おとどけ申します，　おいでくださる，　お帰りになる　の類。

(4) 聞きはしたが見はしない，　行きさえすればいい　の類。

(5) 降っている，　見てくる，　読んでおく　の類。

2. 感動詞の分類は次のとおりである。

感動詞Ⅰ—感動を表わすもの。

感動詞Ⅱ—呼びかけ・応答に用いるもの。

感動詞Ⅲ—つなぎの語「えー」「そのー」「あのー」の類。「うー」「おー」等，語として算えるのに疑問のあるものも，一応すべて採った。

「あー」「はー」「ふーん」等，感動詞Ⅰ・感動詞Ⅱの両方に属せしめることのできると思われるものの場合は大体感動詞Ⅰに入れる方針を採った。

3. 融合形の範囲は，従来の大部分の文法書に従えば単語と認めがたく，品詞の定めがたいもので，次に掲げる「融合形の種類と使用度数」の例に見られるようなものとした。

融合形には，どのようなものがあるか。一応，次のような分類によって整理した。大体においてその融合形に対応する融合以前の形と認められる二語以上のつながり，すなわち，ていねいな言い方や書き言葉（会話文を除く。）でそれに対応して用いられる語のつながりを品詞について見て，その種類によつて分類した。

結果は下記のとおりである。

融合形の種類と使用度数

名詞＋助詞	40
例　こんだー（今度は），　なによー（何を）	
コソアド代名詞＋助詞	115
例　ありゃー（あれは），　そりょー（それを）	
その他の代名詞＋助詞	19
例　ぼかー（ぼくは），　わたしゃー（わたしは）	
動詞（補助動詞を除く）＋助詞	57
例　みりゃー（見れば），　すん（するん）	
補助動詞＋助詞	11
例　おきゃー（おけば），　くれん（くれるん）	

形容詞（補助形容詞を除く）＋助詞	2
例　なけりゃー（なければ）	
補助形容詞＋助詞	11
例　なけりゃ，なきゃ（なければ）	
形容動詞＋助詞	6
例　きれえじゃー（きれいでは）	
助詞＋動詞（補助動詞を除く）	65
例　ともー（と思う），　ってっ（って言っ）	
助詞＋補助動詞	1047
例　てる（ている），　ちまう，ちゃう（てしまう）	
助詞＋補助動詞＋助詞	30
例　てりゃー（ていれば），　てん（ているん）	
助動詞＋助詞	344
例　にゃー（ねば），　なけりゃー（なければ）	
助詞＋助詞	139
例　ちゃー（ては），　なー（のは）	
その他	18
総　数	1904

（c）品詞別使用度数を一覧して，従来の書き言葉についてのこの種の調査に比較してみて，名詞の少ないこと，コソアド語の多いこと，感動詞の多いこと，副詞の多いこと，接続詞の多いこと，融合形の多いこと等が著しい特徴として目につく。

さらに数表の上には現れていないが，調査の過程において，次のような諸点に問題のあることが察知された。

(1) 接続詞ないし接続語の使い方
(2) 副詞の種類とその使い方
(3) 助詞の種類とその使い方　等

以上のような，数表の上に現れた問題，現れない問題，いずれも，話し言葉の実態上の特徴をなし，その特性を示す要素であると同時に，話し言葉の技術の点から見る時，それぞれに重要な内面的関連をもつところであり，したがつて話し言葉の技術の改善の上にも関連するところのある問題である。それゆえ，これらの問題について，さらに掘りさげて調査をすることは必要である。

（d） 昭和28年度は，語に関する調査の継続としては，27年度の調査の発展として，次のような作業を予定する。

(1) 品詞別使用度数を性別・年令別・教養別等によって調べてみる。
(2) パブリック・スピーチ等について品詞別使用度数を調べ，日常談話との異同を見る。
(3) 融合形の種類と構造について調べる。
(4) 接続詞・副詞・助詞等の種類と用法について調べる。

（中　村）

婦人（生活）雑誌の語彙の調査研究

A. 調 査 の 目 的

この題目は，現代の書き言葉における共通語の語彙を調査する一段階として設けられたものである。作業は，昭和25年度後半からの継続である。国立国語研究所報告4『現代語の語彙調査　婦人雑誌の用語』参照。

B. 前年度までの作業経過

昭和25年度には，雑誌『主婦之友』の昭和25年1～12月の12冊に現われることばを調査対象として標本調査を行うこととし，準備作業，予備知識の収集，調査単位の決定，雑誌各ページの記事別層への組分け，記事別台帳の作成，全体の語数の推定，標本の抽出，等を行った上，カード約15万を採集し，それに点検，修正を加えた。

昭和26年度には，『主婦之友』のカードについて整理・集計（採集カード排列，層別度数表作成，集計カード作成）をする一方，新たに雑誌『婦人生活』の昭和25年1～12月の12冊の実用記事に現われる語を対象とし，『主婦之友』の場合と同様の準備作業を経て，カード約6万（内1万は助詞・助動詞）を採集した。（『主婦之友』の場合は手書きによったが『婦人生活』ではリプリント法によった。）そして，『婦人生活』のカードの整理・集計を終えたところから，『主婦之友』と『婦人生活』の両方の結果を集合して，基礎度数表を作成し，ほぼ完了した。

C. 本 年 度 の 計 画

1. 語彙表の完成
2. 分　析

a．使用率に関する統計解析
b．意味論上の分析
c．語構造の分析
d．助詞・助動詞についてのカードの整理・集計および結果の分析

3. この語彙調査の標本に現われた漢字に関する調査

4. 報告書の執筆および公刊

D. 担　当　者

第1部第2研究室において，次の5人の所員が共同した。

林　大　　永野　賢　　大野弥穂子　　斎賀秀夫　　水谷静夫

なお，臨時筆生6人が所員を助けた。

E. 実　施　経　過

1. 語彙表の作成

前年度につづけて基礎度数表を完成し，その表から，標本度数9以上の語を統計上の理由に基づいて拾い出し，五十音順語彙表の本表および別表（接頭接尾要素の表）を作った。また，集計カードを利用して，使用率順（度数順）語彙表を作った。

2. 分　　析

語の使われる度合に関して水谷，意味の問題に関して林，大野，語構造に関して斎賀，助詞・助動詞の用法の分析に関して永野が，それぞれ主として分担した。その成果は，『報告4』の第4～7章に述べてある。

3. 漢字に関する調査

表記の実状を調査することも，本来この婦人雑誌の語彙調査の目標の一つである。今年度の調査では，調査範囲を，語彙調査において抜き出された標本の全体とし，表記に関する諸問題のうち，漢字の種類及び用法，送りがなのしかた，漢字とかなとの書きわけを，主眼点とした。

（方法） 1. 語彙調査で完成していた基礎度数表の，それぞれの見出し形ごとに，採集カードにもどって表記の種類及び度数を調べ，新たに「表記台帳」を作ってそれらを記入した。

2. 集計整理をレミントンランド会計統計機械によって行うこととし，そのために穿孔カード(45けた)用の製表台帳のＡＢ両様式を作った。この方法ではすべての調査項目を数字化する必要があるので，漢字音訓番号簿，コード早見を準備した。

3. 漢字音訓番号簿は，現われる可能性のあるものとして約 6000 字をとり，康熙字典における排列の順に４けたの番号を与え，一々の音訓に３けたの分類番号を定めたものである。但し，その原本は，一々の漢字につき一枚一枚のカードに記してあるが，「漢字音訓番号簿」として謄写印刷したものでは，上の 6000 字中から，主として当用漢字表（1850字），日本基本漢字（大西）（3000字），漢字熟語調査（朝日新聞）（2800字）に現われた漢字約3000字を選び出し，それぞれの代表的な音または訓の一つについて五十音順に排列した。なお，最初の 6000 字は，日下部重太郎氏の『現代国語思潮』続編附録に見える実用漢字5675字を台として，選定した。実際は 6068 字になったが，調査中に更に17字を加える必要が生じて，それらの漢字には 9001 以下の番号を与えた。また，音訓の見出しは，『新撰漢和辞典』（宇野・長沢）によった。（しかし，この辞書の音訓をとったことは，実際の作業を経てみると，現代語の実状を知るための台帳としては適切ではなかった。）

4. 製表台帳Ａは，穿孔カードを穿孔するための原簿で，両者体裁を等しくする。即ち，基礎度数表の見出し形の通し番号（５けた），漢字の番号（４けた），音訓の番号（３けた），見出し形の中のその漢字の位置のコード（１けた），複合の相手方に関するコード（５けた），各層の度数(21けた)，送りがなに関するコード（２けた），かながきの有無に関する

コード（3けた）である。この製表台帳には，表記台帳の記載を，漢字1字ごとに，音訓番号簿及びコード早見によって数字化しつつ，転記したのであるが，この際，別人の手によって平行的に製表台帳B（Aと同様式で，ただ度数記入の部分を除いてある）を作り，両者の読合せによって数字化の誤りを発見し訂正することを図った。

5. 記入と校正の終った製表台帳を，総理府統計局内日本統計協会に依託し，穿孔カードへの穿孔，分類，集計及び製表を行った。結果として，番号順度数表，層別度数順表（4面），送りがな表の3類6表を得た。

6. 統計協会で作られた表は，すべての調査項目が数字で表わされているままであるので，これを反訳する必要がある。年度末においては，5表について反訳をほぼ終えている。なお，標本に現われた漢字の種類については，『報告4』の第9章に一覧表が掲げてある。

4. 報告書の執筆および公刊

28年2月上旬に原稿がまとまり，国立国語研究所報告4『現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』として3月末に刊行された。（B5，本文338ページ）

報告書の内容はあらまし次の通りである。（報告書の「はじめに」に附記されたものを再録する。）

§1 調査の輪郭　書き言葉としての語彙の実状を知るために，まず雑誌を材料とすることとし，婦人雑誌のうち日常生活的な記事に重点のある種類から，『主婦之友』と『婦人生活』を選んだ。両方とも昭和28年の12箇月分（『婦人生活』は実用記事の部分だけ）を調査対象として，一定の割合で記事の種類ごとにページを抜き出し，抜き出されたページの本文に現われる語をすべて，カードに転写して調査した。

§2 方法　それぞれの雑誌についての知識の収集に努めるとともに（§2・1），調査そのものの準備として，必要な作業を始めた。まず，語を数える場合の「語」というもものの解釈を一定にするように原則を定め（§2・21），「語」を全紙面から抜き出すために，ページを単位にとり（§2・22），記事を内容から組み分けして，四つの層（第二次の分け方では十五の層）とし（§2・23），抽出作業の前提となる記事別台帳を作り（§2・24），調査対象全体の延べ語数を推定した（§2・25）。そして，全体三千

七百ページ余りから，実際に語を収集すべき七百ページ余りを選び出した（§2・26）。

次に，選び出されたページを，取り扱いやすい形態に本誌から抜き取り，そこに見られるすべての語を，用例とともに一々カードに採集した。カードの記入は，『主婦之友』の場合には手書き，『婦人生活』の場合には謄写印刷法によった。いずれの場合も，カードの出来をよくするためには，品質管理の考え方を採用した（§2・3）。

出来上った「採集カード」は五十音順に整理し，語ごとに集めて，枚数（使用度数）の勘定などの結果を別の「集計カード」に転記した。お・ご・み，その他の接頭接尾的要素については第二次的に，また『婦人生活』における助詞・助動詞については別に，整理を行った（§2・4）。

集計は「集計カード」によって行い，抜き出された語の使用度数の総和を算定し，それぞれの語の使用率（使用度数の総和すなわち延べ語数に対するその語の使用度数の割合）を，各層及び実用記事・全記事について推定した（§2・5）。

このような推定のために「基礎度数表」を作り，各語の標本度数が層ごとに，また全体として見られるようにした。これに基づいて，標本度数9以上の語を拾い出し，§3・3 に掲げる語彙表の形とした。（表に掲げる語の範囲を度数9以上としたのは，統計理論上のある理由による。）また集計カードを使って使用率順の語彙表を，各層および全体について作った（§2・6）。

§3　語彙表　五十音順語彙表及び使用率順語彙表そのものを掲げ，表の性格及び表の見方を述べた。

§4　語の使われる度合に関する分析——分析の1　語の基本度函数とでもいうべきものを作る第一歩として，三つの問題を取り上げた。第一に（§4・1），使用率の大小で語の等位を定める方法について，一つの理論を提出し，それを婦人雑誌に適用してみた。またそういう等位の格づけに，どんな用途があるかをも，実例によって述べた。第二に（§4・2），基本度を考えるまた一つの目安としての「語の使われる広さ」につき，欠陥の多い HORN などの考え方に代る新しい物さしを提案し，婦人雑誌実用記事に適用してみた。ただし，仮に《散らばり度》と呼ぶこの metric は，まだ標本分布を明らかにし得ないので，未完成のものである。第三に（§4・3），使用率の分布を調べた結果，使用率 p の分布函数は，p がごく大きい所と小さい所とを除けば，統計的に定まる二つの Parameter をもって近似的に $F(p)=p/(ap+b)$ で表現出来ることが分った。しかしこれについても，なお色々な問題が残っている。

§5　意味上の分析——分析の2　度数5以上の語約四千三百について，それらの語があらわす意味の世界の分野を，分類語彙表の形で示すことを試み（§5・1），意味分析の例としては，少数の語をあげるに止めたが（§5・2），そのうち最も使用率の高い動詞の《する》については，その用法の細かい分類を掲げた（§5・3）。

§6　語構造上の分析——分析の3　標本に現われたすべての語の中から，字音要素をその構成の一部または全部として含む語をとりだし，それぞれについて語の形式

的な構造を検討した。この調査は，最終的な結果を得てはないが，一往，婦人雑誌に現われた漢語としての，構造上の見通しをつけた。

§7 助詞・助動詞——分析の4　すでに公刊されている 国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞』(昭和26年) の記述を台帳として，『婦人生活』の実用記事の中から，ランダム抽出により 9795 例の助詞・助動詞を抽出し，語別に，また，各用法ごとに，使用度数を調査し，それぞれに用例を附して一覧表を作った。この種の標本抽出による助詞・助動詞の度数調査はこれが始めての試みである。他の種類の記事との比較はできないが，いくつかの点で，実用記事文の特徴を見てとることができる。

§8 反省　この調査で行われた作業は，多くの場合，新たに方針を立てて手を下したものである。それゆえ，経過を省みれば，よく将来の基準となるべき点のあることを信ずるとともに，なお改善すべき面のあることを認めない訳にはいかない。いま語彙表作成までの過程について，それらの反省を，調査対象，調査単位，層別法と抽出法，整理と集計，語彙表，運営の各項にわたって述べた。

§9 漢字調査　標本に現われる限りでの漢字について，附帯的に調査を行ったがここにはその結果の一部として，現われた漢字の種類を示す表を掲げた。

F. 次年度の見通し

本年度の作業のまとめとして，漢字調査の結果を整理することが残されている。新しい作業としては，なるべく広い範囲の資料群について同時に有効な語彙調査にとりかかれるように，婦人雑誌の語彙調査でとられた方法を，全面的に検討するとともに，新しい調査のパイロットサーヴェイとして，総合雑誌を資料とする作業を計画している。

(林)

地方言語の敬語に関する調査

（地方調査員に対する委託調査）

A. 調査目的と調査課題

1. 調 査 目 的

この調査は，共通語の敬語と方言の敬語とがからみあって複雑な様相を呈している地域社会の敬語使用の実態を全国にわたって明らかにし，一般に，敬語問題の解決のための基礎資料を得ようとするものである。

2. 調 査 課 題

この調査の目的を達成するために，課題を次のように設定した。

(1) 一定の場面において，同じ話し手の言い方（敬語）が話し相手によってどのように使いわけられているか。

(2) 同じ言い方でも，地域によって，待遇上の差はないか。

(3) 話し手の年齢によって敬語の使い方に差はないか。

(4) 共通語の言い方がどの程度行われているか。

(5) 個々の敬語形についての地理的分布。

B. 調査研究の担当者

1. 調 査 員

調査員は昭和27年度地方調査員47名である。

地 方 調 査 員 氏 名

県 名	氏 名	勤 務 先	住 所
北海道	芳賀 綏	東京大学文学部大学院	東京都渋谷区常盤松町58田中キミ方
北海道	石垣福雄	札幌北高校	岩見沢市六条西4丁目 札幌市北二条西12丁目1-6
青森	此島正年	弘前大学教育学部	弘前市袋町20
岩手	小松代融一	県立杜陵高校	盛岡市加賀野久保田95

宮城	佐藤喜代治	東北大学文学部	仙台市北三番町63
秋田	北条忠雄	秋田大学学芸学部	秋田市保戸野原町 秋田大学学芸学部内
山形	斎藤義七郎	山形東高校	山形市香町675
福島	一谷清昭	福島県教育調査研究所	福島市松木町52
茨城	田口美雄	県立日立第2高校	水戸市外赤塚388
栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部	宇都宮市住吉町1ノ45
群馬	上野勇	沼田女子高校	群馬県利根郡沼田町810
埼玉	大久保忠国	埼玉大学文理学部	埼玉県北足立郡与野町大戸576
千葉	大岩正仲	千葉大学文理学部	東京都練馬区東大泉町943
神奈川	金田元彦	跡見学園	藤沢市鵠沼3744
新潟	鯵持隼一郎	柏崎高校	柏崎市本町2丁目873
富山	大田栄太郎		富山市城村842
石川	岩井隆盛	金沢大学教育学部	石川県河北郡津幡町字清水ホ313
福井	佐藤茂	福井大学学芸学部	福井市濱新町65
山梨	三谷栄一	甲府市県立図書館	甲府市富士川町6
長野	青木千代吉	信濃教育会教育研究所	長野県更科郡稲里村中氷鉋1089
岐阜	筧五百里	岐阜大学学芸学部	滋賀県東浅井郡湯田村山前267
静岡	望月諠三	静岡大学教育学部	静岡市小鹿1
愛知	野村正良	名古屋大学文学部	名古屋市千種区徳川山町3ノ44
三重	堀田要治	亀山高校	三重県鈴鹿郡亀山町南野村851
滋賀	井之口有一	滋賀短期大学	彦根市芹橋15丁目8
京都	奥村三雄	京都学芸大学文学部	京都市左京区北白川西町81
大阪	前田勇	大阪学芸大学	大阪市東住吉区田辺西之町6丁目34
兵庫	和田実	神戸大学文学部	神戸市垂水区西垂水町神田122
兵庫	岡田荘之輔	豊岡高校	兵庫県豊岡市本町95地
奈良	鈴木一男	奈良学芸大学	奈良市法蓮山添町752ノ6
和歌山	楳垣実	帝塚山学院短期大学	京都市山科局区内九条山17
鳥取	広戸惇	島根大学文理学部	出雲市元宮町
島根	岡義重		島根県簸川郡伊波野村大字富村
岡山	虫明吉治郎	操山高校	岡山県上道郡高島村新屋敷
広島	村岡浅夫	佐伯郡五日市中学	広島県佐伯郡観音村大字屋代121
山口	渡辺保	山口市白石中学	山口市上金古曾2丁目75
徳島	宮城文雄	徳島大学学芸学部	徳島県那賀郡今津村大字島尻932ノ1
香川	近石泰秋	香川大学学芸学部	香川県綾歌郡土器村3936
愛媛	杉山正世	県立今治工業高校	今治市松本通2丁目

高知	土居重俊	高知大学学芸学部	高知市弥生町52
福岡	都築頼助	福岡学芸大学	福岡市原1241
佐賀	小野志真男	佐賀大学教育学部	佐賀市赤松町中館93
長崎	西島宏	長崎大学学芸学部	大村市植松
熊本	秋山正次	熊本大学教育学部	熊本市健軍町県営住宅406号
大分	平松日吉	大分大学学芸学部	大分県速見郡竹築局区内南台
宮崎	岩本実	宮崎大学	宮崎市下水流町190ノ1 宮大宿舎1号
鹿児島	上村幸二	鹿児島大学文理学部	鹿児島市武町965

2. 担当研究室

調査の計画，実施上の事務的連絡，結果の処理は研究第1部第6研究室において，次の5人の所員が担当した。

柴田武　北村甫　野元菊雄　上村幸雄　山之内るり

C. 調査の計画

1. 調査方法

一定の調査票を作成し，全国で329地点，685人の被調査者について，調査員がひとりひとり面接し，調査票の質問形式に従って調査する。

2. 調査項目

調査票に盛られる調査項目は被調査者個人の文化的条件についての項目と敬語についての項目との二つに大別される。

（a） 文化的条件についての項目

現住所，居住経歴，年齢，職業，他の土地との行き来，家族

（b） 敬語についての項目

敬語についての調査項目は，国語審議会：「これからの敬語」（昭和27年5月，文部省）において取り上げられた事項を中心に選定したが，その際，従来問題になっているもので，全国的にかなりいろいろな言い方があると予想されるもの，昭和26年度の地方調査員委託調査「地方言語の語法に関する調査」の調査項目に取り上げられたものであって，その結果と比較できること，

などの点をも考慮した。選定された項目は次のようである。

(1) 自分をさすことば
(2) 相手をさすことば
(3) 敬称
(4) 親族の呼び方
(5) 「指定」の言い方
(6) 形容詞の結び方
(7) 自分の動作についての言い方
(8) 相手の動作についての言い方
(9) 自分に関する事がらの報告
(10) あいさつのことば

なお，敬語についての調査項目のそれぞれについて，原則として，次の五種類の話し相手に対する言い方を調査する。

(1) あまり親しくない目上のもの（被調査者の居住地の小学校の校長）
(2) 近所の顔見知りの，年上のもの
(3) 近所の顔見知りの，同じ年ごろのもの
(4) 近所の顔見知りの，年下のもの
(5) まったく知らない，同じ年ごろのもの

3. 調 査 地 点

各府県7地点（ただし，北海道，兵庫県は14地点，東京都は除く）で，地点選定の基準は次のようである。

(1) 同一郡内に2地点以上を選ばない。
(2) 郡内において，もっともノーマルな地点と認められるものの中から選ぶ。
(3) 地点は村あるいは小さな町の中から選ぶ。
(4) 昭和26年度「地方言語の語法に関する調査」と同じ調査地点はさける。

4. 被 調 査 者

被調査者は各地点2人とし，次の条件にあてはまるものを選ぶ。

(1) 性別：男
(2) 年齢：60歳前後，25歳前後各1人
(3) 居住経歴：調査地点で生まれ，生長したもの
(4) 学歴：60歳前後の人は小学校卒業程度，25歳前後の人は高等小学校卒業程度
(5) 職業：農耕に従事している人

(6) 階層：中流

5. そ　の　他

以上の調査のほかに，調査員は「終助詞による敬意の表わし方」についての各府県の概観的な報告と，「これからの敬語」（前掲）についての意見を提出する。

D. 実　　施

1. 準 備 調 査

調査項目，調査票の検討のために，担当所員が，昭和27年6月山梨県北都留郡上野原町において準備調査を行った。

2. 本　調　査

昭和27年7月，各地方調査員に，調査の「実施要領」（8ページ，別紙1枚）と調査票とを配布した。

本調査は同月より，同年12月までに，全国各地で実施された。

E. 結 果 の 整 理

1. 調査票の回収状況

昭和28年6月現在，調査票658のうち，600（91.2%）が回収された。

2. 調査結果の整理

昭和28年3月から，回収された調査票の整理に着手し，現在進行中である。

（北村）

三重県上野市における敬語の調査

A. 調査の目的

地域社会における敬語行動の実状を明らかにし，敬語行動についての障害を社会心理学的に追求して，どうしたら適切な敬語行動ができるかということを知る。

B. 調査の機構

文部省の科学総合研究費補助金の交附を受け（敬語の社会心理学的研究——代表者：西尾実），第1部第6研究室を中心に，統計数理研究所および国立教育研究所の所員と共同研究の形で調査した。

現地の調査に実際に参加した者は次の通りである。

岩淵悦太郎　柴田武　北村甫　野元菊雄　上村幸雄　山之内るり　島崎稔（以上，国立国語研究所）　林知己夫　石田正次　西平重喜　赤池弘次（以上，統計数理研究所）　島津一夫（国立教育研究所）

C. 調査の課題

(1) 敬語行動が適切でないことのあるのは何が原因か，敬語行動が場面によって違うのは何が原因か。

(2) 共通語社会の敬語意識と方言社会のそれとどのように違うか。

(3) 敬語行動と敬語意識とはどのようにくい違うか。

D. 調査の方法

いままでの敬語研究のように，敬語形式の分類と説明だけでは，われわれの課題に答えることができないので，敬語行動，敬語形式，敬語意識の三者の相関関係を調べることによって敬語のメカニズムを明らかにすることを考

えた。そのために，幾種類もの方法，何回もの調査によって目標へ近づくように計画した。

(1) フィールド・サーヴェイ（field survey）

調査地として選んだ三重県上野市全体の敬語行動，敬語意識などについての概観を得ることを目的とした。

まず，話し手としての言語行動および敬語に関する意識，見解，知識を調べるために，被調査者ひとりひとりを戸別に訪ねて面接し，一定の質問を発して，口頭による回答を求めた。一定の調査票と場面を描いた絵とを用意した。被調査者は250人のサンプルである。（面接調査）

次に，聞き手としての敬語意識と，第三者としての敬語意識を調べるために，被調査者148人（250人からのサブ・サンプル）を一定の場所に集めて，一定の質問を発して，記入による回答を求めた。質問を発するときには，スライド（幻燈機）で一定の場面を見せ，土地の人のことばを録音の再生によって与えた。（集合調査）

(2) グループ・ダイナミックス（group dynamics）

フィールド・サーヴェイで明らかになったことを実験的に検証することを目的とした。

話し手・聞き手としての敬語行動を調べるために，特定の2人ずつ（条件の組み合わせによって得られた人）に自由に談話させ，それを観察し，録音した。そのとき，刻々の談話の適切・不適切を土地の有識者に判断させて，課題(2)に答えることを目ざした。そのために，プログラム・アナライザー（program analyzer）と透視鏡（magic mirror）とを使った。

(3) ケース・スタディ（case study）

フィールド・サーヴェイとグループ・ダイナミックスとで得られた結果が，はたして，われわれが求めようとしていることを調べているかどうかを吟味することを目的とした。

まず，地域社会として類型的と考えられる12の場面で，一定の時間ぶっ通して，そこに行われる談話を録音して，話し手・聞き手としての敬語行動を調べた。（スナップ録音）

なお，特定の個人の一日じゅうの言語行動を調べた。（24時間調査）

E. 調　査　地

調査地としては，近畿地方，中部地方の数箇所を下検分した結果，三重県上野市を選んだ。その理由は次の通りである。

(1) 方言の敬語形式が発達している。
(2) 予備知識がなくても理解しがたいほどではない方言である。
(3) 人口のあまり大きくない都市である。
(4) 大都市の近くでない。
(5) 東京からの行き来が不便でない。
(6) 現地の協力が得られる。

F. 調査の経過

6月　面接調査の項目を検討し，グループ・ダイナミックスの実施が可能かどうかを確かめるために，東京の近くの2地点（山梨県北都留郡上野原，東京都青梅市）で前調査を試みる。近畿地方，中部地方の調査候補地点を下検分する。

7月　調査地点の上野市で下調査——方言の体系的記述，スナップ録音，24時間調査，面接調査のための試し調査，被調査者のサンプリング，上野市の他の地域とのコミュニケーションの調査。

8月　被調査者の社会生活的条件を明らかにするための調査（サンプル1,000人），上野市における場面の種類と度数を知るための観察調査（生活場面の調査）。

10月　面接調査。

12月　集合調査，グループ・ダイナミックス。

1月　集計・分析を始める。

3月　国立国語研究所の発表会で,「地域社会と敬語」と題して，おもに調査の方法について発表。

G. 集計・分析

3月現在，分析が進行中である。翌年度7月までに結果を出し，ふたたび調査を計画，実施して，本年度の結果を吟味する。

（柴田）

文字言語の学習負担についての研究

A. 目　　的

児童生徒（主として小学校と中学校）が文字言語を学習する場合の抵抗・困難・欠陥等の実態とその原因を実証的に調査し，学習負担の軽減と学習能率を高める方法を確立するための基礎資料とする。

B. 研 究 計 画

明治の初期以来国語国字問題として問題解決を望まれてきた点は，現在の文字言語によっては，

（a） 児童生徒の学習負担が重すぎること。
（b） 児童生徒の学習効果があがらないこと。
（c） 日常生活におけるコミュニケーションの手段としては不十分であること。

などであった。最近強く叫ばれている国語の学力低下の問題も，帰するところは，読み書き能力（特に漢字の）の低下を指している。しかしながら，児童生徒が文字言語を学習する場合の抵抗・困難・欠陥は，たんに文字言語そのものの側にだけ責任を負わせるべきではなく，

（a） 児童生徒自身の側。
（b） 文字言語の側。
（c） 学習指導の方法の側。

の三つの側面について考えなければならない。

本研究は，

（a） 児童生徒の示す読みへの抵抗・困難・欠陥の種類および原因の調査
（b） 文字言語のさまざまな形式が児童生徒の学習効果へおよぼす影響
（c） 文字言語のさまざまな形式の改良と学習指導の改善への実験的な試み

の順序で行う計画である。

C. 担　当　者

平井昌夫　　上田幹一　　高橋　進　　寺島　愛

D. 第1年度の研究目標

第1年度は主として，小・中学校の正常な児童生徒を対象に，児童生徒の示す読み（特に音読）への抵抗・困難・欠陥の種類および原因の調査をおこなう。

E. 第1年度の研究方法

1. 正常な児童生徒については，次に示すような方法で調査する。

（a） 全国的に相当数の学校（最少限100校）をえらび調査表を郵送し，児童生徒が示す読みへの抵抗・困難・欠陥の調査（できればその原因の調査まで）をしてもらう。

（b） 東京都および近県に最少限100校ほどの協力学校を委嘱し，所員が定期的に出張し直接の調査研究をおこなう。

2. 特異な児童生徒についても次のような学校につき，上記(1)のbの方法に準じて調査する。

（a） 普通の学校（上記(1)のb）における特異な児童生徒。

（b） 小学校程度の特異児童については，杉並区済美教育研究所所属特別学級その他。

（c） 中学校程度の特異な生徒については，都立青鳥中学校その他。

以上すべてにわたり，できれば事例研究もあわせておこなう。

担当所員は以上の調査の実施，整理と並行して，この問題に関する内外の文献を調査し，協力学校における実験，その他への科学的うらづけをおこなう。

F. 実施状況

1. 調査表による全国的調査

小中学校における正常な児童生徒の示す読みへの抵抗・困難・欠陥の概況を知るため，調査表を各都道府県につき中学校1校，小学校2校の割合で直接郵送し，各校とも指定した学年の任意の一学級について，児童生徒の実態をチェック式に記入してもらうとともに，調査表そのものに対する意見ものべてもらうことにした。

そのため，まず全国都道府県の教育委員会に，適当な候補学校を数校ずつ推せんしてもらい，その中から都市・農村・漁村などの地域差を考慮して依頼校を選定し，調査表 1～6 に記入上の注意を添付して配布し，それを回収した。

〔調査表 1〕　　読みの学業不振の種類

都道府県	郡市区	町村	学校	第　学年　組	担当教官名	調査日　年　月　日

番号	氏名	性別	読みの不振の種類			読みの困難の種類										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
			全く読めない。	読みの学習が不活潑である。	読みの学習がおくれがちである。	コトバとしてよく知っている文字の読みがわからない。	文字の音声化は出来ても、その単語の意味がわからない。	読めない文字（多くは漢字）が多い。文字の意味がわからない。	文字の音声化と一般的な意味の読みはできても、与えられた文脈におけるその単語の意味が判らない。	単語と単語とが結びついて生ずる統合的な意味がわからない。	一つ一つの単語の意味は読めても文全体の意味がわからない。	同じ文字で書かれているためにその文脈に適しない意味とむすびつけて読む。	読んだことのかんたんな記憶再生が困難である。	読めても速く読むことができないと目の動きが不正または未熟である。	書いてあることのこまかい点を見出すことが困難である。	
1																
2																
3																
50																
合計																
%																

〔調査表　2〕　読みの学業不振の種類

	読みの欠陥又は不正な習性													
	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
番号	似かよつた発音のためにごつちやになつてちがつた語音に読みちがえる。	似かよつた文字のためにごつちやになつてちがつた語音に読みちがえる。	同じ文字なり単語なりを、くりかえして読む。	あともどりをして読む。	あてずつぽうに別の単語や句で読みかえる。	よぶんな単語や文字を加えたり、書いてある単語や文字をとばして読む。	行をとばして読む。	読みながら休止したり、たどりつたりすることが多い。（思想のながれがなめらかでない。）	ひろい読みをする。	くちびる読みをする。	なみはずれた声や調子で読む。			
1														
2														
3														
50														
合計														
%														

〔調査表　3〕　読みの学業不振の原因

都道府県　郡区　市町村

学校

第　学年　組

担当教官名

調査日　年　月　日

番号	氏名	性別	31	32	33	34	35	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
			見る機能に障害（近視、遠視、乱視、斜視、その他の異状視）がある。	眼球運動がスムースでない。	聞く機能に障害（発音識別の障害と、発音記憶の困難）がある。	話す機能に障害（発音困難、どもり、其の他）がある。	神経系統に障害がある。	知能の発達がおくれている。	簡単な事柄の記憶再生が困難である。	食事が充分に与えられていない。（栄養不良、きよじゃく、全身疾病、其の他）	ねむりが不充分である。	家事の手伝が多い。	過度にあまやかされている。	両親や兄弟姉妹と仲がわるい。	家庭がみだれている。	過度の貧困である。	家庭での生活語が標準語とあまりかけはなれている。	学習に必要な最低限の一般経験にとぼしく、語いが豊かでない。	なきむしである。
1																			
2																			
3																			
50																			
合計																			
%																			

〔調査表　4〕　読みの学業不振の原因

番号	49 家庭での教育指導がない。	50 不良児である。	51 学習に対する過度の恐怖心や反感を持っている。	52 学習への自信がない。	53 注意力にとぼしい。	54 学習活動が不活潑である。	55 作業及び学習への習慣がない。	56 目的意識がかけている。	57 学習環境へ適応できない。	58 なまける習慣がついている。	59 読書を極度にきらう。	60 劣等感を持っている。	61 入学がおくれた。	62 初学年で長く休んだ。	63 つねに欠席しがちである。	64 同じ学年で教師が度々変つた。	65 教師への反感が強かつた。	66 進級のさせ方が不適当だつた。	67 国語になじまなかつたり、興味をもたなかつた。	68 初学年で音読を過度に重視した。	69 速く読むことを要求しすぎた。	70 初学年で音読を過度に軽視した。	71 二部授業で充分な指導がうけられなかつた。
1																							
2																							
3																							
50																							
合計																							
%																							

〔調査表　5〕　読みへの態度その他

都道府県　郡市区　町村

学校

第　学年　組

担当教官名

調査日　年　月　日

番号	氏名	性別	読みへの態度				生活年令		知能年令		知能検査				算数の学業成績				
			全く読もうとしない。	無理にすすめれば読むが、自発的に読もうとしない。	課せられたもの以外は、自発的に読もうとしない。	読めても読もうとしない。	年	月	年	月	指数 91以上	指数 90～71	指数 70以下	偏差値	+2	+1	0	−1	−2
1																			
2																			
3																			
50																			
合計							平均		平均										
%																			

注意

いくつかの知能検査を実施した場合は，それらの指数又は偏差値の算術平均を下欄へ記入して下さい。

使用した知能検査（　　）式

（　　）式

その結果，回答をよせてくれた学校数は，次の表のとおりである。(府県としてOとなっているのは，教育委員会との連絡がつかなかったためであり，東京都・大阪府の数が多いのは，同じく教育委員会と連絡できなかったため，改めて特別依頼をしたからである。)

「読みの学業不振の種類と原因」調査表に解答した学校数一覧

	小学校						中学校			
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	計
北海道	○			○						2校
青森		○			○					2
秋田		○		○			○			3
岩手				○		○			○	3
山形		○			○					2
宮城				○		○			○	3
福島		○	○				○			3
栃木		○				○			○	3校
茨城			○		○			○		3
群馬	○			○						2
埼玉						○		○		2
千葉				○				○		2
神奈川										0
東京	○○○ ○○		○○○○ ○○○○	○○○ ○○	○○ ○	○○ ○	○○ ○	○○ ○	○○ ○	33
山梨										0校
長野				○			○			2
静岡			○	○				○		3
新潟	○	○						○		3
富山	○			○				○		3
石川		○				○	○			3
愛知					○○				○	3
岐阜		○	○					○		3
福井								○		1
京都				○	○		○			3校
滋賀				○					○	2
和歌山		○			○		○			3

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	計
三重				○						1
奈良					○			○		3
兵庫					○			○		3
大阪	○○		○○				○	○		6
岡山		○		○				○		3校
広島										0
山口						○		○		2
鳥取			○		○					2
島根		○	○					○		3
香川		○				○	○	○		4校
愛媛			○			○	○			3
徳島						○				1
高知										0
長崎						○				1校
佐賀				○				○		2
福岡										0
大分									○	1
宮崎	○			○						2
熊本										0
鹿児島		○			○				○	3
計	12	14	18	20	14	13	12	19	10	132校
				91				41		

各校からの回答が予測よりもかなりおくれたため，まだ整理中であるが，だいたいの傾向としては，

A 「読みの不振の種類」については，

(1) 全く読めない。
(2) 読みの学習が不活潑である。
(3) 読みの学習がおくれがちである。

の三つに相当する児童生徒の数の，学級全員に対する百分比を学年別に表示すると次のとおりである。

「読みの不振の種類」の傾向

学年名 / %	小一	小二	小三	小四	小五	小六	中一	中二	中三	計
90～100							1			1クラス
80～89					1					1
70～79	1			2					1	4
60～69	1	1	1	1		1	4	1		10
50～59	1	4		3	3		2	1	2	16
40～49			2	6	2	4	1	3		18
30～39	5	1	9	2		3	1	5	2	28
20～29	3	5	3	4	5	5	1	2	3	31
10～19	1	2	2	2			1	1	1	10
0～9			1		1		1	1		4
計	12	13	18	20	12	13	12	14	9	123クラス

B 「読みへの態度」については，

(1) 全く読もうとしない。
(2) 無理にすすめれば読むが，自発的には読もうとしない。
(3) 課せられたもの以外は自発的に読もうとしない。
(4) 読めても読もうとしない。

の四つに相当する児童生徒の数の，学級全員に対する百分比を学年別に表示すると次のとおりである。

「読みへの態度」の傾向

学年名 / %	小一	小二	小三	小四	小五	小六	中一	中二	中三	計
90～100							1			1クラス
80～89			1		1	1				3
70～79		1		2				3		6
60～69			2	1		1			1	5
50～59		1	3	1	1		4		1	11
40～49	4	1	3	2	2	4		3	1	20
30～39	5	6	2	3	3	2	3	4	3	31
20～29	3	4	2	8	2	4	1	3	1	28
10～19		2	2	2	1	1	2	2	2	14
0～9			3	1	1		1	2		8
計	12	15	18	20	11	13	12	17	9	127クラス

C 「読みの困難の種類」では，各学年を通じて，

(13) 書いてあることのこまかい点を見出すことが困難である。

(6) 読めない文字（多くは漢字）が多すぎて文の意味がわからない。

という傾向が最も多く，つづいて

(5) 文字の音声化は出来も，その単語の意味がわからない。

〔7〕 文字の音声化と一般的な意味の読みはできても，与えられた文脈におけるその単語の意味がわからない。

という傾向がめだっている。

D 「読みの欠陥または不正な習性」では各学年を通じて，

(54) 学習活動が不活潑である。

(53) 注意力にとぼしい。

という傾向が最も多く，つづいて

(21) 読みながら休止したり，ためらったりすることが多い。（思想のながれがなめらかでない。）

(15) 似かよった文字のためにごっやゃになって，ちがった語音に読みちがえる。

という傾向がめだっている。

E 調査表そのものに対する意見としては，全般的にいえば，調査表の項目は指導上大いに役立つものとして歓迎するという意見が圧倒的であるが，二，三の学校からは「読みの困難の種類」の項目については具体例がないとその程度がわからぬため，記入が困難であり，したがって調査や観察が主観的に流れる危険があるし，「読みの欠陥または不正な習性」の項目は全体的にもう少し整理統合する方がかえって便利ではないか（例えば(16)と(17)を統合して「あともどりして読んだり同じ文字や語句をくりかえして読む」とするように。）というような批判も出た。

2. 録音器による実験調査

この調査は順序として，第1年度は，まず，

(a) 読みのうちの音読からはじめ，

(b) 対象を小学校（1年～6年）に限り，

（c） 読みの障害の種類をできるだけ数多く発見する。

ことを第一目的とした。そのためつぎのような準備をととのえた。

A 協力校として下記の 11 校に協力方を依頼する。

東京都新宿区立四谷第六小学校　東京都新宿区立落合第二小学校
東京都新宿区立戸塚第三小学校　東京都新宿区立淀橋第一小学校
東京都新宿区立東戸山小学校　東京都荒川区立真土小学校
東京都杉並区立高井戸第四小学校　東京都杉並区立桃井第一小学校
千葉県市川市立真間小学校　山梨県甲府市立相生小学校
長野県長野市立城山小学校

B 知能指数及び国語の学業成績によって上中下の階層別をたて，上中下のそれぞれの代表を一学級につき２～３名ずつえらび出して，被験者とする。

C 音読の材料は各学年とも被験者の学力に適当したものでなければならぬと同時に，既習のものであってはならぬため，協力学校で使用していない国語教科書をえらび，その学年のその時期よりも約半年前頃に学習するはずの部分の一節を材料とした。

その材料は次のようである。(原文はたて書き)

めだかすくい　（一年生）

まさおさんが　すくいまし
た。
めだかが　いっぴき
はいりました。
「はいった，はいった。」
と，ゆきこさんが　いいまし
た。

みちおさんが
　すくいました。
めだかは　すうっと
　にげました。

「にげた，にげた。」

と，すみこさんが
いいました。

う　し　（二年生）

ぼくは，いちろうさんと，うしを　見に　いきました。
おやうしが，じっと　立って　います。
目を　小さく　して，口を　うごかして　います。
よしこさんが，
「おじさん，こうしは，」
と，ききました。
「よく　見て　ごらん。」
「いた，いた。」

こうしは，おやうしの
ちちを，おいしそうに
のんで　います。
足が，しっかり　しないので
しょう。おやうしが　うごくと，
ころげそうに　なります。
おじさんが，
「トン，トン，トン。」
と，かいばおけを，たたきました。
こうしは，きょとんとして，こちらを見ました。

ゆきだるま　（三年生）

「ねえさん，ゆきだるまを
作ろう。」
と，まさおさんがいいました。
「作ろう，作ろう。」
と，ひしさんも　いいました。
みんなは　外へ　出ました。
しろも　うれしそうに，ゆきの　上を　走って　いきます。

◎　ねえさんが　ゆきを
固めて　ころがしました。
「たまころがしのようだね。」
と，ひろしさんが　いいました。
　たまは　だんだん　大きく
なって　いきます。
　まさおさんも　ゆきの
たまを　ころがしました。
　大きいのと　小さいのと，
たまが，ふたつ　できました。

「わっしょい，わっしょい。」
　みんなで　たまを　かさね
ました。ゆきだるまの
形が　できました。
　よしこさんが　すみを
もって　きました。
　ねえさんが，まゆげや
目を　いろいろに　つけかえると，
ゆきだるまは，おこったように
なったり，わらったように　なったり　しました。
◎　ひろしさんが，
「これを　かぶせたら　いいよ。」
と　いって，むぎわらぼうしを　持って　きました。
　まさおさんが　かぶせました。
「おもしろい，おもしろい。」
と　いって，みんなが　大わらい
しました。

学　芸　会　（三年生）（四年生）

　もう　すぐ　学芸会が　始まります。
　みちおくんの　おとうさんが，おいでに　なりました。ゆきこさんの　おかあさんも　おいでに　なりました。
　だんだん　お客さんが，集まって，会場は　いっぱいに　なりま

した。

まもなく ふえが なって，学芸会が 始まりました。

たかしくんが 立って，はじめの あいさつを しました。

「わたくしたちは，これから 学芸会を します。お話，歌，おどり，げき，その ほか おもしろい ものが，たくさん あります。みんな いっしょうけんめい 練習を しました。 まだじょうずに できないのも あります。しかし 力いっぱい します。では これから 始めます。」

たかしくんは，元気な 声で いいました。

あちらからも こちらからも，はくしゅが，おこりました。

一ばん 始めに ゆきこさんが，

「わたしは 春の 使いです。」

と，いう，歌を 読みました。

つぎに，みちおくんが 友だちと，

「風の 子，雪の子」

の 合唱を しました。

まさおくんたちは，「春が きた」

と いう げきを しました。

「みんなで おどる ところが かわいいね。」

と，お客さんが ほめました。

まさおくんの病気

（四年生）

まさおくんはねむりからさめました。

静かな朝です。まくらもとの火ばちにかけた，やかんのお湯が，「シュン。シュン。」と音をたてています。しめきってあるしょうじに明かるい冬の日がさして，のきばで鳴いているすずめの声が，気持よく聞こえます。

まさおくんは，ひとつ大きく息をしました。

その時，ふすまがすうっとあいて，おかあさんがにこにこしながらはいってきました。

「まあ，よくねむったこと。気分はどう。」

おかあさんのあたたかいことばに，まさおくんはにっこりしてうなずきました。

三日ほど前のことです。学校から帰ってきたまさおくんは，いつものような元気がありません。おかあさんは，まさおくんの顔を見るなり，

「まあ，どうしたの。顔色が悪いわ。」

といいながら，ひたいに手をあててみられました。

「あ，熱もありますよ。」

とあわてて，ふとんをしいてくださいました。

まもなく，お医者さんがおいでになって，脈をみたり，熱を計ったり，のどを見たりしていられましたが，

「ああ，かぜだよ。あたたかくしてねていたらよくなるよ。」と，おっしゃいました。

それから，学校を休んで，ずっとねているのです。

ドッジボール大会　　（五年生）

試合が始まった。相手は五年西組である。みんなが，さかんにはく手を送ってくれる。

西組のセンター山本君のボールは，すばらしい勢いをもって飛んで来る。しかも，こしから下をねらうので，なかなか取りにくい。味方が，ひとりふたりとたおされていく。じょうずな道男君まで，たおされてしまった。そのうちに，ぼくを目がけてボールが飛んで来た。すくいあげるようにすると，うまく取ることができた。「ワアッ」という声が聞こえた。

この時，味方は三人になっていた。すぐに道男君にわたすと，道男君は取るがはやいか西組の人のせなかに投げつけた。ボールはころがって，また外野へ返って来た。かず子さんが投げる，春男君が投げる。内野の味方がつぎつぎにふえてきた。しかし，西組もなかなかじょうずである。外野へわたすボールを，とちゅうで取っては逆にせめて来る。たおしたり，たおされたりして，勝負の見分けもつかないうちに，前半終りのふえは鳴った。人数を調べると，九対八。一点のちがいで勝つことができた。

場所をこうたいして，後半戦にはいった。ぼくは外野にまわった。

西組は，こんどこそはと，いっしょうけんめいである。とりわけ女子がぐん

ぐんせめてくる。投げつけると，じょうずに受けて，男子のセンターにわたしていく。れんらくのみごとなこと。そのため，味方は，ばたばたとたおれていく。おうえんだんは，「フレー，フレー」と声をからしてさけんでいる。その時，かず子さんが，ボールを受けて，ぼくにわたしてくれた。力いっぱい西組の人に投げつけると，うまくあたって，ボールははね返って来た。その時，終りのふえが鳴った。こんども六対五で勝ち，いよいよ決勝戦に進むことになった。

母の思い出

（五年生）

青山の家は，ささやかなすまいであった。小さい庭のすみに，もみじの木が一本はえていた。

母は，家の中の用事をすませると，夕暮れの庭にいすを出してすわり，わたくしをひざの上にのせた。そして，母と子は，やがて新聞社から帰ってくる父を待つのだった。

母の白い手がうすやみの中にういて，わたくしをささえた。

母は学校のころに習った歌だといって，「庭の千草」や「夕空晴れて」や「ほたるの光」を，美しい声でなんべんもうたって，わたくしに教えた。母は，かるい気持で歌をうたう時ですら，なみだを大きな目ににじませるくせがあった。わたくしは母にだかれたまま，母の顔を見つめて，美しい歌声を聞いていた。

青山の夕暮れはすばらしかった。

空気はすみ，あたりは静かで，こっこくと自然は色をかえ，形をかえていった。

数わの鳥が，あわただしく大空を飛び去っていった。それがわたり鳥であるということも，母からおそわった。

母，は自然が詩のように美しいことを，わたくしのおさない心にしみこませた。

おもしろい言葉

（六年生）

きのう，電車の中でのことです。その電車はわりにすいていて，わたくしは

こしをかけていました。わたくしのとなりにも，ひとりはかけられるぐらいあいていました。

電車が停留所に着くと，ふたりの女の人が乗りこんで来ました。ふたりとも乗るがはやいか，わたくしのとなりの席を見つけて，走って来ました。ひとりは荷物を持っていたために少しおそかったので，席を取られてしまいました。荷物を持った人はいかにも残念そうな顔をして，こしかけた人を見ています。こしかけた人は，

「やれやれ，かけられて助かった。」

と，ひとりごとを言っています。

わたくしは，

「おばさん，どうぞ。」

と，荷物を持った人に席をゆずろうとしました。ところが，あんなにかけたがっていた人が，

「いいんですよ，ありがとう。」

といって，どうしてもかけようとしません。すると，さきにこしかけて喜んでいた人が，

「おねえちゃん，子供だから，かけていらっしゃいよ。」

そう言ってから荷物を持った人に向かって，

「あなた，どうぞおかけください。お荷物があってたいへんでしょうから。」

◎と，さっきおしのけるようにして取った席を，ゆずろうとしました。荷物を持った人は，

「いいえ，たいした荷物ではございません。どうぞ，おかまいなく。」

といって，かけようともしません。すると，

「では，お荷物を持ちましょう。」

といいながら，自分のひざの上にむりや前に取って，ていねいに預かりました。

それからふたりは，昔から知っていた人のように，なかよく話し合っていました。わたくしが電車からおりる時には，ふたりの女の人は，

「お気をつけてね，さようなら。」

と，声をそろえて送ってくださいました。

わたくしの席には，荷物を持つたおばさんが，こんどは安心してかけられました。ふたりはきっと，なかよく話して行かれたことと思います。

わたくしは，初めんなに席を取りあった女の人が，おしまいにはゆずり合う

ようになったのが，たいへんおもしろいと思いました。

（註）　表記・わかちがき・字くばりは，すべて原文のとおり。
◎印はそこでページがかわる印。　(4)

材料全体のえらびかたは，

（a）できるだけ児童の生活経験に近い文章
（b）具体的な事実がのべてある文章
（c）会話文が入っている親しみやすい文章

というような基準を設けたが，調査の性質上，それ以上のこまかい条件づけは行わなかった。

調査は昭和27年7月1日，新宿区立落合第二小学校の4年生（6名）を第1回とし，前記協力依頼校全部にわたり，次のように実施した。

番号	学校名	一年	二年	三年	四年	五年	六年	計
A	戸塚第三	15						15人
B	落合第二				6			6
C	高井戸第四	8	8	8	8	14	8	54
D	真間			6				6
F	真土		8					8
F	四谷第六	8				15		23
G	東戸山				15		3	23
H	桃井第一		15					15
I	淀橋第一			15				15
J	相生					27		27
K	城山			30		23		53
計	11校	31人	31	59	29	79	16	245人

音読実験は一定のインストラクションにもとづいて行い，被験者に不安や過度の緊張を当えないように配慮し，実験者の人数，その位置，録音器やマイクの置場所などにも種々の工夫をした。また，音読をさせる際には，別に教材と同一の印刷物および調査表7～3を用意し，録音と同時にできるだけ観察記録をとった。

音読に表われる障害予測表

〔調査表　7〕　　1952年　月　日

	具体的な障害の種類	1	2	3	4	5	6	15
1	似かよつた文字発音のときにちがつた語音に読みちがえる							
2	同じ文字単語を繰返して読む							
3	あともどりして読む							
4	別な単語や句で読みかえる(全く別のもの)							
5	行文字単語をとばして読む							
6	活用する語尾を読みちがえる							
7	意味を無視して音節や単語を切る							
8	難しい語句を読もうとしてその前でためらう							
9	句読点を無視して読む							
10	語句の始めや終りがはっきりとしない							
11	余分な単語を附加える							
12	部分的に読む調子が早くなつたりおそくなつたりする							
13	アクセントのはっきりした誤り							
14	ひろい読みをする							
15	始め読みちがえ繰返し読みで正しく読む							
16	読めなかった文字，語句（漢字）							
17	〃　（ひらがな）							
18	似かよった語句で読みちがえる							
19	格をあらわす助詞をよみちがえる							
20	全く別の語音で読みちがえる							
21	難しい発音の語句を読みちがえる							
22	漢字を他の音又は訓で読む							
23	何度も読みちがえ最後に正しく読む							
24	音節を入れかえて読む							
25	はじめ暗読みをして次に発音する							
26	特に音便が正しく読めない							

	総合的な考察において表れる障害の傾向	1	2	3	4	5	6	15
1	休止したりためらったりすることが多い							
2	内容にそぐわない調子や抑揚で読む							
3	呼吸の仕方が不正である							
4	声が高すぎる							
5	声が低すぎる							
6	やさしい単語を読みちがえる							
7	意味に関係のうすい単語を読もうとしない							
8	むずかしい単語を読もうとしない							
9	難しい単語にであうと声が急に小さくなる							
10	読みが速すぎる							
11	読みがおそすぎる							
12	区切りが多い							
13	特に繰返し読みが多い							
14	特に読みかえ読みちがえか多い							
15	発音が不明瞭である							
16	特にとばし読みが多い							
17	自信のない読みぶりである							
18	内容を理解しながら読んでいかない							

〔調査表 8〕

音読実験調査観察表

調査月日　　年　　月　　日（　　曜日）

録音場所　　市区　　町村　　学校（担任教官氏名　　）

	番号	児童氏名	学年組	性別	I.Q.	国語の能力	算数の能力	時間	備考
被験者	1								
	2								
	3								
	4								
	5								
	6								
	7								
	8								
	9								
	10								
	11								
	12								
	13								
	14								
	15								
読んだ材料									
今までに使用した国語教材									

			1	2	3	4	5	6	7	13	14	15
部外に表われた身体的状況	緊張の度合	正常										
		異常										
	姿勢	正常										
		異常										
	体の動き方	正常										
		異常										
	眼球運動の様子	正常										
		異常										
	まばたきの度合	正常										
		異常										
	聴覚	正常										
		異常										
	口の開け方	正常										
		異常										

最初の実験の結果，「音読に表われる障害予測表」の一部を改訂する必要を認めたので，さっそく訂正のうえ実験をつづけた。その結果は次の表のようである。

音読に表われた具体的なあやまりの種類と頻度

	あやまりの種類＼学年	1年 誤数	1年 人数	2年 誤数	2年 人数	3年 誤数	3年 人数	4年 誤数	4年 人数	5年 誤数	5年 人数	6年 誤数	6年 人数	計 誤数	計 人数
1	漢字（ひらがな，かたかな）が読めない	2	3	9	19	43	202	34	101	84	202	24	48	196	575
2	別の音節単語で読みまちがえる														
a	全く別の音節単語で読みまちがえる	16	28	52	62	131	169	74	77	270	369	83	90	626	795
b	格をあらわす助詞を読みまちがえる	4	6	10	15	24	34	16	16	51	70	9	10	114	151
c	促音便を読みまちがえる	7	18	4	5	15	16	1	1	2	7	4	4	33	51
d	長音を読みまちがえる	1	2	4	26	7	9	6	13	0	0	1	1	19	51
e	拗音を読みまちがえる	0	0	5	15	6	9	2	2	0	0	0	0	13	26
f	活用語尾を読みまちがえる	0	0	0	0	3	3	3	6	8	16	1	1	15	26
g	中止形と終止形を読みまちがえる	3	3	0	0	1	1	1	1	4	10	0	0	9	15
h	過去形と現在形を読みまちがえる	0	0	4	9	4	5	5	6	2	2	3	3	18	25
i	音節，単語の順を逆にして読む	0	0	0	0	2	2	1	1	9	12	0	0	12	15
j	漢字を他の音又は訓で読む	0	0	0	0	1	5	3	4	17	43	0	0	21	52
k	似かよった発音で読む	1	1	0	0	0	0	0	0	4	8	4	5	9	14
l	幼児音で読む	4	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	9
m	清音と濁音を読みまちがえる	4	7	6	7	10	12	7	7	3	4	2	2	32	39
3	別の音節単語をつけ加えて読む	13	19	10	30	51	80	28	33	55	118	33	46	190	326
4	音節，単語，行をとばして読む	10	12	27	47	45	68	33	40	87	154	29	38	231	395
5	音節，単語をくりかえして読む	49	95	79	85	192	290	153	176	356	533	135	162	964	1341
6	ひろい読みをする	69	93	79	95	95	106	48	51	80	99	20	23	391	467
7	句読点を無視して読む	7	9	12	22	27	56	17	22	39	63	5	7	104	179
8	意味を無視して音節や単語をきる	26	43	33	99	78	139	54	67	81	121	38	47	310	516
9	むずかしい音節，単語の前でためらう	13	20	8	13	16	27	21	28	84	199	30	35	172	322
10	アクセントのはっきりした読みあやまり	11	26	9	13	4	6	11	14	22	27	0	0	57	86
11	読む調子が速くなったり遅くなったりする	8	9	13	17	14	14	4	4	16	16	0	0	55	60
12	音節，単語文の初め終りの発音がはっきりしない	16	20	21	27	36	39	24	29	80	90	24	25	201	230
13	はじめ読みちがえてのち正しく読む	20	22	4	5	17	18	76	80	194	207	59	60	370	392
14	何度も読みちがえて最後に正しく読む	1	1	3	3	1	1	6	6	49	23	6	6	36	40
	総計	285	446	392	614	823	1311	628	785	1564	2393	510	613	4202	6162

表の示すとおり，音読の障害の現象としては，

「音節，単語をくりかえして読む」

ことが特に著しく，つづいて

「全く別の音節・単語で読みまちがえる」

「漢字（ひらがな，かたかな）が読めない」

「意味を無視して音節や単語をきる」

「ひろい読みをする」

などの現象が著しい。ただ，しこれらの現象は必ずしも同じ原因から発しているものとは思われず，また一つ一つが孤立した現象でもなく，いろいろな要因がからみあって生じた現象と推定される。

それらの原因を明らかにしなければ指導法の改善には役立たないので，目下，以上の現象の一つ一つをカードにとり，それぞれの障害・欠陥の要因を推定する仕事をすすめつつある。

3. 特異な児童についての調査

正常児の場合に準じて，小学校程度の児童だけを対象とし，予定のごとく杉並区立済美教育究所研の児童を対象とした。同研究所には将来普通の小学校にかえれる可能性をもっている児童を収容する「促進学級」と，それの望めない児童を収容する「補助学級」とがある。調査は促進学級の女児2名（K，H）と，補助学級の男女各1名（S，N）の4名を第1回の被験者とし，正常児に準ずる方法で（ただし教材の程度はさげて）行った。

その結果をみると，読みの障害の傾向は，正常児の下位者と大差はないが，読む時の態度には極めていちじるしいくせがあらわれた。たとえばは終始いちじるしく落着きを欠き，Sは息ずかいが特にはげしく，Nは指示者の指示にしたがわず，担任の教官がなだめすかしてはじめてボツボツ読みはじめるといった式であった。それぞれの特殊事情については担任からくわしく聴取したが，これらの異常児の場合は各個別にくわしい事例研究を行うのでなけ

れば，障害の要因はとらえられないように思われる。

G． 今後の見とおし

電力事情の悪化が録音器の使用に非常な妨害を与え，そのため予定の成果があげられなかったのは残念であったが，小学校の正常児の音読に関する材料はひととおりそろえることができた。

次の仕事としては，カード化した材料と録音テープによって，音読にあらわれた各種の障害の要因の分析に入り，ひきつづいて，見出された諸要因の妥当性を検定するためにそれらの要因の組合せによる音読材料を作り，改めて音読調査を行うよう準備中である。

（平　井）

国語の学力標準設定に関する調査研究

A. この調査研究の目的と前年度までの仕事のあらまし

この調査研究は，国民の国語能力特に学校児童生徒の国語能力のあるべき標準を設定することによって，国語教育に確実な基礎を与え，またそれを通して，国語研究所設置の目標である国民の言語生活の改善に資そうとするもので，研究所設置の当初から一つの研究課題として取りあげて来たものである。前年度までの小題目は，

昭和24年度　小学校1年生から高等学校3年生までの読解力の発達に関する調査研究，特に読解力検査の方法に関する研究
昭和25年度　小学校1年から高等学校3年生までの語彙尺度設定のための調査研究
昭和26年度　文法能力および文学鑑賞能力検査の方法に関する研究

である。前年度（昭和26年度）は，また，文部省調査課による関東地方の学力水準調査に参加したのであるが，それまではいわば方法の研究を主とした準備の時期でもあった。

B. 本年度の仕事のあらまし

本年度は学力水準調査が国立教育研究所によって全国的な規模でおこなわれることになったので，その国語科の部を受け持って，問題作成と整理とを分担しながら，われわれの課題である標準設定のための資料の蒐集と研究の推進につとめた。

（参考）国立教育研究所の学力水準調査は，学力の全国的な実態を明らかにし，それと教育条件との関係をたずね，あわせて学力調査の方法をも研究しょうとするもので，学力として特に国語・理科・社会・算数をあげている。昭和26年度の文部省調査課による関東地方における学力水準調査は，ちょうどその予備調査にあたるもので，この文部省調査課の仕事に協力して来たわれわれは，国立教育研究所からの正式の委嘱によって国語科の部門を全部分担することになったのである。

C. 本年度研究担当者

学力標準設定に関する調査研究は所員輿水実，高橋一夫，芦沢節が担当を命じられていたのであるが，国立教育研究所からの依頼による学力水準調査に参加するため問題作成委員会を作り，特に岩淵研究第一部長が参加した。所外の問題作成委員としては，

文部省	初等教育課	篠原利逸氏
〃	中等教育課	藤井信男氏
〃	国語課	白石大二氏
〃	調査課	原田種雄氏
東京都	教育庁指導部	安藤新太郎氏
〃	成城学園初等学校	馬場正男氏
〃	神谷小学校	増田三良氏
横浜市	西中学校	須藤久幸氏

を委嘱した。また，国立教育研究所員島津一夫氏は問題作成ばかりでなく，企画や整理にも参加されれ，香川県教育委員会から国立教育研究所に派遣されていた木原清行氏は，所員と終始行動を共にして協力された。

また，作成された問題の適否をためすために次の学校の協力を得た。

東京都杉並区立杉並第四小学校
神奈川県中郡比々多村立比々多小学校
東京都三鷹市立三鷹第三小学校
東京都武蔵野市立武蔵野第三中学校
東京都江東区立亀戸中学校

E. 成　　果

（1） 学力水準調査（国語科）の問題（原文はたて書き）

〔小学校〕

小学校　　年　　組　　番　　男・女　　氏名

注意（もゆうい）

① 先生から「始め」の合図（あいず）があるまで，この用紙（ようし）に手をふれてはいけません。

② このテストは一問ずつ時間をきめてやります。ですから，先生のさしずにしたがって，きめられた所だけやります。先の方をあけてみたり，すんだところをまたひっくりかえしてみたりしてはいけません。

③ やりかたについては，一つ一つ説明することはしませんから，問題をよく読んでやり方をまちがえないようにしてください。

④ 印刷などについて質問があったら手をあげなさい。質問する時に問題を，声を出して読んではいけません。

⑤ 机の上には必要なものだけ（えんぴつ，消しゴム，小刀，したじきなど）用意して，いらないものはしまいなさい。

れんしゅう

(1) 天皇陛下が番町小学校においでになった。
(2) 北海道に火事があった。
(3) くじらをとる船が南の海からかえってきた。

もんだい一

(1) フィンランド政府はオリンピックを記念した銀貨をつくりました。
(2) 近ごろは，長い道でも汽車よりバスの方がよいということになりそうです。
(3) 国内でテレビジョンが，もう毎月八百台ずつも作られています。
(4) 埼玉県で千五百年前の植物のたねが芽をだしてみんな花がさきました。
(5) 大阪では，夜行せんもんの大型バスを走らせる計画をたてました。

もんだい二

太郎，かず子，あき子，勇のおかあさんは，P・T・Aの役員です。この四人は，P・T・Aの，会長さんが急用のため，役員会が十一日午後一時にかわったという学校からのことずてを，おかあさんに次のようにお話ししました。だれのが正しいことばづかいでうまくだいじなことをつたえていますか。いちばんよいものを一つえらんでその番号の上に○をつけ，いちばんわるいものの上には×をつけなさい。

(1) 太郎　おかあさん，こんどのP・T・Aの役員会ね，十日は会長さんが急用で出られないから，十一日の午後一時から学校ですることになりましたって。そうおかあさんにつたえてくださいって先生がおっしゃいました。

(2) かず子　きょう学校で先生がおかあさんにお話ししてくださいっておっしゃったのですけれど，P・T・Aの役員会は午後一時からになりました。急にかわって，ごつごうがお悪いかもしれないけれど，午後一時ですからまちがえないでください。

(3) あき子　おかあさん，十日の午後三時に学校へ行くといっていいらっしゃったでしょう。あの日は会長さんが急な御用事で，おいでになれないんですって。こんどは一時ですよ，十一日は木曜ですよ。

(4) 勇　おかあさん，きょう先生が言ったよ。P・T・Aの役員会は会長さんが急用だから十一日の午後一時からになったよ。先生がおかあさんに言っといてくれって。

もんだい三

つぎの［　　］の中に適当なことばを書きこんで三つの作文をしあげてください。

(イ) ドカン，ドカンと花火の音。きょうは待ちに待った運動会だ。

八時集合というのに，わたくしは(1)［　　］家におちついていられなかった。

校庭はすっかりはき清められ，目にしみるような真白なラインがまっすぐに引かれていた。その中を運動服の一年生が(2)［　　］動いていた。

(ロ) アメリカで最近新しい星が発見された。それは太陽の二十九倍の温度であるという。この星がもし太陽と同じくらいの距離に近づいたら，地球はいったい(3)［　　］。

(ハ) すずしい秋になりましたが，先生にはおかわりございませんか。わたくしたち六年二組の者はみんなげんきで学校に通っています。先生におわかれしてからもう四か月以上になりますが，新しくいらっしゃった小川先生もていねいに教えてくださって，みんな(4)［　　］。このあいだ六年生ぜんぶで五千メートルのかけっこをしましたが，やっぱり大田君が一等でした。こちらはこのごろ雨ばかりふっていますが，そちらは(5)［　　］。

先生どうかおからだをおたいせつに。　　さようなら。

もんだい四

(イ) 文章を書く時には，、や。や「　」を適当に使うことがだいじなことです。次の二つの文には、が使ってありませんが，どれにも一つずつ、を打つとしたら，どこがよいでしょうか，よいと思うところに，一つずつ、を打ちなさい。

(イ) 木の葉もすっかり落ちてお正月が近づきました。

(ロ) 次郎が大きくなったからおとうさんも安心だ。

(ロ) 次の文には。が一つぬけています。よいと思うところに。を一つ入れなさい。

「三ちゃん，そんなにあわててどこへ行くんだ」

「ちょっと郵便局へ行ってももう間に合わないかもしれないがね。」

(ハ) 次の文の中で，お話のところに「　」がぬけています。どこに「　」をつけたら

よいでしょうか。よいと思うところに「　」をつけなさい。

みち子さんと前の林へ，くり拾いに行きました。むちゅうになって拾っていたら思わず時間がたったようです。もうずいぶんおそくなったわ。どうして。だって，かげがあんなに長いんですもの。私たちは，そこで，くりを一つのふくろに入れて，うらの戸口の方へまわりました。

もんだい五

（　）の中に漢字を書きなさい（漢字の書き方に二通りあるものはなるべく国語の教科書に出ている字を書きなさい。）

(1) 兄に相（　）する
(2) 種（　）が多い
(3) 船が（　）につく
(4) （　）道がとおっている
(5) 黒と白を（　）別する
(6) 想（　）にまかせる
(7) 政府に反（　）する
(8) 毎朝（　）をみがく
(9) 意見に（　）成する
(10) 二（　）のへやに行く

もんだい六

（　）の中に読みがなをつけなさい。

(1) （　）招　待
(2) （　）酸　素
(3) （　）貴　族
(4) （　）統　一
(5) （　）同　盟
(6) （　）救　う
(7) （　）限　る
(8) （　）耕　す
(9) （　）届ける
(10) （　）貧しい

もんだい七

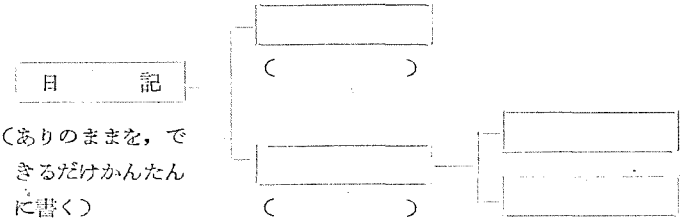
次の文を読んで表をつくりなさい。

日記は人に見せるものでないといいますが，それは自分だけの日記のことでみんなの日記ではそういうことはありません。たとえば学級日記とか週番日記とかいうものはみんなのためになることを，いろいろの人が交代で，毎日書きつけていくもので，人に見せるわけです。しかし，こういう日記でもありのままを，できるだけかんたんに書くという日記としての書き方に変りありません。

表に書きこむことばは次に書きぬいてあるとおりで，これをあとの表の［　］や（　）の中に書きいれるのです。○じるしのものだけ書きこんでありますから，こ

れにならって書きこんでください。

○日記	○ありのままを，できるだけかんたんに書く
自分だけの日記	
みんなの日記	人に見せるものでない
学級日記	
週番日記	人に見せる



もんだい八

次の文は，一つのまとまった文章を，短くきって，順序をかえて並べてみたものです。＿＿の中の文につづけて，どのような順に並べかえたら，もとの文章になるでしょう。次の四つの文の上の（　）の中に，順序をあらわす番号（1・2・3・4）を書きいれなさい。

「ことしの秋は，だいこんをつくってみよう。」とおとうさんが言われたので，ぼくはたねまきのお手つだいをすることにしました。

（　）　たねをまきおえたあとで，「ことしは，太郎がよく手つだってくれたから，みごとなだいこんがたくさんとれるよ。」と，おとうさんがにこにこしながら言われたときには，ぼくはほっとしました。なんだかはずかしいようなうれしいような気持でした。

（　）　まず，土をたがやしたり，肥料をやったりしなければならないので，とてもたいへんです。

（　）　それ以来，ぼくはときどき肥料をやったり，まわりの雑草をぬいてやったりして，みごとなだいこんがたくさんとれるのを楽しみに，手入れをしています。

（　）　でも，ぼくは，よい下地を作っておこうと，いっしょうけんめいになってやってみました。しかし，くわを持つのははじめてなので，なかなか思うように，土がおこせないで，かえってじゃまになりはしないかと気になりました。

もんだい九

㈠　次の二つの詩は，同じように「すいれん」をうたったものですが，すいれんの花

の美しくさいているようすを，目に浮かぶようにあらわしている詩はどれでしょうか。どちらか一つの詩の番号の上に○をつけなさい。

(1) すいれんの花が　さいている。
すいれんの花は　うつくしい。
白い花が　さいている。
赤い花も　さいている。
うすももいろ，きいろ，
たくさん　さいている。
すいれん　きれいだな。
どうして　そんなに
きれいなの。

(2) 池いっぱいに
さいている
すいれんの花。
うすももいろ
きいろ。
みどりに　はえて
ひときわ　白い
その花の　かげが
かすかに　ゆれた。

(ニ) 次の二つの詩は，同じように「ひよどり」をうたったものですが，詩として，みなさんはどちらがよいと思いますか。よいと思う方の詩の番号の上に○をつけなさい。

(1) がっこうの　かえりみちだよ。

びーよ，
びーよ，
ひよどりが　ないているよ。

大きな　竹やぶから
青い空が　すんでみえるよ。

みよちやんと　ぼくが
ひよどりの　まねを　したら，
こんどは　ひよどりが
ぼくらの　まねを　しているよ。

びーよ，
びーよ，
なんてんのみが，まっかだよ。

(2) がっこうの　かえりえちだよ。

びーよ，
びーよ，
ひよどりが　ないているよ。

みよちゃんと　ぼくが
ひよどりの　まねを　したら
こんどは　ひよどりが
ぼくらの　まねを　しているよ。

びーよ，
びーよ，
なんてんのみが　まっかだよ。

もんだい十

上の文を読んで＿＿＿を引いた部分について下の問に答えなさい。答は正しいものを一つえらんで○をつけなさい。

うちでは，おとうさんが病気で，もう一月以上勤めを休んでいる。ぼくたちはぼくと弟のほかに小さい妹がある。これ

(1) だれが「はたらく」のですか。
(イ) ぼく
(ロ) おとうさん

ではおかあさんがこまるだろうから，自分の学用品代だけでも(1)はたらかなくちゃあと思っていた。

村田君たちが新聞配達しているのを(2)見てやってみたいなと思った。中山君に，「あいていたら，(3)たのんでくれないか。」と言っておいた。二日たって，「ちょうど今あいているぞ。」と(4)知らせてくれた。

さっそく新聞屋さんへたのみに行った。「おじさん，おじさあん。」と二回呼んだら「なに。」といって四十ぐらいのおじさんが出て来た。「新聞にはいりたいんですけど……」といったら，「はい。」といって，奥の方へ声をかけて帳面を(5)持って来させて，名まえと年と番地を聞いた。「よし，それならあしたから来てくれ。」とおじさんは言った。ぼくはとてもうれしかった。

(1) (イ) ぼく
(ロ) おじさん
(ハ) おかあさん

(2) 「見た」のはだれですか。
(イ) おかあさん
(ロ) 村田君
(ハ) ぼく

(3) だれに「たのむ」のですか。
(イ) 村田君
(ロ) 中山君
(ハ) 新聞屋さん

(4) 「知らせてくれた」のはだれですか。
(イ) 村田君
(ロ) 中山君
(ハ) 新聞屋さん

(5) だれが「持って来た」のですか。
(イ) ぼく
(ロ) おじさん
(ハ) ほかの人

〔中学校〕

中学校　　年　　組　　番　　男・女　　氏名

注意

① 先生から「始め」の合図があるまで，この用紙に手をふれてはいけません。

② このテストは一問ずつ時間をきめてやります。ですから，先生のさしずにしたがって，きめられた所だけやります。先の方をあけてみたり，すんだところをまたひっくりかえしてみたりしてはいけません。

③ やりかたについては，一つ一つ説明することはしませんから，問題をよく読んでやり方をまちがえないようにしてください。

④ 印刷などについて質問があったら手をあげなさい。質問する時に問題を，声を出して読んではいけません。

⑤ 机の上には必要なものだけ（えんぴつ，消しゴム，小刀，したじきなど）用意して，いらないものはしまいなさい。

れんしゅう

(1) 天皇陛下が番町小学校においでになった。

(2) 北海道に火事があった。
(3) くじらをとる船が南の海からかえってきた。

問　題　一

(1) エリザベス二世のたい冠式には，二十七万人の人が見にくる予定です。
(2) 世界の有名な物理学者が，来年の秋京都に集まります。
(3) 国鉄の金沢駅は，四十年以上たっているのでこんど鉄筋コンクリートに改築されます。
(4) 来年早々五円，十円のおさつは姿を消してしまいます。
(5) もとの一銭銅貨より少し大きいくらいの，十円硬貨ができるそうです。

問　題　二

木村くんや田中くんは友だちといっしょに，あしたの日曜日に，小学校六年生の時の受持であった大山先生と遠足に行くことになっていますが，大山先生の都合で，急に集合の場所と時間が変りました。

木村くんからそのことを田中くんに伝える電話として，次のどれがいちばんよいでしょう。

いちばんよいものを一つえらんでその番号の上に○をつけ，いちばん悪いものには×をつけなさい。

(1) もしもし，……田中くん？……ぼく木村です。……あしたの遠足ですがね。……大山先生の御都合で急に予定の一部が変更になりましてね，……集合の場所は駅前のポストのわきになりました。……では，またあした。……さよなら。
(2) もしもし，……田中くん？……ぼく木村です。……大山先生のところへ急にお客さんが見えましてね，……先生とてもおいそがしいそうです。……なんでも親類の方がこられたらしいんですがね，……お客さんはあしたの朝までおいでになるそうです。……それでね，遠足の集合はね，……八時，場所は駅前のポストのわきということになりましたから。……ほかに何かあったかしら？……ではあした楽しくいっしょに行きましょうね。……さよなら。
(3) もしもし，……田中くん？……ぼく木村です。……大山先生のところへね，お客さんが見えましてね，先生とてもいそがしいそうです。……それでね，あしたの遠足ですが，集合の場所と時間が変更になりましたよ。……あしたはたのしく遠足しましょうね。……ではまたあした。……さよなら。
(4) もしもし，……田中くん？……ぼく木村です。……あしたの遠足のことですがね，……大山先生のところへおとまりのお客さんがありましてね，急に集まる時間と場所が変わりましたよ。……時間は二時間おそくなって朝の八時，場所は駅前のポス

トのわき，ということになりました。……え，わかった？……それだけ。……ではまたあした。……さよなら。

問　題　三

次の［　　］の中に書きこんで三つの作文をしあげなさい。

(一) 汽車にさんざん乗りあきたころようやく日光駅についた。

ホームへ降りたが，まだ汽車にゆられているような感じで［　　］あたまがふらふらする。

駅の前はいくつかの修学旅行の団体でいっぱいであった。私たちはあたりのめずらしい景色に［　　］歩きはじめた。

(二) 千葉県朝日中学校のクラブ活動は，文化部，体育部，奉仕部の三部に分かれている。各部は毎日午後，時間をきめて動活する。そのほかに自治会があって，その週の反省をしたり，次の週の予定［　　］。

(三) ○○工場のみなさん，年の暮においそがしいところをごめいわくと思いますが，ぜひそちらの工場を見学させていただきとうございます。私たちは学校で，紙のことについて勉強していますが，実際についてよく知りたいので，昔から有名な御社を見学させていただきたいのです。［　　］何月何日の何時から何時までならば御都合がよろしいでしょうか教えてください。［　　］みんなで五十六名です。

問　題　四

次の五つの文のあいているところを適当におぎなって，正しい文にしなさい。

(1) 太郎さんが，試験に受かって，おとうさんも，さぞ，うれし［　　］。

(2) たとい予定の時間におくれ［　　］かまいませんから，ぜひうちへ来てください。

(3) 山田さんが世界的な発見をしたというのは，かならずしも，うそ［　　］。

(4) 注意深くやれば，まさかそういう結果にはなる［　　］。

(5) たいへん寒くなりましたから，どうぞからだに御注意のほどを［　　］。

問　題　五

（　）の中に漢字を書きなさい。（漢字の書き方に二通りあるものはなるべく国語の教科書に出ている字を書きなさい。）

(1) （せき）任が重い。
(2) 死亡（りつ）がへってきた。
(3) 多くの（しゅうかく）種がある。
(6) （しゅう）議院
(7) フランス（かくめい）命
(8) お（べんとう）当

(4) お金を（　ひろ　）った。
(5) （　ぜい　）金がかかる。
(9) 時計の（　こう　ぞう　）造
(10) 銅や鉛は金（　どう　なまり　きん　ぞく　）だ。

問　題　六

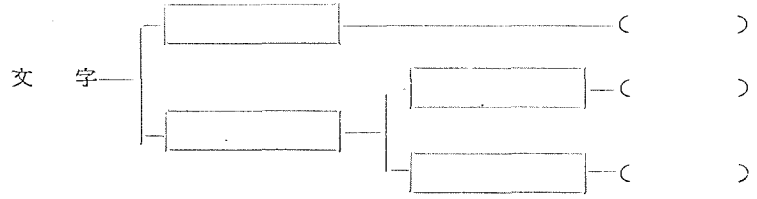
（　）の中に読みがなをつけなさい。

(1) （　）保　守
(2) （　）超　過
(3) （　）検　討
(4) （　）許　可
(5) （　）協　議
(6) （　）捜　査
(7) （　）施　設
(8) （　）整える
(9) （　）配　る
(10) （　）練　る

問　題　七

次の文を読んで，あとの□や（　）の中に，この文の中から適当（てきとう）なことばをえらんで入れて表（ひょう）を完成しなさい。

世界にはいろいろな性質の文字がある。この文字について見ると一字で，ある一定の音を表わすとともに，ある一定の意味を表わすものと，一字だけでは意味を表わさないものとの区別がある。前者を表意文字，後者を表音文字という。漢字は前者であり，仮名（かな）やローマ字などは，後者である。すなわち，漢字の「か」や「わ」，ローマ字のKやWなどは，それだけでいつもきまった意味を表わすことはない。仮名の「か」「わ」をローマ字で書けば，それぞれKA・WAというように二字ずつになる。ローマ字は一字で一単音を表わすが，仮名は一字で一音節を表わすからである。そこで仮名のようなのを音節文字といい，ローマ字のようなのを単音文字という。



問　題　八

次の文を読んで，あとのしつもんに答えなさい。

A　隣村の小学校へ通う途中に深い森がある。春，桜の花のまだ咲かないころ，わたくしは毎朝，その森の同じ場所でうぐいすの声を聞いた。初めはよい声に聞きほれるだけだったが，しまいには捕ってやろうという気になって，日曜の朝，とりもちのついた竹ざおを持って森に忍びこんだ。

B　わたくしの父は村の医者で，前からうぐいすを一羽飼っていた。その父から聞くとうぐいすのなかでよく鳴くものは値段が高いとのことだった。わたくしは走りながら手にもったうぐいすを見た。そしてびっくりしてそこに立ちどまった。うぐいすはめくらだった。生れながらのめくらであるらしかった。

C　わたくしは試みに父のうぐいすのかごに，めくらのうぐいすを入れてやった。すると，おどろくべきことには，父のうぐいすがめくらのうぐいすを養うではないか。それはちょうど親鳥が巣の中のはだかびなに，えさをやるのによくにていた。わたくしは父を呼んだ。父はあきれたように目を丸くしてこのありさまを見ていた。

D　夜になってから，父はわたくしにむかって，うぐいすは，もともと弱い鳥なので，ほかの強い鳥にいじめられるだけに，おたがいに助けあう習慣がついていて，たぶんそういう性質から，めくらの友を養う気持になったのだろうといった。

E　つぎの土曜の午後，わたくしが森を通りかかると，思いがけなく父がくさむらの中にたたずんでいた。わたくし

(一)　上のA・B・C・D・Eの文章を読むと，一通り話のすじはわかりますが，これだけではだいじなところがぬけていることに気づくでしょう。次のどんなことがらを補ったらよいですか。次の八つのうちから二つえらんで○をつけなさい。

(イ)　父のうぐいすがえをはこんできた。
(ロ)　うぐいすをとらえた。
(ハ)　父のうぐいすをにがしてやった。
(ニ)　うぐいすにえさをやった。
(ホ)　めくらのうぐいすがにげた。
(ヘ)　めくらのうぐいすは売れなかった
(ト)　うぐいすが死んだ。
(チ)　うぐいすがかごをこわした。

(二)　A・B・C・D・Eのどれかの文章のあとに，「わたくしはそれからうぐいすがかわいくなった」という文がついているのですが，ここではぶかれています。どこでしょうか。次の五つのうち，正しいと思うものの上に○を一つだけつけなさい。

（A）のあと。
（B）のあと。
（C）のあと。
（D）のあと。
（E）のあと。

を見ると，「おいで，おいで。」をして森の奥の方へ歩き出した。「あれを見ろ。」——そういうように父が指をさした。その方を見ると大きなすぎの木に羽をふくらませた小鳥がうずくまっている。——あのめくらのうぐいすだった。

問　題　九

次の三つの詩は「水にうつったかげ」という題で，三つとも同じような情景をうたってありますが，詩としてどれがいちばんよいと思いますか。三つのうちから一つだけえらんで，その詩の番号の上に○をつけなさい。

(1)　公園の池に
いろいろのかげが
うつっている。
ベンチや木や草もうつっている。
時々オートバイや，自動車も通る。
さまざまな人も通る。
そのかげを
じっと見ていると，
ゆめの国へ
行ったような感じがする。
池の中にも
人間の世界があるようだ。

(2)　池の中に
いろいろなかげが
うつってみえる。
家が立っている。
ベンチが並んでいる。
草や木もはえている。
時々人や車が通る。
雲も流れていく。
水にうつっているかげを
じっとみつめていると，
池の中にも
人間の世界があるようだ。

(3)　池の水に，
いろいろのもののかげが
うつってみえる。
ホテルやベンチや木や草や，
時々さまざまな人がうつってみえる。
自動車やオートバイが通るのもうつってみえる。
雲もうつってみえる。
それらのかげを見ていたら，
なんだかゆめの国へ行ったような
感じがした。
なんだか
水の中にも

人がいるように思われてきた。

問　題　十

次の文を読み，――――をつけた部分についての問に答えなさい。

私は尊敬する人をたくさんもっている。しかし，尊敬する以上に崇拝する人というものはそれほどたくさんはない。とくに同時代者にそれを限ると，ますますその数は少なくなる。

そういう中でまっさきにあげる人として三人の名を私は思い浮かべる。ガンジーとアインシュタインとシュワイツァーとである。同時代者といっても，これらの人たちは私よりずっと年上で，それにガンジーは一九四八年一月愚かな若者のために殺されてしまった。しかし，それにしても，何十年かを私はこの人たちと同じ時代に生き，アインシュタインのごときは，(1)かれが日本へ来た時，(2)親しくその人にも面会している。

シュワイツァーは哲学者，神学者としてりっぱな地位を持ち，バッハのオルガン演奏者としては世界第一の名声を得ながら，アフリカの黒人たちの悲惨な生活状態を知るや，あらためて大学で医学を修め，赤道直下の地に伝道医師として(3)七十幾歳の今日まで何十年間，自分の使命に熱心にしたがっているのである。私はこの人のことを思うと今も胸がひきしめられる。一昨年ゲーテの二百年祭に，(4)アメリカへ講演に行った時のことを，当時の雑誌で読んだが，それは実に(5)感激させられるものであった。

次の五つの問についてイ，ロ，ハのうち合っているのに○をつけなさい。

(1)　「かれ」というのはだれのことか。

(イ)　アインシュタイン

(ロ)　ガンジー

(ハ)　私

(2)　だれが親しくその人に面会しているのか。

(イ)　アインシュタイン

(ロ)　私

(ハ)　ガンジー

(3)　自分の使命に熱心にしたがっているのはだれか。

(イ)　バツハ

(ロ)　伝道医師

(ハ)　シュワイツァー

(4)　アメリカへ講演に行ったのはだれか。

(イ)　ゲーテ

(ロ)　シュワイツァー

(ハ)　私

(5)　だれが感激させられるのか。

(イ)　アメリカの人

(ロ)　シュワイツァー

(ハ)　私

（2）正　答　表

小　学　校

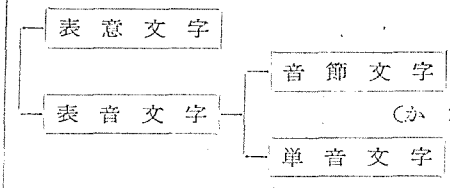
問題番号	正　答　表	採　点　法
問題一	○(1)　○(2)　×(3)　×(4)　×(5)	正答一つに対して2点を与える。 満点は10点
〃　二	○(1)　太　郎 ×(2)　かず子	正答一つに対して5点。 満点は10点。
〃　三	きたなく書いても，文字に誤りがあっても，意味が通ればよいとする。 正　答　例 ㈠(1)うれしくて　なんと　なく　ゆっくり　少しも　もうきょうは　朝早くから (2)あちこち　ちらちら　よろこんで ㈡(3)どうなるか　どうなるでしょう ㈢(4)よろこんでいます　幸福です　うれしく思っています (5)いかがですか　お元気ですか 誤　答　例 (1)すぐ 八時二十五分（「まで」を欠くもの） (2)いろいろ　そろそろ (3)まぶしい (4)元気です　うれしい (5)おかわりありませんか では	正しく入れたことば1つに対して2点を与える。 満点は10点。
〃　四	㈠(イ)木の葉もすっかり落ちて (ロ)次郎が大きくなったから ㈡　ちょっと郵便局へ。 ㈢　「もうずいぶんおそくなったわ。」 「だって，かげがあんなに長いんですもの。」	正しく入れられた・。「　」に対して各2点を与える。 ㈠(イ)――2点 (ロ)――2点　満点 ㈡――2点　計10点 ㈢――4点 「　」は片方だけではだめ。つけるべき所のほかに・。「　」をつけたら，それぞれの問題のうちで2点ずつ減点する。ただし0点以下はつけない。
〃　五	新字体はもちろん，旧字体でも正答と認める。 正　答　例 (1)談，談 (2)類，類 (3)港，港，港，港，湊，湊 (4)鉄，鐵，鐵，鉄 誤　策　例 訟 類 鉄	正しく書けた一字に対し1点 満点は10点

	(5)区，区，区，區，區，区		
	(6)像，係	像，造	
	(7)対，対，對	対，刘	
	(8)歯，齒	歯，齿，齒	
	(9)賛，贊	賛	
	(10)階，階	階，階，陛	
問　六	正しいかなづかいでなくても，発音する通りに書いてあっても正答と認める。		正しく読めた語に対し1点。 満点は10点
	正　答　例	誤　答　例	
	(1)しょうたい，しょおたい，しょーたい，しょうたい，しゃうたい，せうたい	しょうだい	
	(2)さんそ		
	(3)きぞく		
	(4)とういつ，とおいつ，とーいつ，たういつ	とういち	
	(5)どうめい，どおめい，どーめい，だうめい，どうめー，どうめえ		
	(6)すく	すくう，きゅう	
	(7)かぎ	かぎる，げん	
	(8)たがや	たがやす，こう	
	(9)とど，とゞ	とどけ，とどける	
	(10)まず，まづ	まずし，まずしい	
〃　七	自分だけの日記（人に見せるものでない） みんなの日記（人に見せる）— 学級日記 / 週番日記 「学級日記」「週番日記」はこの逆でもよい。文字に書きちがいがあっても正答とする。 次のようなのは誤答になる。 人に見せる（自分だけの日記） 人に見せるものでない（みんなの日記）		正答例のようにすべての空欄が正しくみたされてあれば10点。その他はすべて0点。
〃　八	(3)た　ね…… (1)ま　ず…… (4)それ以来…… (2)で　も……		正答例の通り文の順序が全部正しくはいっているもののみに10点を与える。その他はすべて0点

問　九	(一)……(2) (二)……(1)	(一)(二)共に正答ならば10点，どちらか一方だけ正答ならば5点
〃　一〇	(1)　(イ) (2)　(ハ) (3)　(ハ) (4)　(ロ) (5)　(ハ)	正しく答えた問に対して2点を与える。全部出来れば10点 一つの問に対して二つ以上の答のあるものは0点

中　学　校

問題番号	正　答　表	採　点　法
問題一	×(1)　○(2)　○(3)　×(4)　○(5)	正答は一つに対して2点を与える。満点は10点
〃　二	×(3) ○(4)	正当一つに対して5点，満点は10点
〃　三	書きかたがきたなくても，誤字があっても，意味が通ればよいとする。文のよしあしを問わない。 正答例 (一)(1)なんだか　すこし　いやに (2)みとれながら　目をみはりながら　気をつけながら (二)(3)を立てたりする　をきめる　などをつくる (三)(4)ついては　よろしかったら　きたる　来年のそして　そちらは　工場では　見学する日は (5)こちらは　見学者は　私たちは 誤答例 (一)(1)そして　いるようで　足がだるくしじゅう (2)つられて　みて　ゆっくり (二)(3)つくったり　をのべたりします　をする (三)(4)予定は　何年　ぜひ　なお (5)生徒（「は」を欠く場合）	正しく入れたことば一つに対して2点を与える。 満点は10点
〃　四	誤字や表記の点は問わない。 正答例 (1)いでしょう　かったでしょう　いことだろう　かったと思います (2)ても (3)ではない　でない　ではないらしい (4)まい　はずはない　ことはないだろう (5)お願いいたします　お願いします　願います 誤答例 (1)い　かった (2)たら (3)だ　だろう　だった (4)だろう (5)申しあげます	正しく入れたことばに対して2点を与える。 満点は10点

<table>
<tr>
<td>問　五</td>
<td>新字体はもちろん，旧字体でも正答と認める。
<table>
<tr><th>正　答　例</th><th>誤　答　例</th></tr>
<tr><td>(1)責</td><td>責，責，責</td></tr>
<tr><td>(2)率，率</td><td>率</td></tr>
<tr><td>(3)收，収</td><td>收，收</td></tr>
<tr><td>(4)拾，拾</td><td>拾</td></tr>
<tr><td>(5)稅，税，稅</td><td>稅，稅</td></tr>
<tr><td>(6)衆，衆</td><td>衆，衆，衆，衆</td></tr>
<tr><td>(7)革，革</td><td>革，革，革</td></tr>
<tr><td>(8)弁，弁，弁，辨</td><td>弁，弁，辮，瓣</td></tr>
<tr><td>(9)構，構，構</td><td>構，構，構，構</td></tr>
<tr><td>(10)属，属，属，属，属，属</td><td>属，属</td></tr>
</table>
</td>
<td>正しく書けた一字に対し１点。
満点は10点</td>
</tr>
<tr>
<td>〃　六</td>
<td>正しいかなづかいはもちろん，発音通り書いてあっても正答とする。
<table>
<tr><th>正　答　例</th><th>誤　答　例</th></tr>
<tr><td>(1)ほしゅ，ほしゆ</td><td>ほしゅう</td></tr>
<tr><td>(2)ちょうか，ちゃおか，ちょーか，ちゃうか，ちょうか，ちょぅくわ，てうか</td><td></td></tr>
<tr><td>(3)けんとう，けんとお，けんたう，けんとー，けんたふ</td><td></td></tr>
<tr><td>(4)きょか，きよか，きょくわ</td><td></td></tr>
<tr><td>(5)きょうぎ，きゃうぎ，((2)に準ずる)</td><td></td></tr>
<tr><td>(6)そうさ，そおさ，そーさ　さうさ，さふさ</td><td></td></tr>
<tr><td>(7)しせつ</td><td>しせい，ひせつ</td></tr>
<tr><td>(8)ととの，とゝの</td><td>ととのえ，ととのえる</td></tr>
<tr><td>(9)くば</td><td>くばる，はい</td></tr>
<tr><td>(10)ね</td><td>ねる，ねれ，れん</td></tr>
</table>
</td>
<td>正しく読めた語に対し１点。
満点は10点</td>
</tr>
<tr>
<td>〃　七</td>
<td> 
</td>
<td>正答例のように，すべての空欄が正しくみたされてあれば10点。
その他はすべて０点</td>
</tr>
</table>

	音節文字（かな），単音文字（ローマ字）の左右は逆でもよい。 か　な―（音節文字）のような場合は誤答となる。 文字の書きちがいがあょても正答とする。	
八	(一) ○(ロ)……3点 ○(ホ)……3点 (二) ○(D)のあと……2点	(一)(ロ)，(ホ)の正答に対しては，それぞれ一つ3点 (二)に対しては4点。 満点は10点 ○ただし，正答をつけておきながら同時に誤答もしている場合は，相殺して点を与えない。 例 (イ)，(ロ)，(ホ)につけた時，(イ)，(ロ)を相殺して(ホ)にのみ3点。 (イ)，(ロ)，(ニ)，(ホ)につけた時は同様の理から0点。 (イ)，(ニ)，(ホ)につけた時は0点
〃 九	○(2)は……10点　○(1)は……5点　○(3)は……0点	上のように，採点する。
〃 一〇	(1) (イ) (2) (ロ) (3) (ハ) (4) (ロ) (5) (ハ)	正しく答えた問に対して2点を与える。 全部できれば10点。 一つの問に対し二つ以上の答のあるものは0点。

(3) 実施要領

〔小　学　校〕

(1) 国語科の調査問題は，第9頁と第10頁を境にして，前半と後半と分けておこなう。前半と後半との間に5分間の休憩をとる。休憩の間に便所に行きたいものがあれば許して行かせる。

(2) 問題は1問ずつそれぞれ示されている制限時間内でおこなう。

〔実施の指針〕

(1) 用紙をくばるまで

「これから55分かけて国語のテストをします。途中で一回，5分間休みます。」

「このテストはみなさんの国語の力がどれくらいあるかをみるためにおこなうのですが，学校の成績には関係がありません。このテストのできが悪かったから，学校の点が悪くなるというようなことはありません。

しかし，みなさんの国語の力はどの方面がどれくらい伸びているか。全国の学校の国語の力はどの程度かというようなことを調べる，だいじなテストですから，最後までおちついて，一生けんめいにやってください。」

(2) 用紙をくばる。

「これから用紙をくばりますが，その前に，鉛筆，消しゴム，したじきなど，答案を書くのに必要なものだけ出して，ほかのものはしまいなさい。」

「用紙がくばられたら，こういうように表紙を出して机の上におきなさい。」

「さしずがあるまで中を開いて見てはいけません。」

（用紙ヲ，表紙ヲ上ニシテクバル。）

(3) 用紙の点検と氏名・番号・男女別の記入

（用紙ノ配布ガ終ッタトコロデ）

「テストの用紙を持っていない人はありませんね。」（見届ケル）

「では，鉛筆をとって，表紙のところに，番号と，男女別の名前を書きなさい。男・女は男の人は男という字を，女の人は女という字を○で囲みなさい。それだけ書いたら鉛筆をおいて，こちらを見てください。やりかたの説明をします。」

(4) やりかたの説明

「一番はじめにやるのは，聞きとりのテストですが，これははじめに練習をして，やりかたがよくわかってからやります。」

「その次からは，どの問題も，この紙の中に，やりかたがよくわかるように説明してありますから，それをよく読んでからやってください。いつも「はじめ」の合図で鉛筆をとり，「やめ」の合図で鉛筆をおくことにします。それからこのテストでは，一つ一つの問題について説明をしませんから，どうしても先生にききたいということがあったら，声を出さないで，だまって，静かに手をあげてください。そ

うすれば先生がそこへ行って，その人の質問を聞きます。」

(5) 聞きとりの練習

「ではまず聞きとりの練習です。」

「表紙をめくって，とじたところでこういうふうに二つに折って，「れんしゅう」とあるページだけ出してください。」（先生ガ別ノ問題綴リデヤッテミセル。「もんだい1」ガ見エナイヨウニ折ッテアルカドウカ注意スル。）

「これから，練習のニュースを言います。このニュースを聞いていて，ここに書いてあるのを読んで，それが合っていればその番号の上に○，まちがっていれば上に×じるしをつけるのです。」

「○や×をつける時には，はっきりつけてください。一度つけて，消しゴムで消して，また別のにつけると，消しかたが悪いためにどちらにつけたのかわからないことがあります。きれいに消してはっきりつけるようにしてください。」

「聞く時は鉛筆を持たないではじめに全部聞いてしまいます。そうして，「はじめ」という合図があってからはじめます。」

「ニュースは三つありますが，1ぺんしか言いません。テストにはあまりこまかいことは聞きませんから，楽な気持で聞いていてください。

「第1のニュース

天皇陛下が，十二月四日，東京都千代田区六番町の，番町小学校の，創立八十周年記念式においでになりました。（15秒）

次，

北海道の江別というところで，火事があって，ちょうど講習のため，とまりがけで来ていた，学校の先生が，七人も死にました。（13秒）

その次，

くじらを取る船が，十二月二十五日に，南の方の海へ向けて，出発しました。（8秒）」

「これで終りです。さあ鉛筆をとって下さい。」「はじめ」（1分オク）

「どうですか。今聞いたニュースに合っているのには上に○をつけ，合っていないのには×をつけるのですよ。」（1分オク）

「やめ」「みんなできましたか。(1)はマル，(2)はマル，(3)はバツが正答です。」

「これからはじめる問題1はこんなふうにやるわけです。」

(6) 第1問

「では問題1ですが，用紙は今の「れんしゅう」のところを出したまま，次のページを見ないで聞いてください。ニュースが終って，「はじめ」の合図があってから紙を開きます。」

（次ノニュースヲ読ム）（朗読基準速度1分48秒）

これから子ども新聞のニュースを放送しますからよくきいていてください。

はじめに，（ココマデ10秒。2秒オク）

この秋から，日本でもいよいよテレビジョンの放送がはじまることになりましたが，このテレビジョンの機械を，国内で毎月八百台ぐらい作るように役所の方で計画を立てています。（所要時間14秒）

次（2秒）

二千年前のハスの実から花が咲いて，人々をおどろかしたことは，この前お知らせしましたが，こんどは埼玉県で，千五百年前の植物のたねが芽をだしました。このたねは，地面の中から掘り出された，大昔の人たちのすまいの，あとから発見されたものです。（20秒）

次は（2秒）

福井で四十人乗りの大型バスを，大阪まで走らせる計画を立てたというお話。（8秒。1秒オク）

近ごろはいたるところにバスが走って，長い道でも，汽車よりバスの方がよいということになりそうですが，福井から大阪まで，四十人乗りの大型バスを走らせるという計画があります。このバスは夜行せんもんで，福井を夜出て，よく日の朝大阪につき，また大阪を夜出て，よく朝福井につくというようにするそうです。（25秒）

最後は外国からのニュースです。（5秒）

ヘルシンキのオリンピック大会を記念して，フィンランドの政府は新しい銀貨をつくりました。この銀貨のうらの方には，オリンピックの五輪のマークがあって，そのマークを，オリンピック・ヘルシンキという文字がかこんでいます。（15秒。1秒オク）

ニュースはこれでおわりです。（3秒）

「では，折ったのを開いて，第1ページの問題1というところをあけてください。

「鉛筆をとって。」「はじめ。」（2分オク）「やめ」

(7) 第2問から第6問まで，

「次は問題2です。第2ページと第3ページをごらんなさい。時間はじゅうぶんありますから，よく問題を読んで，まちがえないようにしてやってください。」「はじめ。」（5分）「やめ。」

「第4ページと第5ページ，問題3のところ，」「はじめ。」（5分）「やめ。」

「第6ページ，と第7ページ，問題4のところ，」「はじめ。」（5分）「やめ。」

「第8ページ，問題5のところ，とじたところで，二つに折って，問題5だけ出してやってください。」「はじめ。」（6分）「やめ。」

(8) 休　憩

「これではじめの6問を終りましたから，少し休みます。」

「答案の用紙は一度とじましょう。はじめ配られた時のように，表を出して机の上においてください。うらを見てはいけません。」

「さあ，こちらを向いて，休みといってもお互に話をしてはいけません。少しからだを楽にして深呼吸をしなさい。」

「目をつぶったり，手やからだを動かしたりしてもよろしい。」（5分休ム）（コノ際，ドウシテモ便所ヘ行キタイトイウモノガアッタラ1人ズツ行カセル。相互ニ話シ合ワナイヨウニサセル。）

「5分たちました。では，休みはこれでおしまいです。）

「あと4問はやさしい問題ばかりですから，一生けんめい続けましょう。」

(9) 第7問から第10問まで

「第10ページと第11ページ，問題7というところ。はじめ。」（6分）「やめ。」

「第12ページと第13ページ，問題8というところ。はじめ。」（5分）「やめ。」

「第14ページと第15ページ，問題9というところ。はじめ。」（6分）「やめ。」

「いよいよ最後の第16ページ，問題10というところですね。はじめ。」（6分）「やめ。」

(10) 答案を集める。

「国語のテストはこれで全部終りました。問題用紙の各頁の右下の番号欄に自分の番号を書き入れてください。」

「はじめ配ってもらった時のように，表を出して机の上におきなさい。」

〔中　学　校〕

(1) 国語科の調査問題は，第7頁と第8頁を境にして，前半と後半とに分けておこなう。前半と後半との間に5分間の休憩をとる。休憩の間に便所に行きたいものがあれば許して行かせる。

(2) 問題は一問ずつそれぞれ示されている制限時間内でおこなう。

〔実施の指針〕

(1) 用紙をくばるまで

「これから56分かけて国語のテストをします。途中で1回，5分間休みます。

このテストはみなさんの国語の力がどれくらいあるかをみるためにおこなうのですが，学校の成績には関係がありません。このテストのできが悪かったから，学校の点が悪くなるというようなことはありません。

しかし，みなさんの国語の力はどの方面がどれくらい伸びているか，全国の学校の国語の力はどの程度かというようなことを調べる，だいじなテストですから，最後までおちついて，一生けんめいにやってください。」

(2) 用紙をくばる

「これから用紙をくばりますが，その前に，鉛筆，消しゴム，したじきなど，答案を書くのに必要なものだけ出して，ほかのものはしまいなさい。」

「用紙がくばられたら，こういうように表紙を出して机の上におきなさい。」(調査者が手本ヲ示ス)

「さしずがあるまで中を開いて見てはいけません。」

(用紙ヲ，表紙ヲ上ニシテクバル。)

(3) 用紙の点検と氏名・番号・男女別の記入

(用紙ノ配布ガ終ッタトコロデ)

「テストの用紙を持っていない人はありませんね。」

「では，鉛筆をとって，表紙のところに，番号と，男女別と名前を書きなさい。男・女は○で囲みなさい。それだけ書いたら鉛筆をおいて，こちらを見てください。やりかたの説明をします。」

(4) やりかたの説明

「一番はじめにやるのは，聞きとりのテストですが，これははじめに練習をして，やりかたがよくわかってからやります。」

「その次からは，どの問題も，この紙の中に，やりかたがよくわかるように説明してありますから，それをよく読んでからやってください。いつも『はじめ』の合図で鉛筆をとり，『やめ』の合図で鉛筆をおくことにします。その間の時間はじゅうぶんあります。」

「それからこのテストでは，一つ一つの問題について説明をしませんから，どうしても先生にききたいということがあったら，声を出さないで，だまって，静かに手をあげてください。そうすれば先生がそこへ行って，その人の質問を聞きます。」

(5) 聞きとりの練習

「ではまずはじめに聞きとりの練習です。」

「答案用紙をひっくりかえして，裏の方を出してみてください。そこに『練習』の問題が出ていますね。」

「これから，練習のニュースを言います。このニュスを聞いてここに書いてあるのを読んで，それが合っていればその番号の上に○，まちがっていれば上に×じるしをつけるのです。」

「○や×をつける時には，はっきりつけてください。一度つけて，消しゴムで消して，また別につけると，消しかたが悪いためにどちらにつけたのかわからないことがあります。きれいに消してはっきりつけるようにしてください。」

「聞く時は鉛筆を持たないではじめに全部聞いてしまいます。そうして，『はじめ』という合図があってからはじめます。」

「ニュースは三つありますが，一ぺんしか言いません。テストにはあまりこまかいことは聞きませんから，楽な気持で聞いていてください。」

第1のニュース

天皇陛下が，十二月四日，東京都千代田区六番町の，番町小学校の，創立八十周年の記念式においでになりました。（15秒）

次，

北海道の江別というところで，火事があって，ちょうど講習のため，とまりがけで来ていた，学校の先生が，七人も死にました。（13秒）

その次，

くじらを取る船が，十二月二十五日に南の方の，海へ向けて，出発しました。（8秒）

「これで終りです。さあ鉛筆をとって下さい。『はじめ』」（1分オク）

「どうですか。今聞いたニュースに合っているのには上に○をつけ，合っていないのには×をつけるのですよ。」（1分オク）

「やめ。」「みんなできましたか。(1)はマル，(2)はマル，(3)はバツが正答です。」「これからはじめる問題1はこんなふうにやるわけです。」

(6) 第 1 問

「では問題1ですが，用紙は表紙を出してください。しかし中をあけないで，そのままの姿勢で聞いていてください。ニュースが終って，『はじめ』の合図があってから紙を開きます。」

（次ノニュースヲ読ム）（朗読基準速度1分33秒）

これから中学生新聞のニュースを放送しますからよくきいてください。

はじめに，（ココマデ10秒，2秒オク）

今は十円の紙幣，つまりおさまつがおこなわれていますが，来年早々十円の硬貨つまりまるいお金が，新しくお目見えすることになりました。こんど発行される十円の硬貨は，もとの一銭銅貨より少し大きいくらいですが，これにともなって，十円と五円のおさつは，来年一ぱいでほとんど姿を消すはずです。（所要時間20秒）

次（2秒）

世界の有名な物理学者を集めて物理学者の会議が，来年の秋，京都大学で開かれます。

会議にはノーベル賞の湯川博士を会長にして，アメリカ，イギリスをはじめ十一か国の学者が集まるそうです。（17秒）

次（2秒）

国鉄では，全国の駅のうち，建ってから四十年以上になる古いものを，五か年計画で，全部，鉄筋コンクリート建てに改築することになりました。この工事の予算は百六億円で，その中には金沢駅もはいっています。（17秒）

最後に外国のニュース（4秒）

イギリス政府の発表によると，来年六月に行われるエリザベス二世のたい冠式には，ウエストミンスター寺院附近で，二十七マイルの沿道に九万人の観覧席をつくる予定だそうです（15秒，1秒オク）

ニュースはこれでおわりです。（3秒）

「では第1ページの問題1というところをあけてください。」

「鉛筆をとって。」「はじめ。」（2分オク）「やめ。」

(7) 第2問から第5問まで

次は問題2です。第2ページと第3ページをあけなさい。時間はじゅうぶんありますから，よく問題を読んで，まちがえないようにしてやってください。」「はじめ」（5分）「やめ。」

「第4ページと第5ページ，問題3のところ。」「はじめ。」（5分）「やめ。」

「第6ページ，問題4のところ，とじたところで二つに折って，問題4だけ出してやってください。」「はじめ。」（5分）「やめ。」

折ったままかえして，「第7ページ，問題5のところ。」「はじめ。」（第6ページノ方ヲ開イタリ，ヤッタリシナイヨウ注意）（5分）「やめ。」

(8) 休　憩

「これではじめの5問を終りましたから，少し休みます。」

「答案の用紙は一度とじましょう。はじめ配られた時のように，表を出して机の上において下さい。」

「さあ，こちらを向いて。休みといってもお互に話をしてはいけません。少しからだを楽にして深呼吸をしなさい。」

「目をつぶったり，手やからだを動かしたりしてもよろしい。」（5分休ム）（コノ際，ドウシテモ便所ヘ行キタイトイウモノガアッタラ一人ズツ行カセル。相互ニ話シ合ワナイヨウニスル。）

「5分たちました。では，休みはこれでおしまいです。」

「あとの5問はやさしい問題ばかりですから，一生けんめい続けましょう。」

(9) 第6問から第10問まで

「第8ページをあけます。問題6というところ。とじたところで，二つに折って，

問題6だけ出してやってください。」「はじめ。」（3分）「やめ。」

「ひっくりかえして第9ページ，問題7というところ。」「はじめ。」（6分）「やめ。」

「第10ページと第11ページ，問題8というところ。」「はじめ。」（8分）「やめ。」

「第12ページと第13ページ，問題9というところ。」「はじめ。」（5分）「やめ。」

「いよいよ最後の第14ページと第15ページ，問題10というところですね。」「はじめ。」（5分）「やめ。」

(10) 答案を集める。

「国語のテストはこれで全部終りました。問題用紙の各頁の右下の番号らんに自分の番号を書き入れて下さい。

「はじめ配ってもらった時のように，表を出して机の上におきなさい。」

（4） 結果解釈の手引（小・中学校）

〔Ⅰ〕 問題作成の基本方針

この調査は，次の三つの基本方針によって調査問題が作成されている。

(1) 個人，学級，学校，地域の国語の学力の全体的な水準を明らかにする。

(2) 個人，学級，学校，地域において，国語の学力のどの方面がすぐれているか，どの方面が劣っているかを明らかにする。

(3) 学力のついた原因，つかない原因は何であるか——学習指導における重点のおきどころ，教科書の適否，施設の良否，地域の関係等，それを見きわめて，そこから教育改善の方途を明らかにする。

〔Ⅱ〕 調査する能力の決定

昭和27年はテストの範囲を，

(1) 聞く (2) 話す (3) 読む (4) 書く (5) 漢字 (6) 文法

(7) 文学鑑賞

として，「語い」について特別に問題を作らなかった。その範囲の中でどのような能力をとりあげるかについては，

(1) 現行『学習指導要領』の分析によって，どのような能力を教育課程で目標としているかを調べる。

(2) 客観考査法によって，与えられた時間内に，与えられた紙数で，大量的に検査し得るものを求める。

(3) 小学校・中学校にわたって共通した基礎的な能力で，なるべくその発達のくあいもみられるようなものに限る。

以上のようにして決定した。

〔Ⅲ〕 調査の材料と設問

(1) 材料は，現行教育課程によって，一方にかたよらないように，詩，随筆，新聞，手紙等に求めた。

(2) 現行の各種教科書の材料の選び方と難易の程度を参照した。

(3) 設問には各教室で実際におこなっている指導の方法を考慮した。

〔Ⅳ〕 各問題のねらい，問題構成一覧表

小　学　校

問題番号	検査する能力		材料と設問		問の数	テスト時間
問題1	聞く	正しく聞きとる	こども新聞ニュース	要点の書き抜きから正しいのをえらぶ	5	8分（練習を含む）
〃 2	話す	用件とことばづかいに注意して話す	学校から家庭への伝言	四つの伝言例から正しいものと正しくないものとをえらぶ	2	5分
〃 3	書く	叙述を完成する	生活文・報告・手紙	叙述の欠けているところに書きこむ	5	5分
〃 4	〃	表記符号を使う	短い生活文5編	、。「　」を入れる	5	5分
〃 5	〃	漢字を書く	現行教科書8種において5年までに既習で文部省初等教育課の調査で6年生の正答率50%内外のもの	文の中に書きこむ	10	5分
〃 6	読む	漢字の使ってある語を読む	上の教科書調査とテスト結果とによる	語に読みがなをつける	10	4分（前半計33分）
〃 7	〃	要点を表にする	説明文	書き出された要点を表の中に書きみむ	1	6分
〃 8	〃	すじをつかむ	随筆（児童文）	順序をかえてあるものをくみ立てる	2	5分
〃 9	〃	よい詩がわかる	童詩4編	詩をよい悪い一対にして比較させる	2	6分
〃 10	〃	文の主語や客語を見出す	随筆（児童文）	えらび出されている主語や客語の正しいものをとる	5	5分（後半22分）

中　学　校

問題番号	検査する能力		材　料　と　設　問		問の数	テスト時間
問題 1	聞く	正しく聞きとる	中学生新聞ニュース	要点の書き抜きから正しいものをえらぶ	5	8分（練習をけくむ）
〃 2	話す	用件とことばづかいに注意して話す	電話の会話	四つの会話の例からよいものとわるいものとをえらぶ	5	5分
〃 3	書く	叙述を完成する	生活文，報告，手紙	叙述の欠けている所に書きこむ	5	5分
〃 4	〃	文を文法的に完成させる	副詞をふくむ短文5編	欠けているところに書きこむ	5	6分
〃 5	〃	漢字を書く	教育漢字中やや困難度が高く，文部省初等課の調査で年生の正答率50%内外のもの	文あるいは語の中に書きこむ	10	5分（前半計29分）
〃 6	読む	漢字の使ってある語を読む	新聞に頻出する語（朝日新聞の調査による）	語にかなをふる	10	3分
〃 7	〃	要点を表にする	説明文	表の中へ要点を書きこむ	1	6分
〃 8	〃	すじをつかむ	随筆	文の欠けている部分を見出す	3	8分
〃 9	〃	よい詩がわかる	子どもの詩3編	よい詩をえらぶ	1	5分
〃 10	〃	文の主語や客語を見出す	随筆	えらび出されている主語や客語の正しいものをとる	5	5分（後半計27分）

〔Ⅴ〕 結果の解釈要領

1. 各問題についての得点の解釈

(1)ができていなければ聞く力がないわけであり，(2)ができていなければ話す力がないわけであるが，それは，このテストとしてのことであって，(1)は聞く力の一つの面であり，(2)は実際に話す力の基礎となる心得の一部面を検査しているにしか過ぎない。

(3)は書く力のうち作文の能力のテストであるが，内容は連想の試験である。それも厳密に考えないですぐ書くような者がかえって有利である。（答の質が考慮されてないから。）それに，やりかたが分らないからできなかったという者があるかも知れない。また採点に主観的なものがはいりやすい。

(4)についても，こうした仕事をやりつけない者にはむずかしいし，そうでない者にはやさしい訳である。

(5)(6)(7)および(8)(10)は，テストとしてふつうに行われている方法であるが，(7)はあるいは，こういう仕事がはじめてであり，やりかたがわからないためにできなかった者があるかも知れない。

また(9)については，童詩の指導は広くおこなわれており，概念的なものよりも具象的なものをよいとする指導が行きわたっていると考えて出題したものであるが，それだけに生徒自身の詩の鑑賞力からでなく，よい詩をよいとする学習指導を受けていたかどうかということによって，できばえがちがって来る。

したがって，結果を解釈して行く上に

(イ) これは掲げられた「検査する能力」の一面を一方法でテストしているにしか過ぎないこと。

(ロ) こうした学習指導を受けているかいないかで成績がちがうこと。

(ハ) 全般的に，テストに慣れているかいないかで成績がちがうこと。

等を考慮しなければならない。

2. 得点表からの国語の能力の見分け方

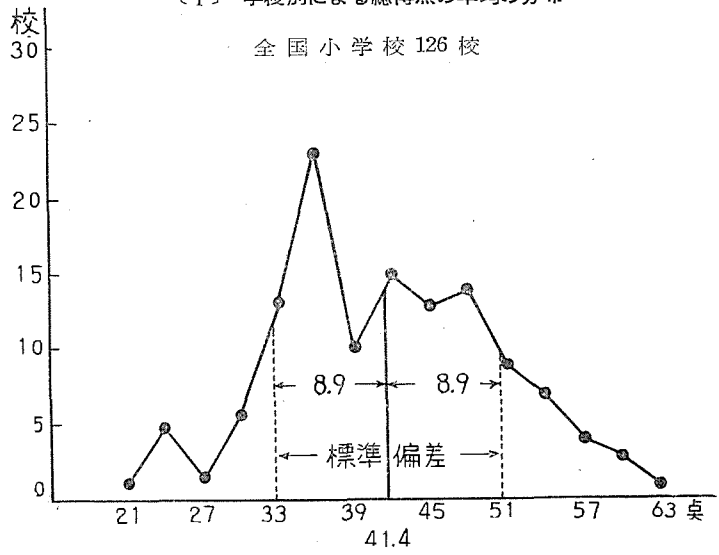
聞く力……	得点表1	(問題(1)の成績)
話す力……	〃 2	(〃 (2) 〃)
作文の力……	〃 11	(〃 (3)と(4)の計)
漢字の力……	〃 12	(〃 (5)と(6)の計)
文章読解の力……	〃 14	(〃 (7)と(8)の計)
文学鑑賞の力……	〃 9	(〃 (9)の成績)
文法の力……	〃 14	(〃 (4)と(10)の計)
読む力(全般)……	〃 16	(〃 (6)(7)(8)(9)(10)の計)
書く力(全般)……	〃 15	(〃 (3)(4)(5)の計)

3. 「計」は，このテストによる国語の総合的な能力をあらわすわけであるが，このテストにおける「聞く」10点，「話す」10点，「読む」50点，「書く」30点というのは前のⅡに記したように，このテストとしての結果の集計の方法であって，教育課程の上の重みづけをしたのではない。だから，もし学校において，「聞く」，「話す」，「読む」，「書く」をそれぞれ五段階の方法によって評価し，さらにそれの計によって国語の成績をきめているのであれば，それはこのテストの結果と厳密には一致しないわけである。しかし全体の傾向としては，おそらく一致するであろう。

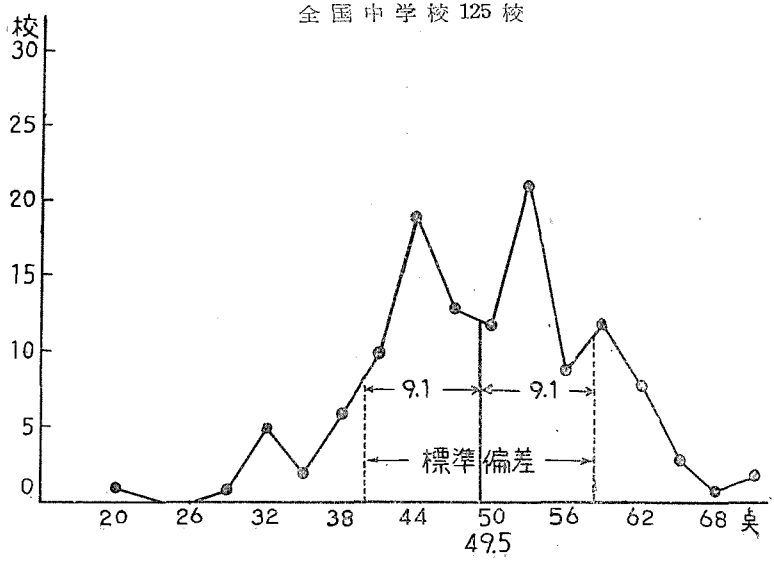
E. 結果の諸統計

〔I〕 学校別による総得点の平均の分布

全国小学校 126 校



全国中学校 125 校



〔Ⅱ〕 問題別の平均点およびその標準偏差

小　学　校

	平均得点	標準偏差
問　1	6.39	0.60
問　2	3.99	1.15
問　3	4.72	1.46
問　4	3.33	1.17
問　5	3.59	1.54
問　6	3.20	1.19
問　7	2.27	1.36
問　8	3.26	1.26
問　9	6.64	1.19
問　10	5.57	0.96

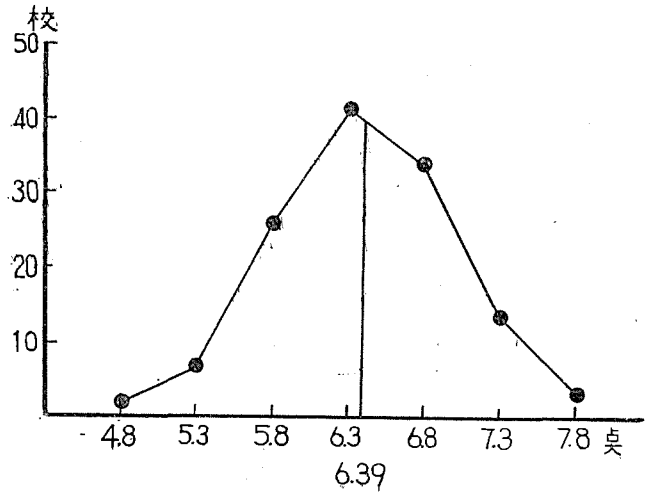
中　学　校

	平均得点	標準偏差
問　1	6.40	0.58
問　2	5.53	1.47
問　3	5.08	1.45
問　4	7.04	1.05
問　5	3.85	1.19
問　6	4.37	1.28
問　7	3.25	1.54
問　8	3.77	1.17
問　9	5.85	1.04
問　10	4.79	1.21

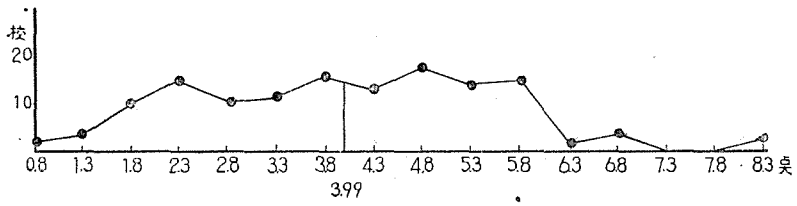
〔Ⅲ〕 各問題の得点の分布

小　学　校

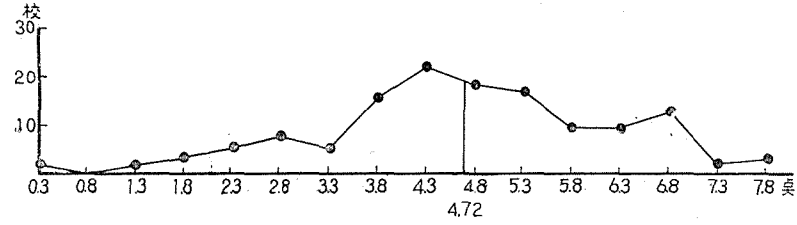
（問　1）



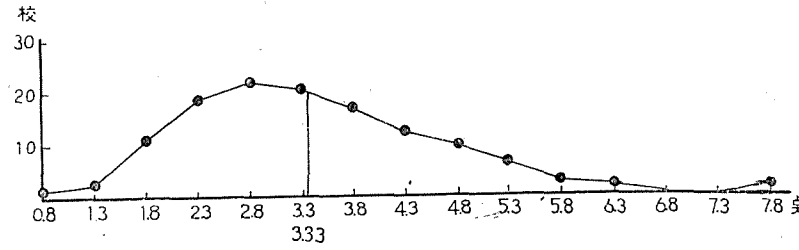
（問　2）


校
20
10
0.8 1.3 1.8 2.3 2.8 3.3 3.8 4.3 4.8 5.3 5.8 6.3 6.8 7.3 7.8 8.3 点
3.99

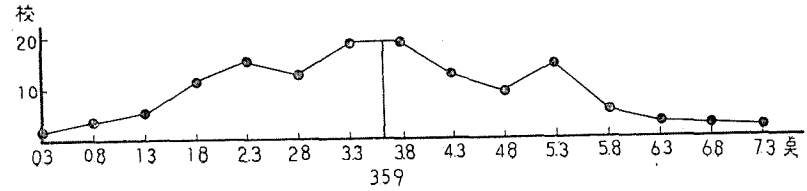
（問　3）


校
30
20
10
0.3 0.8 1.3 1.8 2.3 2.8 3.3 3.8 4.3 4.8 5.3 5.8 6.3 6.8 7.3 7.8 点
4.72

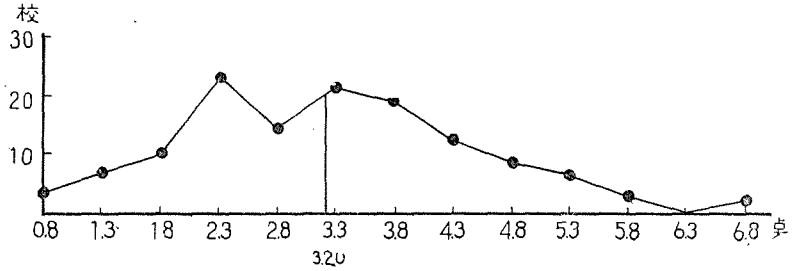
（問　4）


校
30
20
10
0.8 1.3 1.8 2.3 2.8 3.3 3.8 4.3 4.8 5.3 5.8 6.3 6.8 7.3 7.8 点
3.33

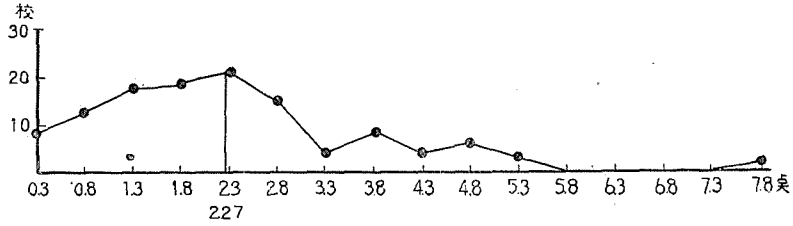
（問　5）


校
20
10
0.3 0.8 1.3 1.8 2.3 2.8 3.3 3.8 4.3 4.8 5.3 5.8 6.3 6.8 7.3 点
3.59

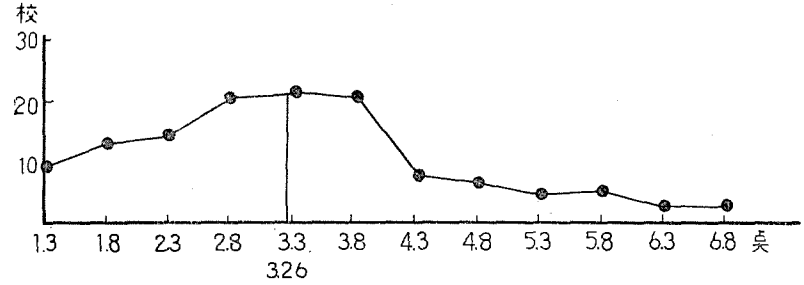
（問　6）


校
30
20
10
0.8
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
点
3.20

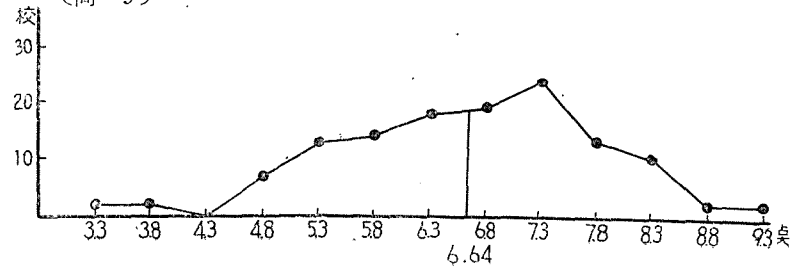
（問　7）


校
30
20
10
0.3
0.8
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
点
2.27

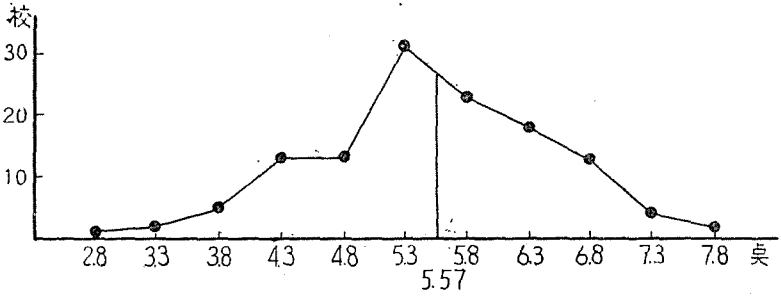
（問　8）


校
30
20
10
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
点
3.26

（問　9）

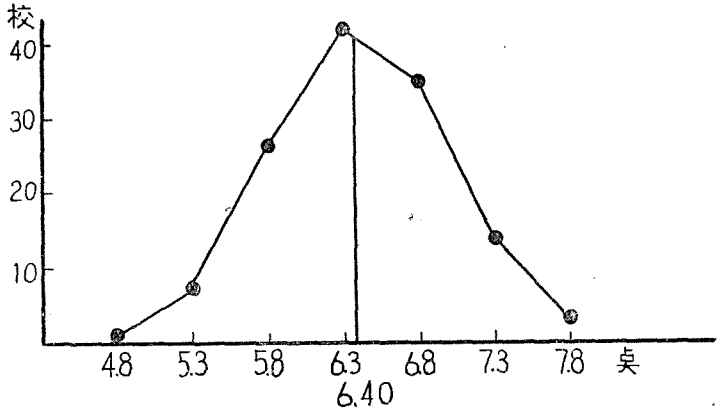

校
30
20
10
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
8.3
8.8
9.3
点
6.64

（問　10）

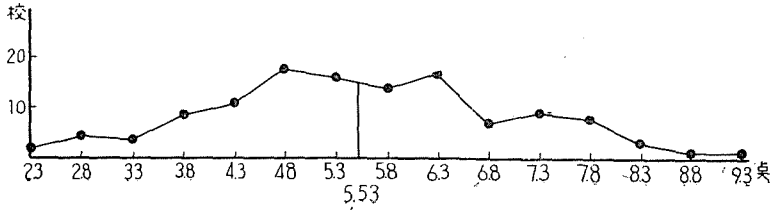

校
30
20
10
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
点
5.57

中　学　校

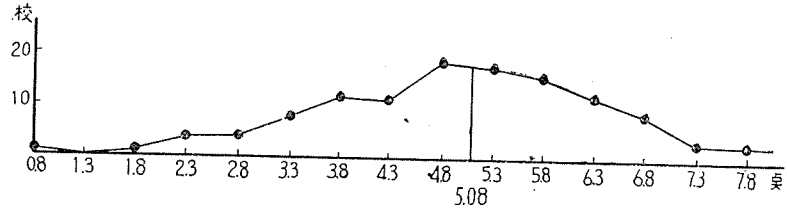
（問　1）


校
40
30
20
10
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
点
6.40

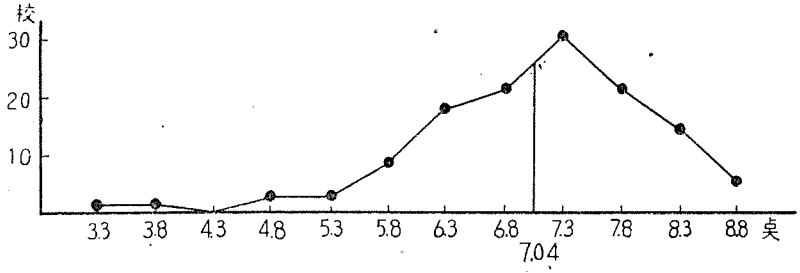
（問　2）


校
20
10
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
8.3
8.8
9.3
点
5.53

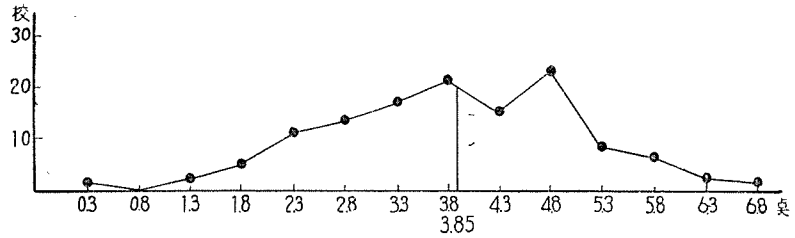
〔問　3〕


校
20
10
0.8
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
点
5.08

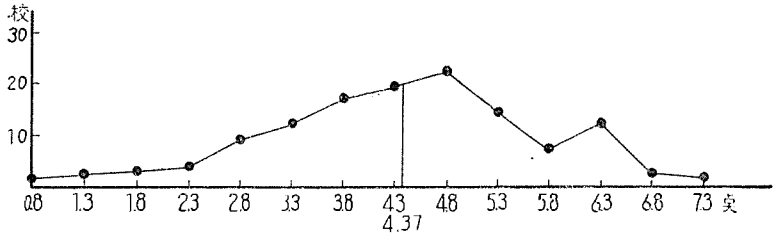
〔問　4〕


校
30
20
10
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
8.3
8.8
点
7.04

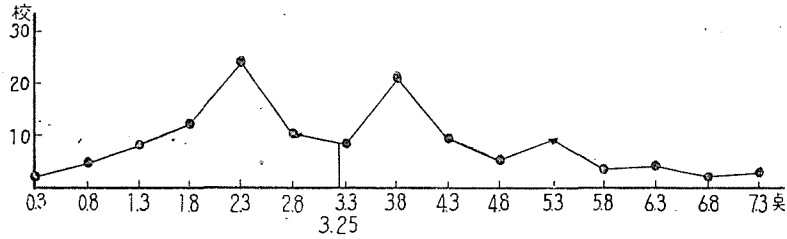
〔問　5〕


校
30
20
10
0.3
0.8
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
点
3.85

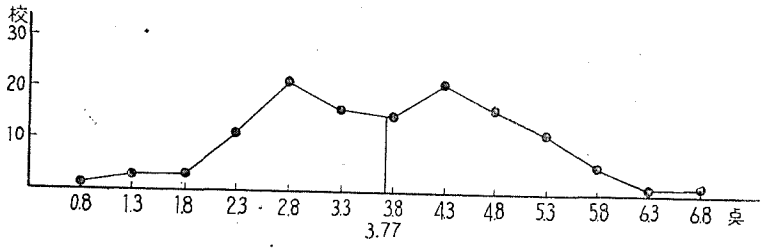
〔問　6〕


校
30
20
10
0.8
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
点
4.37

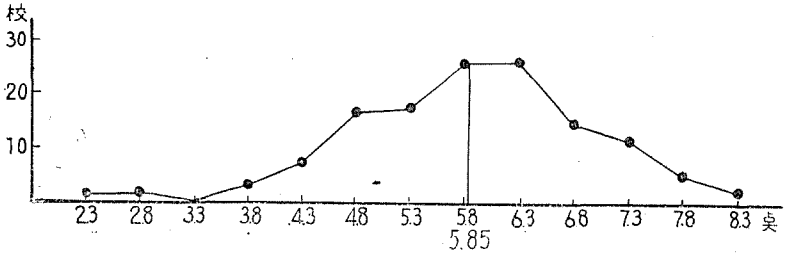
（問　7）


校
30
20
10
0.3
0.8
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
臾
3.25

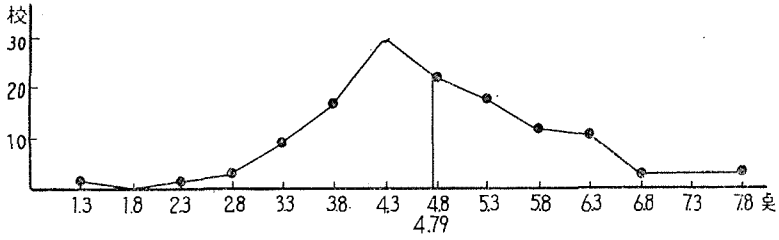
（問　8）


校
30
20
10
0.8
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
臾
3.77

（問　9）


校
30
20
10
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
8.3
臾
5.85

（問　10）


校
30
20
10
1.3
1.8
2.3
2.8
3.3
3.8
4.3
4.8
5.3
5.8
6.3
6.8
7.3
7.8
臾
4.79

〔Ⅳ〕 問題別得点から見た国語学力の相関

1	小学校	イ．合計点と書字力（5）	0.70
		ロ．〃　読字力（6）	0.43
		ハ．〃　聞く話す（1＋2）	0.59
		ニ．〃　作文（3＋4）	0.90
		ホ．〃　漢字（5＋6）	0.72
		ヘ．〃　解釈（7＋8）	0.88
		ト．〃　文法（4＋10）	0.77
		チ．〃　書く（3＋4＋5）	0.92
2	中学校	イ．合計点と書字力（5）	0.76
		ロ．〃　読字力（6）	0.84
		ハ．〃　聞く話す（1＋2）	0.78
		ニ．〃　作文（3＋4）	0.84
		ホ．〃　漢字（5＋6）	0.85
		ヘ．〃　解釈（7＋8）	0.84
		ト．〃　文法（4＋10）	0.89
		チ．〃　書く（3＋4＋5）	0.89

〔Ⅴ〕 層別・個人別平均得点表

層a．b．c．d．e．fは教員の質を四段階に分け，公開研究授業の回数を0，1，2以上の三段階に分けその組み合わせによる。

層1，2，3，4，5，6は学級数あるいは進学率を三段階に分け，特別教室の数を三段階に分け，その組み合わせによる。

小　学　校

層	児童数	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	問題6	問題7	問題8	問題9	問題10	計
a	282	5.8	4.1	6.0	4.6	3.9	3.7	3.9	4.4	7.3	6.3	50.0
b	585	6.1	4.3	6.2	4.2	4.6	4.1	3.1	3.7	7.0	6.3	49.5
c	434	5.8	4.5	5.3	4.1	4.2	3.6	3.0	4.0	7.2	6.1	49.2
d	733	5.6	3.8	5.0	3.1	3.6	3.1	2.3	3.3	6.4	5.6	46.2
e	1318	5.7	4.0	4.6	3.3	3.6	3.1	2.0	3.3	6.9	5.5	41.9
f	1231	5.2	3.9	4.4	3.0	3.3	3.0	1.5	2.8	6.6	5.2	38.8
計	4583	5.6	4.0	5.0	3.5	3.7	3.3	2.3	3.4	6.7	5.6	43.2

中　学　校

層	生徒数	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	問題6	問題7	問題8	問題9	問題10	計
a	480	6.8	6.3	5.9	7.6	5.0	5.7	6.7	4.5	6.4	5.9	58.8
b	1350	7.3	6.1	5.7	7.4	4.3	4.9	3.7	4.1	6.0	5.3	54.2
c	1064	5.2	6.0	5.3	7.0	3.9	4.5	3.4	3.9	5.7	5.0	50.3
d	732	6.3	5.1	5.1	7.0	3.9	4.3	3.0	3.6	5.7	4.7	42.7
e	1014	6.3	5.5	4.7	7.1	3.4	3.7	2.5	3.6	5.8	4.4	47.6
f	410	6.1	4.3	3.4	3.6	2.8	3.2	2.2	3.1	5.6	3.7	38.0
計	5050	6.4	5.6	5.2	6.9	3.9	4.4	3.3	3.8	5.9	4.9	50.2

小　学　校

層	児童数	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	問題6	問題7	問題8	問題9	問題10	計
1	609	6.1	4.3	6.0	4.3	4.7	4.0	3.8	4.4	7.2	6.4	51.2
2	1129	5.7	4.6	5.0	3.5	3.7	3.2	2.2	3.4	6.8	5.7	43.7
3	1736	5.7	3.8	4.9	3.5	3.8	3.4	2.2	3.4	7.0	5.7	43.2
4	864	5.2	3.7	4.6	3.0	3.3	3.0	1.8	2.8	6.6	5.2	39.2
5	106	5.4	2.7	3.8	3.0	1.8	2.7	2.0	2.4	4.9	4.4	33.1
6	139	4.6	4.0	3.0	2.4	2.4	2.1	0.9	2.3	6.1	4.5	32.4
計	4583	5.6	4.0	5.0	3.5	3.7	3.3	2.3	3.4	6.8	5.6	43.2

中　学　校

層	生徒数	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	問題6	問題7	問題8	問題9	問題10	計
1	573	6.7	6.2	5.9	7.4	4.2	5.3	4.3	4.4	6.0	5.7	56.0
2	741	6.5	6.7	6.2	7.7	4.2	5.0	4.1	4.7	6.2	5.7	56.9
3	1010	6.4	5.6	5.3	7.1	3.9	4.4	3.0	3.7	5.9	4.7	50.1
4	1537	6.4	5.1	4.7	6.8	3.7	4.0	2.9	3.6	5.8	4.5	47.6
5	574	6.4	5.3	4.3	7.0	3.6	4.3	2.9	3.9	5.9	4.6	48.3
6	615	6.4	5.7	5.0	7.2	4.1	4.4	2.9	3.2	5.7	4.7	49.3
計	5050	6.4	5.6	5.2	7.1	3.9	4.5	3.3	3.9	5.9	4.9	50.7

〔層別による得点差の検定〕

小　学　校

層＼総得点	0〜10	11〜20	21〜30	31〜40	41〜50	51〜60	61〜70	71〜80	81〜90	90〜100	計	平均	分散
a	3	19	37	44	44	40	38	39	13	4	282	50.0	426.9
b	17	33	66	90	99	96	80	55	38	11	585	49.5	446.5
c	8	26	51	69	88	89	46	36	17	4	434	46.2	365.7
d	53	150	214	251	235	160	119	77	48	11	1318	42.3	423.5
e	24	76	123	145	129	104	68	48	11	5	733	41.9	373.0
f	62	175	227	237	190	105	112	58	20	5	1231	38.8	382.4

a — b	$t = 0.3$	$p > 0.50$
b — c	$t = 2.5$	$p < 0.01$
c — d	$t = 3.5$	$p < 0.01$
d — e	$t = 0.4$	$p > 0.50$
e — f	$t = 3.4$	$p < 0.01$

$(a = b) > c > (c = d = f)$

中　学　校

層＼総得点	0〜10	11〜20	21〜30	31〜40	41〜50	51〜60	61〜70	71〜80	81〜90	91〜100	計	平均	分散
1	6	37	62	86	105	114	81	68	45	5	609	51.2	403.7
2	35	111	171	201	204	165	121	72	40	9	1129	43.7	407.9
3	61	164	275	334	303	228	181	129	39	22	1736	43.2	410.7
4	46	122	144	165	145	111	70	38	19	4	864	39.2	392.1
5	9	24	24	18	12	7	6	3	3	0	106	33.1	987.7
6	10	21	42	32	16	9	5	3	1	0	139	32.4	268.2

1 — 2	$t = 7.5$	$p < 0.01$
2 — 3	$t = 0.6$	$p < 0.50$
3 — 4	$t = 5.0$	$p < 0.01$
4 — 5	$t = 3.1$	$p < 0.01$
5 — 6	$t = 0.3$	$p > 0.50$

$1 > (2 = 2) > 4 > (5 = 6)$

〔Ⅵ〕 学習指導上の留意点と困難点

（学校・学級調査表による，数字は校数）

指導上の留意点	小	中
(1) 漢字（読字・書字），語い，基礎能力，ドリル学習。辞書使用	48	50
(2) 読解，読みの意欲。内容の探究，朗読。読みの能力別	59	49
(3) 文法，ことばの研究。	1	12
(4) 社会的生活的な力，応用力，綜合的取扱い。	9	19
(5) 聞く，話す，話しことば。	8	8
(6) 発表力，表現。劇，作文（日記）	18	15
(7) ふだんの読書，図書室の利用，文学鑑賞。	6	12
(8) その他 自学自習，学習態度，習字。	2	20

指導上の困難点	小	中
(1) 文字や語を知らない。基礎力がない。	37	51
(2) 読む力が足りない。	32	18
(3) 文法の取扱い。句読点	2	12
(4) ことばが悪い。方言	14	6
(5) 環境が悪い。経験が足りない。参考資料の不足。	18	26
(6) 個人差がひどい。遅進児がいる。	8	14
(7) 学級の人数が多すぎる。時間が足りない。学級編成が悪い。	8	2
(8) その他 発表しない。教材が多すぎる。指導技術の不足。ローマ字，詩。	27	46

これらの諸統計の結果の教育的意味については，国立教育研究所から公刊される「全国小・中学校児童生徒学力水準調査第一次報告」の方に出すことになっているので，ここには，そちらの方に出ないなまの数字を報告することを主にした。

なお，学力標準設定のための基礎として今年度は特に漢字能力検査の方法に関する問題をとりあげ，問題作成の過程において，たとえば選択法でやればどのくらい漢字の識別力のある者が，再生法になるとどのくらいの能力になるか，読んだり書いたりする場合の脈絡（どんな語として，どんな文脈の中で出すか）はどのくらい結果に関係があるかなどについて調査した。

これ等のことについてはいずれ別に報告する機会があるであろう。

新聞に対する態度・経験・能力の発達に関する調査

A. 調査の目的

この調査は，

1. マス・コミュニケーションが児童生徒にどんな影響を与えているか。
2. 児童生徒は，新聞に対する態度・経験・能力をどのように発達させるか。
3. その態度・経験・能力と一般の国語能力とはどう関係するか。
4. 学校における新聞の学習指導の実態および新聞に対する態度・経験・能力の発達との関係はどうか。

などの問題を明らかにして，マス・コミュニケーションの利用ならびにその学習指導の改善に寄与しようとするものである。

B. 調査の項目

上の目的を達するため，次の項目を調べる。

1. 児童生徒の新聞に対する態度・経験・能力を学年別に調査し，何年生ごろから読むか，どこを読むか，わかっているか，などを明らかにする。
2. 次に国語学力の発達をテストし，新聞に対する態度・経験・能力との関係を見る。そして，どのくらいの学力なら読めるか，新聞用語はやさしいか，などを調べる。
3. 学校環境ならびに生活環境を調査し，学校の新聞教育，読書，ラジオ，映画などと新聞の習慣との関係を明らかにする。これによって，マス・コミュニケーションの児童生徒に与える影響を見るとともに，かれらがその態度・経験・能力を発達させるにはどうしたらよいかを発見する。

C. 調査の計画と実施

1. 地域と学校　社会的環境が明瞭に異なることを条件として，大都市と農村の学校を選ぶこととし，結局，千葉県教育研究所戸川昂氏の御協力を得て次の学校に決定した。

東京都港区　南山小学校　北芝中学校
千葉県印旛郡　実住小学校　八街中学校
千葉県香取郡　神崎小学校　神崎中学校

八街は台地畑作を主とする明治以後の開拓部落，神崎は水稲農業を主とする古くから開けた村で，両者の性格は違っている。

2. 被調査者　小学校4年生から中学3年生まで，各学年約50名を各地域から選ぶこととした。東京では任意の学級を抽出して，その全員を被調査者としたが，神崎および八街では乱数表によって，各学年から50名を抜いた。

3. 調査の方法

a　新聞の態度経験については，面接法と質問紙法（集合）により，次の項目を調べる。

(1)読んでいる新聞　(2)読む習慣　(3)読んでいる記事　(4)新聞の効果　(5)読み始めた時期・動機・記事　(6)新聞への関心　(7)子供新聞との関係　(8)学級学校新聞の経験

b　新聞の理解については，テストによりその項目を調べる。

(1)記事の理解（こども，広告，社会，文化，政治，運動，社説の各欄）　(2)新聞語彙の理解　(3)新聞漢字の読み

c　国語能力については，同じくテストによって次の項目を調べる。

(1)読書速度　(2)教科書語彙の理解　(3)教科書漢字の読み

d　生活環境については，質問紙法（集合）によって次の項目を調べる。

(1)居住経歴　(2)旅行　(3)交通　(4)読書　(5)ラジオ　(6)映画　(7)家庭生活　(8)意識

e　その他学校環境，地域環境に関しては実地調査・資料調査を行う。

4. 調査月日

1952年12月18日 19日　北芝中学校
〃　22日 23日　南山小学校
1953年1月17日 18日　神崎小学校　神崎中学校
〃　21日 22日　実住小学校　八街中学校

5. 調査員の構成

この調査は，計画から実施整理まで，日本新聞協会との共同で行うこととした。

三宅東洲　亀井一綱　高須正郎　田中　融　（日本新聞協会）
興水　実　高橋一夫　芦沢　節　（第四研究室）
森岡健二（第五研究室）

D. 成　　果

この調査は，目下整理中で，すでに各分担についての集計は終ったが，まだ相互の関係を見るに至っていない。

1. 新聞の態度・経験について

これは

a．家でとっている新聞　b．児童生徒の読んでいる新聞
c．全く読まないもの　d．1日に読む平均時間
e．読み始めた学年　f．初めて読み出した記事
g．興味を感ずる記事　h．広告の読み方
i．運動記事の読み方　j．新聞を読む習慣

などの項目に関し，地域別，学年別，性別に実数ならびに百分率を求めた。この整理には主として日本新聞協会があたった。

たとえば，新聞を読む習慣の主なものを示すと，次の通りである。

（1） **まんが**（新聞を見る時には必ず見るものの百分率。以下も同じ。）

地域＼学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	68.0%	66.7	77.0	80.7	76.9	86.9

神	崎	54.0	52.0	52.0	75.5	75.0	54.0
八	街	38.0	50.0	59.1	63.8	69.3	48.9

（2） ラジオ番組

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	28.0%	37.5	71.1	57.6	75.0	71.7
神崎	16.0	16.0	22.0	67.3	66.7	78.0
八街	4.1	19.0	30.6	46.8	51.0	41.2

（3） 廣　告

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	18.0%	41.6	42.3	46.2	40.4	47.8
神崎	6.0	12.0	14.0	44.8	60.4	56.0
八街	6.1	36.0	24.4	25.5	30.6	33.3

（4） 子供欄

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	32.0%	28.5	49.1	39.4	40.3	36.9
神崎	0	6.0	8.0	20.4	18.7	22.0
八街	6.1	16.0	12.2	23.4	18.4	19.6

（5） 運動記事

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	22.0%	27.0	27.1	35.2	38.5	43.4
神崎	16.0	12.0	18.0	40.8	27.0	26.0
八街	12.2	6.0	6.1	23.4	12.2	29.4

（6） 社会記事

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	16.0%	18.7	38.9	42.3	55.5	67.4
神崎	6.0	0	12.0	36.7	29.1	58.0
八街	6.0	2.0	12.2	25.5	32.6	39.2

（7） 学芸欄

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	2.0%	0	5.1	5.8	21.1	21.7

神	崎	0	0	0	0	2.1	6.0
八	街	0	2.0	0	0	6.1	13.7

(8) 日本の政治に関する記事

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東	京	0%	2.1	10.2	19.2	25.0	21.73
神	崎	0	2.0	4.0	4.1	6.3	30.0
八	街	0	4.0	6.1	2.1	12.2	15.7

(9) 外国の状勢に関する記事

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東	京	2.0%	0	1.7	13.5	13.5	21.7
神	崎	0	0	4.0	6.1	4.5	22.0
八	街	2.0	6.0	8.2	4.3	12.2	19.6

(10) 社　説

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東	京	2.0%	0	3.4	1.9	0	2.2
神	崎	0	0	0	2.0	4.2	6.0
八	街	0	0	4.1	0	0	2.0

以上を通覧して，新聞に対する接触度は，やはり東京が高いことが目立っている。神崎は，小学校では低調でどちらかといえば八街に劣るほどであるが，中学校になって急に上昇し，小学校との間に断層のあるのが特徴的である。八街は小学校では神崎よりやや優位であるようだが，中学校になって神崎ほどには伸びない。これらは，社会環境の影響か，国語学力の関係か，種々問題のある所であろう。学年別に見ると，多少の出入りがあるにしても，各地域とも上級の学年になるにつれて接触度が深くなって行くようである。記事別にみると，まず「まんが」は各地域とも低学年から親しまれているし「ラジオ番組」「広告」も大体において，利用度が高い。「子供欄」は東京において相当読まれているが，神崎八街で低調なのは，記事が都会的なためか，あるいは，児童生徒の読む新聞にこの欄がないためか，なお調べてみる必要があろう。「運動記事」は地域よりも男女の間に特に著しい差があるの

が目立つ。「社会記事」が特に東京に多く，神崎八街で案外伸びないのは，記事の内容が都会的で，地方の生活に直接結合して来ないためであろうか。「学芸」「政治」「外交」「社説」が小学校でほとんど読まれず，中学校ではよく読まれても2割程度であるのは，関心の薄さはもちろんながら，何よりも理解の困難さを物語っていると思われる。

2. **新聞の理解力ならびに国語の学力について**

これは

a．記事理解　b．新聞語彙　c．新聞漢語

d．読書速度　e．教科書語彙　f．教科書漢語

の問題を採点し，地域別，学年別，性別に点数の平均，分散などを求めるとともに，相互の相関をも検討した。この整理には，主として第四研究室があたった。

前例にならって地域別，学年別の表を作ると次のようになる。

（1） **記事理解**（正答率）

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	3.75%	4.80	7.55	9.25	12.90	15.85
神崎	2.60	3.90	7.50	6.45	9.70	13.50
八街	4.50	5.70	7.10	8.60	9.90	11.40
平均	3.61	4.80	7.38	8.12	10.53	13.56

（2） **新聞語彙十漢字**（正答率）

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	16.29%	16.23	41.51	55.40	74.86	82.34
神崎	17.23	29.29	35.34	46.91	55.60	75.57
八街	16.26	31.69	38.43	51.28	57.11	71.03
平均	16.54	25.68	38.03	51.23	62.71	76.22

（3） **読書速度**（2分間に読んだ平均行数）

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	38.89行	51.22	46.91	50.92	75.50	63.08

神	崎	36.52	48.04	47.55	64.96	58.28	55.59
八	街	40.19	40.58	54.78	54.63	61.75	59.24
平	均	39.19	46.19	47.40	55.41	57.66	58.43

(4) 教科書語彙十漢字（正答率）

地域 ＼ 学年	小 4	小 5	小 6	中 1	中 2	中 3
東 京	22.49%	32.91	55.83	61.88	78.11	85.57
神 崎	15.07	28.26	37.51	54.03	64.00	78.37
八 街	18.20	37.80	47.68	59.40	61.40	76.03
平 均	18.57	32.77	44.65	58.48	67.97	79.91

全般的に見ると，やはり東京がややすぐれているが，これを前の新聞に対する態度・経験と対照して考えると興味深い問題があるようである。新聞に対する態度・経験では，東京の小学校が一貫して他をずっと引き離していたが，理解力や語彙力は必ずしもそれに対応せず，八街神崎の方がすぐれている場合も少なくない。中学校の態度・経験になると，神崎が東京を越えている場合が見受けられたが，理解力・語彙力では逆に東京が一貫してすぐれている。これらの問題の検討は今後に譲るとしても，ともかくも，態度・経験と理解力とが小学・中学で逆の関係に立っていることは，今後追求すべき興味ある課題の一つであると思われる。

また，記事の理解力は小学校はもちろん，中学校においても非常に低い。語彙漢語の理解も特に小学校において低く，文章を読み解くだけの基礎さえできていないと信ぜられるほどである。このような児童の理解力・語彙力ではとても新聞に歯が立たないと考えられるにもかかわらず，すでに態度・経験において見て来た通り，新聞は児童の生活に取り入れられて種々の機能を果している事実が認められる。ここにも今後考究すべき問題が含まれているようである。

終りに，このテストの結果で特に目立っている点を二三指摘するとまず理解力・語彙力が各地域とも，非常に体系的に学年とともに上昇していることであろう。また，男女の間で「運動記事」の理解が明瞭に差のあること，お

よび，都市と農村との間で「こども欄」「運動記事」の理解が特に差のあることなども注意される。

3. 生活環境について

これは，

a．居住経歴　b．旅行　c．意識　d．交通　e．1か月に読む本　f．1か月に読む雑誌　g．蔵書　h．ラジオ　i．映画　J．家庭の話題　k．不安　l．希望

などの項目に関し，学年別，地域別，性別に整理した。また，このほか学籍簿その他担任教官への質問紙によって学科成績，知能指数，父兄の職業，父兄の教養，経済状態なども同様に集計した。この整理は主として第五研究室で行った。

次に，例によって，おもな項目を学年別，地域別に示すと，次の通りである。

（1）　**1か月に読む本**（2冊以上読むものの百分率）

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	98.0%	92.0	92.5	63.5	82.7	64.5
神崎	84.0	46.0	68.0	78.5	74.5	57.1
八街	84.0	68.5	91.0	68.7	67.2	41.2

（2）　**1か月に読む雑誌**（2冊以上読むものの百分率）

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	79.5%	96.0	89.0	77.0	82.6	62.5
神崎	70.0	74.0	78.0	59.5	72.4	63.2
八街	76.0	56.8	86.5	68.7	53.0	60.9

（3）　**ラジオ**（かならず毎日聞くものの百分率）

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	69.4%	98.0	85.0	80.6	78.8	79.2
神崎	50.0	36.0	66.0	63.7	61.6	83.6
八街	48.0	51.0	68.9	75.0	71.4	60.9

（4）　**映　画**（1か月に2回以上見るものの百分率）

地域	学年 小4	小5	小6	中1	中2	中3
東京	61.1%	46.0	39.0	27.0	40.4	60.4
神崎	58.0	38.0	40.0	36.2	55.4	34.7
八街	48.0	9.6	26.3	25.0	40.8	41.2

以上を地域的に見ると，全体としてやはり東京がマス・コミュニケーションへの接触度が高いように見受けられる。しかし，神崎八街においても決して低くないのであって，マス・コミュニケーションが農村にも非常に浸透していることが了解される。特に常設映画館を持たない神崎において，映画が異常に普及していることなどは注目に値する。

また，これらに関して著しい特徴と考えられることは，本，雑誌，ラジオ，映画ともに，学年に応じて上昇しては行かない事実である。ことに，本，雑誌など，低学年から高い普及率を示しているが，これは，その質的な面を調べればわかる通り，まんがや絵本程度のものも多く，児童はその能力に応じて自由に選択することができるからであろう。また，ラジオや映画のような視聴覚的要素は，国語学力の低さにもかかわらず，強く訴える力を持っていて，低学年でも十分に興味を感ずることができるからであろう。

ともかくも，これらへの接触が，国語学力や新聞経験とどう関連するかを見ることが，今後の課題になると思う。

E. 今後の方針

これまでは，担当者が個々に集計したにすぎないが，今後はそれぞれの関連を見て，「A調査の目的」に示した問題を明らかにするつもりである。

なお，この整理は，「少年と新聞—小・中学校生徒の新聞に対する接近と理解」と題して，公刊する予定になっている。

読みやすさの基礎調査

A. 前年度における調査の反省

この調査は，「読みやすさ」の尺度を設定して，記事の改善に寄与することを最終の目標とするものである。前年度は，そのもっとも基礎的な問題として，客観的な「読みやすさ」とは何か，を主として考察した。それは，尺度化のためには，かならず客観的な「読みやすさ」を基準とすべきで，もし「読みやすさ」が人によって異なり，そこに一貫性を認め得ないとすれば，尺度化することは，もとより不可能だからである。

調査の方法としては，明らかに難易の差があると思われる文章を選んで被調査者に順序づけのテストを試みるとともに，さらに常識的に明らかに差のある雑誌記事を選んで，その言語的要素を分析した。結果は，記事によって言語的要素に明らかに差のあることが認められたが，しかし，それが果して「読みやすさ」に関係するものであるかどうかは証明されなかった。

本年度は，次の点から前年度の調査に反省を加え，「読みやすさ」を新たに規定する所から出発した。

1. 前年度の調査において，たとえば漢字の多少，会話の多少，句読点の多少，ルビの多少などは，読む人によって「読みやすい」原因にもなっているし，「読みにくい」原因にもなっている。これは，読むという行動が，書かれるもの（Subject）—書く人（Writer）—記号（Sign）—読む人（Reader）などの諸条件の関連した力動的な過程で，「読みやすい」という印象はその時々の場（読む行動を成立させているすべての条件）の違いによって，変化するからであると思われる。尺度化にあたっては，このような相対的な場の違いによる「読みやすさ」の印象を基準にすることはできない。

2. 次に漢字の多少などの言語的要素が読む人によって「読みにくい」原

因にも「読みやすい」原因にもなっているにかかわらず，なにゆえに低学年用の雑誌から上級に向かうにつれて言語的要素が一定の複雑化の傾向をたどるのか。たとえば，低学年になるにつれて漢字が少なくなり，会話が多くなる。上級になるにつれてその逆の関係になる。しかも漢字の多い方が「読みやすい」という人には低学年のものが読みにくく，反対の人には高学年のものが読みにくい。これは「読みやすさ」という語が種々の次元で用いられるからで(1)にのべた場の相対性を示すものである。これでは，「読みやすさ」の段階と言語的要素の複雑化の度合とは決して一致しないことになる。ここに観点をかえて，「読みやすい」という語を「読むことができる」という意味に限定する必要があり，こうすれば相対的な印象と違って「読みやすさ」は客観的な根拠を獲得すると思われる。というのは「読むことができる」という読解の能力は，学年の上るのに比例して発達するはずだからである。たとえば，主観的に「かなの多い文は読みにくい」という人でも，客観的事実として低学年のものは容易に「読むことができる」のである。つまり，「読みやすい・読みにくい」という語を「読むことができる・できない」「理解し得る・し得ない」の意味に解すれば，言語的要素が上級に向かうにつれて複雑化の傾向をとる理由を了解し得ると思われる。

3. つまり，言語的要素の複雑化の過程は，低学年から高学年への読解力の発達に対応しているのだと考えられる。この対応に客観性があるとすれば，読みやすさの尺度は，この対応を基準として設定することが可能である。つまり，言語的要素の複雑化の度合を明らかにし，これを，対応する読解力の水準によって目盛りをつければ，文章の難易は何学年程度の読みものという風にあらわされることになる。

4. ここに尺度化のためには，言語的要素の複雑化の度合を測定するための分析と，読解力の学年発達水準を明らかにするテストを行って，両者の対応関係を見出すための調査が必要になる。

B. 本年度の計画

1. 以上によって，「読みやすさ」を，読解力の学年発達水準に対応する文章の難易と規定する。したがって，これが,「個人個人の主観的な印象としての「読みやすさ」と一致するかどうか」は別問題である。この理由によって，本年度は順序づけのテストを行わない。

2. 読解力の発達段階に応じ，言語的要素がどのように複雑化して行くかを分析する。このため，一応発達段階に応じて編集されていると思われる教科書の文章分析をすることにした。採用する教科書は，できるだけ流布しているものを選ぶことにした。学年と科目を示すと次の通りである。

小　四	小　六	中　三	高　三
国　語　3種	国　語　3種	国　語　2種	国　語　2種
社　会　3種	社　会　3種	社　会　2種	社会(世界史) 2種
理　科　3種	理　科　3種	理　科　1種	理科(物理) 1種

中三，高三に教科書数を少なくしたのは一冊の文の数が多いためである。

3. 分析すべき言語的要素として，次のものを選んだ。

a 文字および符号に関するもの

(1)総字数 (2)漢字数 (3)一字の漢字 (4)二字連続漢字，三字以上連続漢字 (5)。 (6)、 (7)会話 (8)その他

b 語彙に関するもの

(1)漢語 (2)外来語 (3)原語 (4)略語 (5)固有名詞

c 文法に関するもの

(1)主語 (2)文語の副詞・連体詞・接続詞・助動詞・助語 (3)口語の人称代名詞・感動詞・呼掛・助詞・助動詞 (4)接続語 (5)接辞 (6)二重否定 (7)サ変 (8)受身 (9)連体詞 (10)指示代名詞

4. 教科書から文を抜く方法として，(イ)最初は各頁の最後の一文を拾うことにした。これは尺度が実用に供される場合を考慮して，簡単な方法をとることが必要だと思ったからである。しかし，頁の最後の文は，作品の最後の文である場合が多く，ある種のかたよりの生ずる恐れがある。(ロ)したがって

同じ教科書より，等間隔に文を抜き出し，各学年各科目計200文を選んで，同じ分析を試みることにした。

5. 最後に，言語的要素の複雑化の度合に目盛りをつけるため，読解や水準テストを行って，言語的要素と読解力との対応する点を求めなければならないが，この目盛りづけの作業は調査規模と時間の点から本年度は行わない。

C．本年度の作業と結果

計画にもとづいて，選ばれた文につき言語的要素を分析した。結果は次の通りである。

1. 文字および符号の分析

イ．教科書各頁の最後の文を拾った場合

項目＼学年・教科書	小三 国	小三 社	小三 理	小六 国	小六 社	小六 理	中三 国	中三 社	中三 理	高三 国	高三 社	高三 理
	3	3	3	3	3	3	2	2	1	2	2	1
a 文の数	882			1178			1009			1012		
b 総字数	27970			47586			45526			52450		
c 一文平均字数(1)	31.71			40.46			45.12			51.83		
d 〃 (2)	28.63			36.33			43.99			51.62		
e 一句平均字数	11.40			12.64			15.47			19.84		
f 会話文	29.71			21.48			14.17			3.46		
g 漢字%	7.38			21.38			30.67			36.45		
h 一字漢字%	75.01			34.66			24.71			18.60		
i 二字連続漢字%	20.73			45.28			47.22			48.69		
j 三字以上連続漢字%	4.26			20.06			28.07			32.71		

ロ．各教科書の文を等間隔に拾った場合

項目＼学年・教科書	小三 国	小三 社	小三 理	小六 国	小六 社	小六 理	中三 国	中三 社	中三 理	高三 国	高三 社	高三 理
a 文の数	600			600			600			600		
b 総字数	17042			21763			26087			28199		
c 一文平均字数(1)	28.40			36.27			43.49			46.99		
d 〃 (2)	24.84			35.33			42.25			46.38		

e 一句平均字数	11.05	13.15	15.93	17.69
f 会話文%	27.67	27.67	11.00	5.83
g 漢字%	6.92	20.90	30.23	35.97
h 一字漢字%	74.81	34.21	25.21	21.55
i 二字連続漢字%	19,85	45.02	47.29	49.41
j 三字以上連続漢字%	5,34	20.77	27.50	29.04

〔注〕 a．文の数は対象となった文の総数。(1)「おはよう。」 (2)「ぼく，駅へ行ったんだけれど……。」(3)「先生は，『おはよう。みんなよく来たね。』とおっしゃった。」なども一文と数える。

b．総字数は「文の総数」に含まれる平がな・片かな・漢字・数字・ローマ字・数字の総数で，、。「 」……などの符号は含まない。

c．一句平均字数(1)は，$\frac{\text{b 総字数}}{\text{a 文の数}}$ したがって，次の総字数を。の総数で割ったものとは一致しない。

d．一文平均字数(2)は$\frac{\text{b 総字数}}{\text{。の総数}}$ たとえばaの(3)のように一文に。が二つ以上含まれる場合があるから，実質的な文の長さはcよりもdに反映されると思われる。

e．一句平均字数は$\frac{\text{b 総字数}}{\text{。の総数}+\text{、の総数}}$ これによって、から、，、から。までの一句の平均字数が得られる。

f．会話文%は，$\frac{\text{会話文総数}}{\text{a 文の総数}}\times 100$ 会話文は「 」に含まれる文。

g．漢字%は，$\frac{\text{漢字総数}}{\text{b 総字数}}\times 100$

h．一字漢字%は，$\frac{\text{一字漢字総数}}{\text{漢字総数}}$ 一字漢字とは，かなの間に漢字が一字だけ出て来る場合，たとえば，「犬が……」「よく働く」など。これは低学年に多いと思われる。

i．二字連続漢字は，$\frac{\text{二字連続漢字総数}}{\text{漢字総数}}\times 100$。二字連続漢字とは，語に関係なく漢字が二字続いている場合，たとえば「学校が……」「その時走ったのは……」など。ただし「その時，走ったのは」の場合は一字漢字と数えた。

j．三字以上連続漢字%は，$\frac{\text{三字以上連続漢字総数}}{\text{漢字総数}}+100$ 三字以上連続漢字も語に関係なく漢字が三字以上続いている場合，たとえば「国家公務員……」「それ以後彼は……」など。これは上級のものに多いと思われる。

2. 語彙の分析

計画によって，語彙の分析は，漢語・外来語・原語・略語・固有名詞について行ったが，教科書では原語・略語はほとんど問題にならず，また，外来語・固有名詞は学年別の差がほとんど見られなかった。

漢語について見ると次の通りである。

イ. 漢語（教科書各頁の最後の一文を拾った場合）

図表中の数字は100文中に含まれる平均漢語数を示す。

（　%）は漢語総数に対する比率を示す。

項	学年	小三	小六	中三	高三
		%	%	%	%
a 漢字	1	6 (5.19)	16 (4.74)	27 (4.92)	39 (4.87)
	—1—	3 (2.22)	29 (8.73)	60 (10.87)	91 (11.32)
	2	14 (10.65)	151 (46.09)	279 (51.03)	401 (49.80)
	—2—	3 (2.13)	52 (15.91)	137 (25.10)	229 (28.40)
	3	(0.09)	2 (0.7)	4 (0.65)	4 (0.44)
	—3—		1 (0.23)	2 (0.27)	4 (0.52)
	4		1 (0.39)	(0.07)	1 (0.06)
	その他	(0.09)	7 (2.02)	1 (0.85)	3 (0.36)
	計	26 (20.37)	259 (78.81)	510 (93.76)	772 (95.78)
b ひらがな	1	14 (11.20)	6 (1.84)	2 (0.34)	1 (0.09)
	—1—	16 (12.87)	4 (1.22)	1 (0.11)	(0.01)
	2	44 (34.72)	31 (9.38)	14 (2.62)	3 (0.41)
	—2—	12 (9.07)	4 (1.32)	1 (0.16)	1 (0.07)
	3	2 (1.20)	(0.08)		
	—3—	(0.09)			
	4				
	その他	3 (2.22)	1 (0.39)	(0.05)	
	計	91 (71.39)	46 (14.23)	18 (3.28)	5 (0.58)
c かな＋漢字	2	7 (5.65)	12 (3.55)	1 (0.16)	(0.05)
	3	1 (0.74)	2 (0.47)	(0.05)	(0.05)
	4			(0.05)	
	その他	1 (0.46)	(0.05)	(0.04)	(0.04)
	計	9 (6.85)	14 (4.07)	1 (0.31)	(0.14)
d カタカナ＋漢字	—1—	1 (0.65)	1 (0.16)	1 (0.24)	4 (0.48)
	—2—	(0.09)	1 (0.21)	(0.05)	5 (0.60)
	—3—		(0.05)		
	—4—		(0.03)		
	その他				
	計	1 (0.74)	2 (0.44)	1 (0.29)	9 (1.08)
e 数字＋漢語	漢字	1 (0.74)	3 (1.01)	12 (2.21)	19 (2.39)
	ひらがな		(0.03)	(0.09)	
	カタカナ	(0.09)	(0.03)	1	
	計	1 (0.83)	3 (1.06)	13 (2.30)	19 (2.39)
総	計	128	324	543	805

ロ. 漢語（各教科書の文を等間隔に拾った場合）

項	学年	小三	小六	中三	高三
		%	%	%	%
a 漢字	1	6 (5.16)	15 (5.20)	20 (3.93)	44 (6.41)
	—1—	2 (1.82)	26 (8.74)	59 (11.54)	73 (10.58)
	2	11 (10.32)	133 (45.49)	264 (51.43)	383 (53.30)
	—2—	1 (1.06)	49 (16.91)	125 (24.32)	164 (23.88)
	3	1 (0.61)	2 (0.57)	3 (0.40)	6 (0.85)
	—3—		1 (0.23)	1 (0.1)	2 (0.24)
	4		1 (0.34)		(0.02)
	その他		5 (1.71)	3 (0.58)	2 (0.32)
	計	21 (18.97)	232 (79.20)	475 (92.40)	674 (95.61)
b ひらがな	1	13 (22.14)	6 (2.11)	1 (0.23)	1 (0.1)
	—1—	12 (10.62)	3 (1.09)	1 (0.26)	
	2	42 (38.39)	30 (10.4)	12 (2.40)	4 (0.56)
	—2—	11 (9.56)	3 (1.09)	(0.03)	
	3	1 (0.61)	1 (0.34)	(0.03)	
	—3—				
	4				
	その他	(1.52)	1 (0.17)	(0.06)	(0.02)
	計	79 (72.84)	44 (15.2)	14 (3.02)	5 (0.68)
c かな＋漢字	2	5 (4.10)	8 (2.57)	2 (0.49)	(0.02)
	3	2 (1.52)	2 (0.51)	1 (0.19)	
	4		(0.06)		(0.02)
	その他	1 (0.46)	(0.12)		1 (0.15)
	計	8 (6.07)	10 (3.26)	3 (0.68)	1 (0.19)
d カタカナ＋漢字	—1—	(0.15)	2 (0.51)	1 (0.26)	3 (0.46)
	—2—		1 (0.7)	4 (0.71)	5 (0.78)
	—3—		(0.12)		(0.02)
	—4—				
	その他		(0.06)		
	計	(0.15)	3 (1.09)	5 (1.00)	8 (1.28)
e 数字＋漢語	漢字	2 (1.82)	3 (1.03)	11 (2.30)	14 (2.09)
	ひらがな	(0.15)	1 (0.17)		
	カタカナ	6		1 (0.1)	1 (0.17)
	計	2 (1.9)	4 (1.20)	12 (2.40)	15 (2.26)
総	計	110	293	509	703

〔注〕 a「漢字」は，漢字で書かれた漢語の意。

1 は「胃」「椽」「班」のように漢字一字の漢語。

-1- は「研究-所」「低-賃金」などのように独立し得る他の漢語と結合した一

字漢語。

2　は「学校」「国家」「官庁」のような漢字二字の漢語。

-2-　は「研究-所」「学校-制度」などのように他の漢語と結合した二字漢語。

3　は「市町村」「雪月花」などのような漢字三字の漢語。

-3-　は「昭和-二七年-三月」「二〇分-二〇秒」のように他と連合する三字漢語。

4　は「山川草木」「都市町村」のように漢字四字の漢語。

その他は「重箱」「湯桶」などのように音訓の混合した漢語。

b　ひらがな　は，ひらがなで書かれた漢語の意。1，-1-，2，-2-，3，-3-，4，その他は，漢字に直した場合の漢字の数である。ゆえに，「がっこう」は2に，「けんきゅう-じょ」は-1-に入る。

c　「かな＋漢字」は，「がっ校」，「学こう」，「けんきゅう所」，「研究じょ」などの場合，2，3，4は漢字に直した場合の数字である。

d　「カタカナ＋漢字」は，「アメリカ合衆国」「オランダ領」「西ドイツ」などの場合，-1-，-2-，-3-，-4-は漢語の部分の漢字の数である。

e　「数字＋漢語」は，数字と漢語の結合した場合，「1月」，「1953年」，「1がつ」，「1953ねん」，「1ガツ」，「1953ネン」などである。

3.　文法関係ならびに品詞の分析

イ.　教科書各頁の最後の一文を拾った場合

数字は100文中に含まれる平均語数

学年	小三	小六	中三	高三
主語	99	123	139	160
サ変	6	25	47	87
受身	2	14	26	29
文語副詞	1	2	10	24
文語連体詞		1	1	2
文語代名詞		1	3	9
文語接続詞			3	10
接続語	6	7	11	14
文語助動詞	1	1	4	9
文語助詞	1	4	10	12
二重否定	1	2	5	2
連体詞	15	29	31	39
指示代名詞	6	17	20	21
口語人称代名詞	10	11	8	1

感動詞	6	2	2	
呼掛	4	2	1	
口語助動詞	93	85	15	3
口語助詞	17	8	3	
擬声語	6	3	1	1

〔注〕 この分析は (ロ) については行わなかった。

主語は，「は」「も」「が」のつく主語および助詞のない主語に限る。

サ変は，複合語のサ変に限る。

文語副詞は，「みだりに」「ついに」「さらに」「いわんや」「きわめて」「すでに」「あらかじめ」「あたかも」「しばしば」「およそ」「同じく」「よし」などのように話しことばでは使わない副詞。

文語連体詞は，「かかる」「わが」「あらゆる」「とある」「いわゆる」など話しことばでは使わない連体詞。

文語代名詞は，上と同じで「かれら」「かれ」「予」「われわれ」など。

文語接続詞は，「しかも」「しかして」「したがって」「および」「かくて」など。

接続語は，文頭にあって接続の役目を果している語あるいは句。したがって「しかし」などの接続詞はもちろん「ここにおいて」「そこで」なども拾った。

文語助動詞は，「ず」「べき」「しむ」「ごとし」「たり」「ざる」「なる」(形動語尾) など。

文語助詞は，「ども」「とも」「のみ」「……ずして」「つつ」「より」(それより東) 「すら」など。

連体詞は，「この」「その」「あの」「どの」「どんな」「こんな」など。

指示代名詞は，「これ」「それ」「あれ」など。

口語人称代名詞は，「ぼく」「ぼくたち」「あなた」「わたし」「わたしたち」「おまえ」など。

口語助動詞は，「ます」「です」に限る。

口語助詞は，「……よ」「……ね」に限る。

D. 本年度の調査の反省と見透し

1. イ（各頁の終り文を拾った場合）とロ（文を等間隔に拾った場合）とでは，文の長さ，漢語などに関し，前者に少しくかたよりが見られるようである。

2. 学年別にみると，

一文平均字数(1)(2)　一句平均字数　会話文　漢字%　一字漢字%　二字連続漢字%　三字以上連続漢字%　漢語含有率（漢字の漢語　ひらがなの漢語）主語　サ変　受身　文語的品詞（副詞　連体詞　代名詞　接続詞）　口語的品詞（人称代名詞　呼掛　助動詞　助詞）　連体詞　指示代名詞

などのごとく，すべて明らかに段階的になっている。

3.　これらの言語的要素の含まれ方の程度の違いは，読解力の発達程度と対応すると考えられる。

4.　尺度化するにあたっては，これらの要素のうちから，二三の標識を選ぶべきであるが，どれを選ぶかは次の点から考える。

a．**文構成の複雑さを示す要素**（一文平均字数，一句平均字数，主語）
b．**難語の含まれ方を示す要素**（漢字%，一字漢字%，二字・三字以上連続漢字%，漢語）
c．**文語的表現あるいは会話的表現を示す要素**（会話文%，サ変，受身，文語的品詞，口語的品詞，連体詞，指示代名詞）

すなわち，a，b，cのうちから，一つずつ最も顕著な差を示している要素を選ぶべきだと思われる。これを尺度の標識とする。

5.　三つの標識が得られたら各種の文章を分析して，種々の段階の組み合せによって，「読みやすさ」の文類型をつくる。

6.　次に各文類型から選ばれた文章によって，問題を作成し，読解力テストを行って目盛りづけをする。

（森　岡）

附　　表

本文中，「文字および符号の分析」「語彙の分析」「文法関係ならびに品詞の分析」の結果を学年別に示したが，ここには，各科目別，教科書別に出して参考に供する。

〔1〕 イ. 科目別文字および符号の分析

項＼年＼科	小三			小六			中三			高三		
	国	社	理	国	社	理	国	社	理	国	社	理
a	351	299	232	389	409	380	451	386	172	290	534	188
b	9585	11651	6734	14474	17827	15285	17390	20202	7934	13387	31100	79.63
c	27.31	38.97	29.25	37.21	43.59	40.22	38.56	52.34	46.13	46.19	58.24	42.36
d	22.19	28.70	28.18	34.30	40.61	35.63	37.08	51.27	46.13	45.53	58.24	42.36
e	10.18	10.97	12.27	11.71	14.04	12.33	12.86	16.76	20.54	19.44	20.65	17.20
f	42.45	34.78	3.88	19.54	21.52	35.52	14.41	20.21	0	12.06	0	0
g	6.95	7.45	3.98	22.21	24.73	16.70	28.26	32.79	30.55	30.96	38.76	36.66
h	76.03	72.35	83.58	38.21	24.63	47.55	32.25	17.75	28.42	25.62	14.98	23.57
i	21.74	20.97	16.42	40.82	50.95	41.05	44.31	51.11	42.48	50.86	48.10	48.10
j	2.23	6.68	0	20.97	24.44	11.40	23.44	31.14	28.70	23.52	36.92	28.33

〔注〕 a, b, c, ……は本文中のものと同じ。以下も同じ。

〔2〕 ロ. 科目別文字および符号の分析

項＼年＼科	小三			小六			中三			高三		
	国	社	理	国	社	理	国	社	理	国	社	理
a	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200
b	4754	6938	5350	6223	8736	6804	7330	9505	9252	8466	11725	8008
c	23.71	34.69	26.75	31.12	43.68	34.02	36.66	47.53	46.26	42.33	58.63	40.04
d	21.41	27.42	25.36	30.06	42.82	30.79	33.47	43.80	46.26	41.50	58.63	39.25
e	9.68	11.08	12.59	11.70	14.32	12.86	13.07	15.36	20.20	16.34	19.71	16.58
f	39.50	37.50	6.00	26.00	25.00	32.00	21.50	17.00	0	17.55	0	0
g	10.14	6.79	4.22	21.16	24.46	16.09	24.57	33.18	31.69	31.69	38.40	36.94
h	71.58	71.55	88.50	37.89	24.52	48.68	34.98	15.98	29.13	27.88	16.01	24.24
i	22.82	20.81	10.50	40.24	49.88	41.28	45.86	52.57	42.50	50.17	51.79	45.10
j	5.60	12.64	0	21.87	25.60	10.06	19.16	31.45	28.38	21.95	32.25	30.66

〔3〕 イ. 小三教科書別文字および符号の分析

科 / 本 / 項	国語			社会			理科		
	ふ	と	か	ふ	と	か	ふ	と	か
a	111	112	128	83	114	102	54	60	118
b	2971	3111	3503	3708	4202	3741	1316	1830	3588
c	26.77	27.79	27.37	44.67	36.86	36.68	24.37	30.50	30.41
d	21.53	21.91	23.05	44.14	23.61	25.80	24.37	29.04	29.41
e	9.17	14.14	8.80	11.70	13.38	8.89	16.05	17.43	9.91
f %	45.05	35.71	46.09	7.23	57.02	32.35	0	10.00	2.54
g %	7.94	9.16	11.65	7.74	6.16	8.61	2.81	2.79	5.02
h %	75.00	80.35	71.32	83.62	69.50	64.60	100.0	76.47	82.22
i %	23.72	19.65	22.06	11.14	25.48	26.09	0	23.53	17.78
j %	1.28	0	6.62	5.24	5.02	9.31	0	0	0

〔4〕 ロ. 小三教科書別文字および符号の分析

科 / 本 / 項	国語			社会			理科		
	ふ	と	か	ふ	と	か	ふ	と	か
a	70	62	68	39	93	68	54	39	107
b	1403	1631	1720	1636	2915	2387	1196	1034	3120
c	20.04	26.31	25.29	41.95	31.34	35.10	22.15	26.51	29.16
d	17.76	21.75	22.93	41.95	22.25	28.76	22.15	25.85	24.92
e	8.20	13.37	8.39	10.42	14.15	9.08	15.33	17.23	10.87
f	48.57	30.64	38.23	5.13	49.46	39.71	0	10.26	7.48
g	8.27	9.26	12.50	6.42	5.83	8.21	3.68	2.61	4.97
h	64.56	75.49	72.56	80.95	72.94	65.31	100.00	92.59	84.59
i	27.59	22.52	20.47	19.05	20.00	22.45	0	7.41	15.41
j	7.85	1.89	6.97	0	7.16	12.24	0	0	0

〔5〕 イ． 小六教科書別文字および符号の分析

項＼年本	国語			社会			理科		
	ふ	と	か	ふ	と	か	ふ	と	か
a	137	107	145	155	138	116	77	129	174
b	3942	5085	5447	7172	5070	5585	2632	6075	6578
c	28.77	47.52	37.57	46.27	36.74	48.15	34.19	47.09	37.80
d	26.46	42.02	35.84	44.00	35.70	41.68	32.90	39.19	34.91
e	10.63	12.91	11.56	14.04	15.46	12.96	13.85	13.21	11.15
f	42.34	10.28	4.83	3.23	43.48	19.83	3.90	44.29	37.93
g	18.14	27.16	20.52	26.53	20.51	26.23	17.06	19.86	14.56
h	50.89	30.76	39.91	22.49	37.50	18.27	41.43	48.60	49.06
i	38.04	42.72	40.25	48.77	43.08	59.39	44.10	38.74	42.38
j	11.07	23.52	20.84	28.74	19.42	22.34	14.47	12.66	8.56

〔6〕 ロ． 小六教科書別文字および符号の分析

項＼科本	国語			社会			理科		
	ふ	と	か	ふ	と	か	ふ	と	か
a	87	51	62	83	79	38	52	71	77
b	2149	1938	2136	3873	3016	1847	1776	2704	2324
c	27.55	38.00	34.45	46.66	38.18	48.61	34.15	38.08	32.73
d	24.15	38.00	31.88	45.03	37.70	48.61	32.89	31.81	28.34
e	11.25	12.92	11.18	14.34	15.47	12.74	15.44	13.59	10.81
f	48.28	5.88	11.29	4.82	48.10	21.05	1.92	38.03	46.75
g	16.71	29.41	18.16	26.39	21.22	25.72	14.36	18.49	14.63
h	50.70	26.49	42.78	22.02	35.16	15.59	50.98	48.00	47.94
i	39.55	23.16	40.21	48.14	43.44	62.32	35.29	42.40	44.12
j	9.75	50.35	17.01	29.84	21.40	22.09	13.73	9.60	7.94

〔7〕 イ. 中三教科書別文字および符号の分析

科目 / 本項	国語		社会		理科
	さ	た	か	に	と
a	207	244	214	172	172
b	8173	9217	11990	8212	7934
c	39.48	37.77	56.79	47.74	46.13
d	36.98	37.17	54.50	47.01	46.13
e	13.04	12.71	16.89	16.26	20.54
f	11.11	17.21	36.46	0	0
g	29.28	27.37	34.13	30.85	30.55
h	34.03	30.56	16.63	19.58	28.42
i	40.22	48.20	48.29	55.67	42.48
j	25.75	21.24	35.08	24.75	28.10

〔8〕 ロ. 中三教科書別文字および符号の分析

科目 / 本項	国語		社会		理科
	さ	た	か	に	と
a	95	105	88	112	200
b	3599	3731	4927	4578	9252
c	37.88	35.53	55.99	40.88	46.26
d	33.95	33.02	49.27	39.13	46.26
e	12.76	13.28	15.30	15.41	20.20
f	13.68	28.57	36.35	1.79	0
g	26.04	23.16	34.06	32.24	31.69
h	36.39	33.45	14.06	18.16	29.13
i	40.77	51.39	52.21	52.98	42.50
j	22.84	15.16	33.73	28.86	28.37

〔9〕 イ. 高三教科書別文字および符号の分析

項＼科＼本	国語		社会		理科
	こ	ち	ひ	や	こ
a	117	173	232	302	188
b	5066	8321	12577	18523	7963
c	43.30	48.10	54.21	61.33	42.36
d	43.30	47.01	54.21	61.33	42.36
e	17.17	21.96	21.07	20.38	17.20
f	10.26	13.29	0	0	0
g	31.68	30.53	36.17	40.52	36.66
h	23.55	26.93	19.83	12.04	23.57
i	48.07	52.60	50.38	46.71	48.10
j	28.37	20.47	29.79	41.25	28.33

〔10〕 ロ. 高三教科書別文字および符号の分析

項＼本＼科	国語		社会		理科
	こ	ち	ひ	や	こ
a	59	141	92	108	200
b	2589	5877	4768	6957	8008
c	43.88	41.68	51.83	64.42	40.04
d	43.15	40.81	51.83	64.42	39.25
e	16.81	16.23	20.20	19.38	16.58
f	18.64	17.02	0	0	0
g	31.32	31.85	35.80	40.19	36.94
h	24.78	29.22	21.73	12.52	24.24
i	54.50	48.29	56.47	48.93	45.10
j	20.72	22.49	21.80	38.55	30.66

〔11〕 **イ．科目別漢語の分析**（100文中に含まれる平均語数）

項	年＼科	小三 国	小三 社	小三 理	小六 国	小六 社	小六 理	中三 国	中三 社	中三 理	高三 国	高三 社	高三 理
漢字	1	8	5	5	16	17	13	31	21	31	43	34	48
	—1—	3	5		23	40	21	34	78	86	50	117	81
	2	20	13	3	118	214	115	204	374	273	319	471	329
	—2—	3	3	1	44	85	24	70	218	138	104	321	159
	3				3	2	2	4	1	8	2	5	2
	—3—				1	1		2	1	2	2	6	2
	4				1	2			1		1		
	その他				3	12	5	5	6	1	5	2	2
	計	34	26	9	209	373	180	350	700	539	526	956	623
ひらがな	1	18	6	14	5	4	9	3	2	1		1	
	—1—	6	22	21	2	2	8	2					
	2	28	53	51	19	31	41	19	11	11	7	2	
	—2—	4	17	15	3	3	7	1	1	1	2		
	3	3	1	1			1						
	—3—												
	4												
	その他	1	5	2		1	3		1				
	計	60	104	104	29	41	69	25	15	13	9	3	
かな＋漢	2	6	10	4	4	5	27	1		2			1
	3	1	1		1	1	3						2
	4							1					
	その他	1	1				1			1	1		
	計	8	12	4	5	6	31	2		3	1		3
カタカナ＋漢	—1—	2			2					5		5	6
	—2—				2	1				2		6	8
	—3—												
	—4—												
	その他												
	計	2			4	1				7		11	14
数＋漢	漢字			3			10		20	27		28	24
	ひらがな												
	カタカナ									2			
	計			3			10		20	29		28	24
総計		104	142	116	247	421	290	377	735	591	536	998	664

〔12〕 ロ. 科目別漢語の分析（100文中に含まれる平均語数）

項	年＼科	小三 国	小三 社	小三 理	小六 国	小六 社	小六 理	中三 国	中三 社	中三 理	高三 国	高三 社	高三 理
漢字	1	5	7	5	18	16	11	27	12	21	39	38	54
	—1—	3	4		20	46	11	24	64	90	53	85	80
	2	19	14	2	93	224	81	173	341	278	298	500	300
	—2—	2	2		41	92	16	49	180	150	98	246	143
	3	1	2		3	1	1	3	2	3	2	5	11
	—3—				1	1		1		1	1	1	3
	4				1	2						1	
	その他				3	11	1	4	4	1	2	2	2
	計	30	29	7	180	393	121	281	603	544	493	878	593
ひらがな	1	18	9	14	6	5	8	1	2	1			
	—1—	5	17	13		2	8	2		2	10	1	
	2	19	70	38	21	28	42	11	11	15			
	—2—	5	15	12	2	3	5	1					
	3	1	1	1	1		2	1					
	—3—												
	4												
	その他	1	3	2	1	1	1		1		1		
	計	49	115	80	31	39	66	16	14	18	11	1	
かな＋漢	2	4	6	4	3	3	17	2		6		1	
	3	2	3	1	1	1	3	2		2			
	4						1				1		
	その他	1	1		1		1				1		2
	計	7	10	5	5	4	22	4		8	2	1	2
カタカナ＋漢	—1—	1			4	1	2	1		3	1	4	5
	—2—				1	1		1	1	9	1	6	10
	—3—				1								1
	—4—												
	その他				1								
	計	1			7	2	2	2	1	12	2	10	16
数＋漢	漢字			6			9		16	19		24	19
	ひらかな												
				1			2						
	カタカナ								1	1			3
	計			7			11		17	20		24	22
総計		87	154	99	243	438	222	303	635	602	508	924	633

〔13〕 **イ．科目別文法関係ならびに品詞の分析**（100文中に含まれる平均語数）

学年	小三			小六			中三			高三		
項目＼科	国	社	理	国	社	理	国	社	理	国	社	理
主語	88	126	80	110	135	124	118	164	142	149	189	120
サ変	4	7	7	16	39	20	35	61	49	70	114	35
受身	2	5	0.4	14	18	9	17	38	22	14	43	13
文語副詞	1			3	2	2	10	11	8	26	22	26
文語連体詞				1			1			1	3	
文語代名詞				1	1	1	5	2	1	12	10	1
文語接続詞							1	4	4	12	8	15
接続語	7	7	2	8	7	7	9	17	8	10	17	13
文語助動詞	1			2	1	1	9	3		12	9	5
文語助詞	1	1	2	3	7	2	5	15	9	10	12	14
二重否定		1	1	1	3	2	3	9	4	2	3	
連体詞	12	22	11	25	30	31	24	36	38	31	43	37
指示代名詞	7	8	3	14	23	15	18	22	19	24	21	15
口語人称代名詞	19	5	3	13	18	3	9	11	3	4		
感動詞	9	6		3		1	4			1		
呼掛	2	8		3	1	1	1			1		
口語助動詞	77	107	94	54	102	100	33	12		11		
口語助詞	20	27	3	7	8	8	4	3		1		
擬声語	13	1	3	6			2			2		

ラジオ・ニュース文体の研究

日本放送協会放送文化研究所に委託した研究である。ラジオ・ニュースは，大衆にとって理解しやすいものでなければならない。はたしてどのような文体のものが理解しやすいかを明らかにしようとするのが本研究の目的である。

先年，ラジオ・ニュースにおける理解力の言語的条件として

1　単語の難易（ことに漢語）
2　文の長さ
3　読みの速度

の三つを考え（昭和24年度委託研究），さらに第二段階として

1　文の長さ
2　修飾句の数（その重なりかた）
3　場面の数

の三つを考え（昭和25年度委託研究），それらが理解度にどの程度の影響を及ぼすかを調査した。

ニュース文体においては，このように理解度の難易に関係のある一般的条件のほかに，さらに多くの具体的条件の存することは明らかであり，それらを検討する必要がある。

日本放送協会においては，つねに放送ニュース文体について改善を計り，昭和15年10月の「放送ニュース編輯便覧」において，

1　ラジオ・ニュースのスタイル原則
2　標題の書きかた
3　文語調を口語調に直すこと
4　漢文脈並に欧米文直訳体を避けること
5　主語を文の始めに出すこと
6　段落を多くすること
7　引用文の表現法
8　適当な補足的解説的語句を添えること
9　名詞止めを少くすること
10　「てにをは」の省略をやめること
11　放送上適当でない語句

に分けて文体の書きかたを示した。

さらに昭和19年9月の「放送報道編輯例」においては

1　放送報道文は達意文でなければならない
2　主語を文の初めに置く
3　段落を多くする
4　用語は平明第一で，口語調をとり文語調をやめる
5　漢文脈と欧米文直訳体をさける
6　名詞止めを少くする
7　助詞を省略しない
8　報道文の諸要素を繰返す
9　引用文には結尾文をつける
10　補足の語句を加える
11　外来語・難解漢語をさける
12　略語を補修する
13　放送の性質上不適当な語句を用いない

の13項目を挙げている。

日本放送協会では，以上二つのスタイル・ブックを受け継いで，新しくニュース編集の指針を示す計画が樹てられた。そして協会内の委員会において，ニュース文体上注意すべきものとして次の原則を定めた。

1　ダ開く文章に
2　文章は平易に
3　センテンスは短く
4　主語を先に
5　用語を適切に
6　助詞などは省略せずに
7　名詞止めを避ける
8　直訳体を避ける

そこで，主として定時に放送されたものを実例として収集し，これに対して理想と考えられる多くの書きかえの文例を作製した。これらの書きかえの文例がはたして原文よりも，理解において効果において，すぐれているか，どうか，を実験的に調査することになった。この調査は現在進行中である。

（森　岡）

文字配列の合理化に関する実験的研究

A. この問題を取りあげた理由と目標

昭和24年度，同25年度国立国語研究所年報に詳述したから再述は略す。

B. 前年度までの調査研究のあらまし

前年度は，文字配列の合理化に関する研究を眼球運動の記録による実験的研究とテストによる調査研究との両面から行った。前者の研究は光線槓杆を利用する方法により，3名の動く義眼者を被験者とし，よこ書き，5字詰，8字詰，12字詰，15字詰，20字詰，25字詰の各種，9ポ活字，3.5mm 行間隔の比較的容易な文章を材料文にして実験，計20葉の記録図から行の長さによる読みの効果を見た。その結果，概略ながら12字詰，15字詰の読み材料に読みの能率が高いことを知った。後者の研究は前者と同一の材料文により都下の中学，高校生，約500名に対して，時間制限法（Time-limit method）による団体テストを行い，たて書き，よこ書き，その各々のさまざまな行の長さによる読みの効果を見た。その結果，読み速度において，たて書きの文がよこ書きの文より有意差をもってまさり，行の長さについては，たて書き，よこ書きの文も共に20字詰，25字詰の読み材料に読みの能率が高いことを知った。

C. 調査研究の担当者

所員　草島時介　　非常勤所員　村石昭三

D. 計　　画

本年度の研究は前年度来の継続研究であり，研究に着手する前に，前年度

の研究内容に若干の検討を加えた。すなわち，眼球運動の実験的研究は被験者が義眼者であったため，一応は客観的条件下にありながらも，要は動く義眼の運動より他方の健康な眼の運動を類推するにとどまり，さらに諸種の制約のために実験の基礎段階にとどまらざるを得なかった。

そこで，本年度は Contact-lens を使用し，眼の健康な者を被験者とし，たて書き，よこ書き，その各々のさまざまな行の長さによる眼球運動の記録図を得，これにより測定研究しようとした。他方，テストによる研究は前年度の文字配列中の5字詰を捨て，あらためて30字詰，35字詰，40字詰を加え，新しい内容を持つテスト文により，中学，高校生を対象として実施し，文字配列の効果を見ようとした。

E. 実 施 状 況

1. 眼球運動記録による実験的研究の実施状況

本年度当初は Contact-lens による実験の見通しがつくまで前年度の動く義眼者を被験者とした実験を継続する予定であったが，実験可能な義眼者が得られないので一時これを断念し，その実験を中絶した。たまたま東京教育大学教授，眼科医，医博，大山信郎氏の研究協力を得ることになり，氏に実験に使用すべき Contact-lens の作成を依頼した。氏は苦心を重ね，27年10月，遂にこれを完成した。

そこで，教育大学雑司谷分校暗室を借用して眼球運動実験装置を国立第二病院よりここへ移送，実験に着手した。

当初は下のような理由で実験の遂行は困難をきわめた。

1. Contact-lens を被験者の眼球と眼瞼の間にはめこむには高度の技術を要し，時に被験者の眼球の凸度が Contact-lens の凹度と一致せず，ぴたりと密着しなかったり，また被験者が神経質などの場合には，その操作は不可能に近い。

2. Contact-lens には生理的食塩水，または リンガー氏液を充満して眼球と眼瞼との間にはめこむのであるが，それがたとい少量でも洩れて眼球と Contact-

lens との間に空気が残って水泡を生ずれば正常な知覚が行われない。

3. Contact-lens に鏡片をとりつけるのに，その部位が不適当であれば，実験中に眼球に痛覚を感じたり，時に鏡片がはがれ落ちるということもある。

4. 実験中，鏡片が涙などで曇ると鮮明な記録線が得られない。

しかし，これらさまざまな困難や障害はやがて克服され，12月初旬に初めて記録に成功した。その後，ただちに実験を開始し，28年3月までに相当数の記録図を得た。

2. テストによる調査研究の実施状況

テスト文の選択と作成については，27年9月までに中学，高校用の2種類を謄写刷りにして完了した。この謄写刷りは活字印刷に比して，書体，文字の大きさ等に統一性を欠き，従って結果の客観性に乏しいうらみがあり，この種の研究材料としては致命的とさえ思われたが，種々の制約下にあって，これは如何ともすることができなかった。そこでその不備を補うためにできるだけの考慮を払い，条件の厳正を期した。かくして，中学校7校，1660名に対し仕事制限法（Work-lmit method）による団体テストを実施し，たて書き，よこ書き，その各々のさまざまな行の長さの文について読みの効果の順位をきめた。他方，高校生に対するテストは都合により中止した。

F. 研 究 成 果

1. 眼球運動記録による実験的研究成果

a 実験研究目標　たて書き，よこ書き，その各々のさまざまな行の長さによる読みの効果を見る。

b 実験装置　本年度は Osscilograph 用の鏡を眼球にはめこまれた Contact-lens に貼付し，これに平行光線をあてて眼球運動を記録する方法をとった。Contact-lens とは合成樹脂よりなり，Lens の表面上の眼瞼との摩擦が特に少ない適当部位を傷つけ，その凹部に鏡片をはりつける。その粘結剤としては，醋酸アミールを溶媒として無色透明なセルロイド片を

溶解し，その粘調性を利用して貼付するのである。この溶液は乾燥時には表面張力により滑かな被膜を生じ，よく鋭利な鏡片をその下に被い，眼瞼との摩擦に際し，痛覚をなくするのに役立った。実験には被験者の視力，眼球の形状に正確に適合した Lens が特別に作られた。Lens の眼瞼下への挿入は実験者が行う。最初，眼にペルカミン液を点滴し，次に適当量のアドレナリン液を点滴する。次に被験者をしばらく安静状態に放置し，水平位に Contact-lens を把持し，その凹面に生理的食塩水を充満させたままこれを眼瞼下に挿入する。こうして正しくはめこまれ，調整された Lens は眼に痛覚を与えることなく正常の視力を保持しながら眼球を正常に運動させることができる。Lens が眼球に密着していることは実験上の不可欠の条件であるが，これは簡単な点凝視，直線，円，正方形等の刺戟図形のトレースの予備実験から，その正確さが証明された。

c　実験者　　所員　草島時介　　非常勤所員　村石昭三

教育大学教授，大山信郎氏は Contact-lens の作成，調整，小鏡片のとりつけ，および Lens の挿入等，種々の方面に援助，協力を与えた。

d　被験者　　教育大学心理学科学生，半沢正時，押谷慶昭，計2名。

e　実験場所　　東京教育大学雑司谷分校，暗室。

f　実験材料　　材料文は次の通りである。

○A材料　前年度の実験に使用したもので，9ポ活字，3.5mm 行間隔，8字詰，12字詰，15字詰，20字詰，25字詰のたて書きとよこ書きの文，計10種類。

○B材料　中学生用テスト材料文で，4号活字大，6.0mm 行間隔，8字詰，12字詰，15字詰，20字詰，25字詰，30字詰，35字詰，40字詰のたて書きとよこ書きの文，計16種類。

○C材料　高校生用テスト材料文で，5号活字大，8.0mm 行間隔，12字詰，15字詰，20字詰，25字詰のよこ書きの文，計4種類。

○D材料　前年度の実験に使用したもので，わかち書き，9ポ活字，5.0mm 行間隔，20字詰のよこ書きの文，1種類。

g　実験方法　　実験は暗室内で行い，予備実験後，被験者の構えがで

きてから，実験者は被験者に平素の読みより，しいて速くもおそくもなく，読んだ内容が理解できる程度に普通の気持で黙読することを命ずる。そして読了後，極度に長い凝視，読み返し等に関する箇所の内省報告を被験者に求める。実験に使用された Bromide は Osscilograph 用 Bromide で 25cm×2500cm のものを各葉，20cm×110cm として使用した。回転速度は一回転，約35秒である。

昨年度の実験には音読を課したのに，本年度は黙読を課した理由はその可能性を得たからに他ならない。呼吸その他の要因になるべく制約されない読みの研究は所期の目的であったが，昨年度の装置による記録図においては，記録線と読材料の各部分とを該当させることはいちじるしく困難であった。しかしながら，幸にも今年度創案の装置においては，その困難はほとんど克服され，記録線上に読材料の各部を該当させることが理論上，実際上可能になったからである。換言すれば，文章中どんな部分で，どんな眼球運動が現われるかを刻明にあとづけることができるようになったからである。（国研年報3，1952参照）

h　処理の仕方　Score の計算は明瞭に記録されている記録図のみを対象にし，不鮮明なものは除外した。更に最初の行の記録線は回転の加速度があったり，正常な読みが行われない点等を考慮して除外し，第二行目からの記録線につき測定した。そうして，読時間（1秒間の読字数）停留数（1停留の把握字数）停留時間（1停留の所要時間）逆行数（1逆行の読字数に対する割合）を調べた。なお，運動，すなわち，行間運動，凝視間運動については時間測定をしなかった。

i　実験結果　本年度に得た記録図数の内訳は次の通り。

		A 材料	B 材料	C 材料	D 材料	計
半沢	たて	5葉	8	0	0	13葉
	よこ	16	12	7	1	36
押谷	たて	0	5	0	0	5
	よこ	5	8	0	0	13
計		26	33	7	1	67

これら記録図から，たて書き，よこ書き，その各々のさまざまな行の長さによる読

みの効果を見るための統計的処理は本年度は行わない。本実験が上記のような被験者数と記録図数とにとどまったことは，実験操作がきわめて厳密な条件と配慮とを要し，年度末に至り，ようやく実験の運びに至ったもので，その間，実験装置の完成に異常な労苦を要したためにほかならない。だから本報告は年度末までの中間報告であり，従って多数の材料と被験者とを利用してなされる信頼度の高い成果は，ただ今後累積される実験結果に待つべきである。故にここには被験者別，種類別に実験結果を記録するにとどめる。

1. **たて書き**（A材料　被験者　半沢正時）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
8字詰	3.29字	2.67字(0.414字)	0.82秒(0.158秒)	∞字
12	6.76	2.84(0.349)	0.42(0.092)	∞
15	5.04	3.00(0.313)	0.60(0.110)	∞
20	6.74	2.94(0.335)	0.44(0.035)	200.0
25	6.20	3.29(0.530)	0.53(0.094)	62.5

2. **たて書き**（B材料　被験者　半沢正時）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
8字詰	4.33字	2.40字(0.378字)	0.55秒(0.147秒)	∞字
12	4.56	2.53(0.578)	0.56(0.168)	∞
15	4.91	2.54(0.443)	0.52(0.020)	∞
20	4.42	2.22(0.190)	0.50(0.077)	∞
25	3.82	2.31(0.270)	0.60(0.160)	120.0
30	3.95	2.16(0.360)	0.55(0.080)	∞
35	4.47	2.33(0.240)	0.52(0.037)	105.0
40	4.62	2.49(0.420)	0.54(0.038)	39.0

3. **たて書き**（B材料　被験者　押谷慶昭）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
8字詰	3.77字	1.89字(0.582字)	0.50秒(0.102秒)	68.0字
12	4.55	2.00(0.466)	0.44(0.061)	48.0
15	5.05	1.93(0.389)	0.38(0.015)	21.8
20	5.30	2.17(0.340)	0.40(0.085)	33.3
25	4.75	1.88(0.161)	0.39(0.018)	37.5

4. **よこ書き**（A材料　被験者　半沢正時）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
字詰	字	字　字	秒　秒	字
8	3.73	1.81(0.830)	0.49(0.199)	19.2
8	3.70	1.70(0.510)	0.46(0.093)	40.0
8	4.75	1.52(0.290)	0.32(0.025)	22.0
12	4.26	1.71(0.230)	0.40(0.090)	30.0
12	4.01	1.59(0.367)	0.40(0.073)	21.6
12	4.32	1.88(0.530)	0.44(0.072)	19.2
15	4.54	1.94(0.210)	0.43(0.020)	∞
15	5.50	1.56(0.170)	0.28(0.029)	60.0
20	4.78	1.63(0.129)	0.34(0.038)	17.7
20	4.48	1.58(0.190)	0.35(0.024)	60.0
20	5.76	1.93(0.320)	0.34(0.010)	49.0
25	3.68	1.96(0.450)	0.53(0.146)	28.0
25	4.71	1.54(0.200)	0.33(0.090)	22.2
25	5.54	1.79(0.130)	0.32(0.020)	125.0
25	6.87	1.53(0.090)	0.22(0.008)	∞

5. **よこ書き**（A材料　被験者　押谷麗昭）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
字詰	字	字　字	秒　秒	字
8	2.85	1.38(0.400)	0.49(0.020)	12.0
12	4.28	1.86(0.600)	0.44(0.070)	20.5
15	4.70	1.84(0.240)	0.39(0.017)	19.0
20	5.18	2.00(0.130)	0.39(0.090)	92.0
25	5.02	2.12(0.495)	0.42(0.039)	44.5

6. **よこ書き**（B材料　被験者　半沢正時）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
字詰	字	字　字	秒　秒	字
8	3.95	1.63(0.310)	0.41(0.090)	52.0
12	5.15	1.64(0.103)	0.32(0.020)	36.0
15	5.99	1.67(0.012)	0.28(0.029)	60.0
15	4.41	1.58(0.210)	0.36(0.049)	17.1
20	3.63	1.60(0.534)	0.44(0.001)	80.0
25	2.48	1.42(0.214)	0.57(0.025)	12.5
30	5.29	1.64(0.197)	0.35(0.008)	27.3

30	6.57	1.95(0.105)	0.29(0.111)	39.7
35	6.87	1.98(0.234)	0.29(0.025)	35.0
35	5.21	1.89(0.087)	0.38(0.054)	23.3
40	10.44	2.69(0.280)	0.26(0.039)	132.0
40	5.22	2.07(0.104)	0.40(0.032)	120.0

7. よこ書き（B材料　被験者　押谷慶昭）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
字詰	字	字　字	秒　秒	字
8	3.61	1.91(0.447)	0.53(0.103)	88.0
12	4.23	1.75(0.861)	0.41(0.007)	19.2
15	4.35	1.82(0.298)	0.42(0.081)	15.0
20	5.75	2.61(0.215)	0.45(0.066)	24.0
25	4.02	1.50(0.136)	0.37(0.170)	18.8
30	4.39	1.85(0.116)	0.42(0.008)	18.5
35	3.61	1.40(0.123)	0.39(0.047)	10.1
40	4.25	1.76(0.061)	0.42(0.046)	20.0

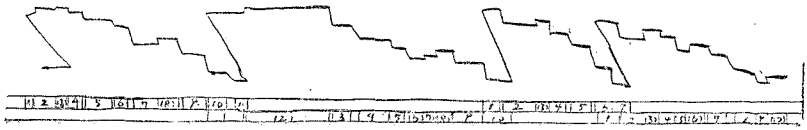
8. よこ書き（（C材料　被験者　半沢正時）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
字詰	字	字　字	秒　秒	字
12	3.71	1.60(0.106)	0.43(0.085)	48.0
12	4.08	1.67(0.396)	0.41(0.124)	20.0
15	7.50	1.96(0.143)	0.26(0.024)	45.0
20	5.04	1.74(0.143)	0.35(0.039)	80.0
20	4.99	2.05(0.207)	0.41(0.060)	30.0
25	5.23	1.75(0.130)	0.33(0.050)	32.0
25	4.18	1.63(0.190)	0.39(0.050)	25.0

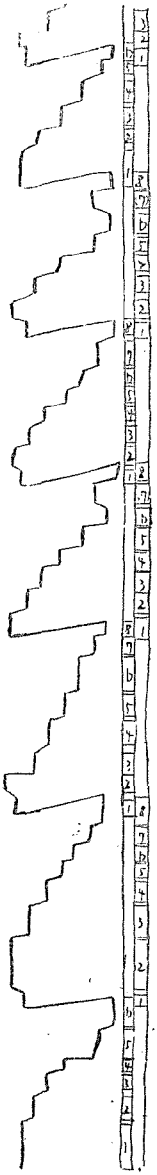
9. よこ書き（D材料　被験者　半沢正時）

行の長さ	1秒間の読字数平均	1停留の把握字数（S.D）	1停留の停留時間（S.D）	1逆行の読字数に対する割合
字詰	字	字　字	秒　秒	字
20	6.42	2.42(0.160)	0.38(0.067)	155.0

（記録図1．記録図2参照）　　記録図　1



記録図　2



（註）　記録図1はたて書き文（20字詰）の記録図。下方余白部の数字は停留番号を示す。

記録図2はよこ書き文（20字詰）の記録図。右方余白部の数字は停留番号を示す。

2.　テストによる研究成果

a　調査研究目標　　眼球運動の実験研究目標に同じ。

b　テスト材料　　テスト材料の選定にあたり，童話，小説，新聞，論説，科学，日常生活，および雑に類別し，各類から400字以内で内容がよくまとまっており，かつ各類を代表するようなもので，しかも平易なものを目指し，これらを小学六年生作文集，グリム童話，横山美智子作品集，中学生毎日新聞，雑誌子供の科学，中学生時代などから選んだ。その際，被験者にとって極端に平易に過ぎ，たとえば仮名の逐字的読みなどにおちいり，かえって正常な読みがさまたげられるようなものはさけ，あるいは理解面にひっかかりを生ずるような高度の精神機能を要する難解なものもさけて，なるべく被験者が材料を一見すれば特に考えないでも，そのまま難なく意味がとれるような読み——知覚事象としての読み——としての，文字配列の効果が前景に出るような文を選ぶことに留意した。そうして各材料文には2個の選択肢を与えた。これは，から読みなどを防ぐ手がかりとしたのである。このようにして読まないでいて読んだふりをしたり，また全然理解に無関心であるような読みを発見して排除した。

こうして選ばれた10個の材料文を78名の被験者を用いてWork-limit method により団体テストを実施し，完全な正解率を示す7個の材料文を得た。さらにその中から童話，

小説，新聞，科学，日常生活の５個の材料文を選んだ。そしてその文字配列をたて書き，よこ書きともに４号活字大，6.0mm 行間隔とした。各々の行の長さを８字詰，12字詰，15字詰，20字詰，25字詰，30字詰，35字詰，40字詰として，計16種類を謄写刷りにして本テストの材料とした。

c　被験者と検査者

テスト実施校	被験者数		
	男	女	計
中野区立五中	112人	103人	215人
戸塚区立一中	101	90	191
世田谷区立北沢中	87	68	155
世田谷区立山崎中	89	63	152
世田谷区立太子堂中	83	76	159
大田区立大森二中	117	116	233
川崎市立富士見中	295	260	555
		総　計	1660人

上記被験者はいずれも第二学年生徒である。

検査者　　草島時介　村石昭三

d　テストの実施方法　　テスト用紙は学校，学級にかかわりなく，その各種を無作為的ランダム的に混じて配布し，学校，学級の読みの能力差が現われることをさけた。そうして検査者は被験者に対し，読む際には平素，読む時と同じ程度の速さで黙読し，読了後には所定の書入欄に経過時間を記入することを命じた。この方法は一応 Work-limit method によりながらも，どこからでも見えるように大書した時間の呈示により，被験者個々のテスト所要時間が測定されるように試みたものである。この時間呈示は毎５秒間隔に行われる。検査者は被験者が読了後，時間の記入を忘れていたり，あるいは，でたらめな時間を記入したりしないようによく注意した。

e　整理の仕方　　たて書き，よこ書きにおけるさまざまな字詰の効果は以上の操作により，その読時間によって測定される。知覚機能を前景に

出した読みという事象の研究において，読みを完全な理解という立場で考える立前上，ここでも100%に正解しなかった一切の資料は排除した。テスト資料のうち，統計処理の対象になった資料の数を%で示せば下の通りである。

	8字詰	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字	平均
たて	63.8%	59.2	63.9	59.4	66.0	61.6	64.7	67.0	63.1
よこ	57.0%	59.8	48.0	57.4	53.9	56.6	63.1	58.7	57.0

f　結果の整理　　1.　たて書き，よこ書きにおける読速度の比較

〔表　1〕

	人数	読時間平均	偏差
たて書き	524人	241.2秒	65.1秒
よこ書き	472	274.8	66.1

〔表　2〕

	男		女	
	読時間平均	偏差	読時間平均	偏差
たて書き	242.7秒	69.9秒	239.4秒	63.3秒
よこ書き	270.9	64.5	290.3	65.7

結　果

1)　表1によれば読時間平均はたて読みがよこ読みより小であり，その差は33.6秒にして有意な差と認められた。

2)　表2によれば，読時間平均は男子ではたて読みがよこ読みより小で，その差は28.2秒である。女子においても同じく，その差は50.9秒である。

2.　たて書きの各行の長さにおける読速度の比較

〔表　3〕

行の長さ	8字詰	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字
人数	67人	61	69	63	66	69	66	63
読時間平均	264.3秒	239.7	251.7	243.6	228.3	234.6	234.0	231.6
偏差	80.7秒	62.1	64.5	60.6	52.8	70.2	69.0	62.4

〔表　4〕

	男							
行の長さ	8字詰	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字
読時間平均	278.7秒	233.7	266.2	258.3	222.0	223.4	228.9	237.5

偏　差	83.7秒	65.7	64.8	57.0	48.0	67.6	62.4	66.0
				女				
読時間平均	243.0秒	246.0	236.4	234.9	233.4	248.1	238.8	220.8
偏　差	74.0秒	54.0	55.2	66.0	55.2	72.0	68.0	53.7

結　果

1) 表3により各行の長さにおける読時間平均を小なる字詰からあげれば，25字詰，40字詰，35字詰，30字詰，12字詰，20字詰，15字詰，8字詰の順位となり，特に8字詰の読時間平均は大である。

2) 表4により各行の長さにおける読時間平均を男女別に小なる字詰からあげれば，男子では25字詰，30字詰，35字詰，12字詰，40字詰，20字詰，15字詰，8字詰の順位となり，女子では40字詰，25字詰，20字詰，15字詰，35字詰，8字詰，12字詰，30字詰の順位となる。

3. よこ書きの各行の長さにおける読速度の比較

〔表 5〕

行の長さ	8字詰	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字
人　数	61人	64	49	58	55	56	65	64
読時間平均	285.0秒	271.5	278.8	250.2	270.6	266.4	278.4	285.9
偏　差	61.8秒	56.7	75.9	62.1	71.1	73.5	56.4	60.0

〔表 6〕

				男				
行の長さ	8字詰	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字
読時間平均	284.1秒	272.7	270.6	257.7	285.0	237.0	277.2	275.5
偏　差	67.2秒	55.5	48.9	59.4	60.9	57.0	52.8	72.6
				女				
読時間平均	285.9秒	267.3	292.2	239.4	272.4	289.8	280.2	301.8
偏　差	70.8秒	47.7	75.0	64.2	66.0	71.4	62.1	56.1

結　果

1) 表5により各行の長さにおける読時間平均を小なる字詰からあげれば，20字詰，30字詰，12字詰，35字詰，15字詰，25字詰，8字詰，40字詰の順位となり，特に40字詰の読時間平均は大である。

2) 表6により各行の長さにおける読時間平均を男女別に小なる字詰か

らあげれば，男子では30字詰，20字詰，15字詰，12字詰，40字詰，35字詰，8字詰，25字詰の順位となり，女子では20字詰，12字詰，25字詰，35字詰，8字詰，30字詰，15字詰，40字詰の順位となる。

G. 結　　論

この調査研究の結論は，次のように要約することができる。

1. たて書きよこ書きについて

テストによる調査研究の結果によれば，たて書き文は，よこ書き文より読みにおいて，すぐれている。このことは，それぞれの行の長さ，性別にかかわりなく認められた。

眼球運動の実験的研究によれば，研究はようやく緒についたばかりで，全くその途上にあり，その結果が上記結果と一致するか，どうかは，目下の段階においては全くはかりがたい。

2. 行の長さについて

テストによる調査研究の結果によれば，たて書き文では25字詰の文，よこ書き文では20字詰の文が最もすぐれている。さらに，たて書き文では25字詰より字詰が短かくなることは，それより長くなることより非能率性が大であり，逆に，よこ書き文では20字詰より長くなることは，それより短かくなることより非能率性が大である。かかる傾向は特にたて書き文において顕著に認められた。

これに関する眼球運動による実験的研究は未だ結果に到達せず，その一致するか，どうかも今の段階ではわからない。

H. 1953年度の見通し

来年度は，テストによる研究は，原則として実施しない方針であり，本年度末軌道に乗った Contact-lens 使用による眼球運動の実験研究を推進する

ことに主眼をおく。本年度は，被験者数も貧困をきわめ，しかも，材料文もかなり制限されていたが，来年度はその両者を豊富にして，種々の制約下における知覚事象としての国語の読みを心身の有機的に連関する場の一分節面たる生理的場の構造——特に眼球運動——において把え，そこに各種文字配列の機能上の優劣序列を発見したいと思う。

（村　石）

国語の歴史的発達に関する調査研究

本年度も引続いて，(1)音韻史資料の収集と，(2)古辞書索引の作成とを行った。

1. 音韻史資料の収集

本年度は，名古屋市の井野川幸次氏の語った，平曲の「鱸」をテープ・レコーダーによって録音した。

2. 古辞書索引の作成

本年度は，「慶長九年本節用集」(古写本) と，「温故知新書」とをとりあげた。

ここにいう「慶長九年本」とは，最近研究所が東京の書店から購入したもので，奥書によると，慶長九年に名舜という人が写したものである。イ部からヲ部までだけの零本で，上田・橋本両博士の「古本節用集の研究」に述べている冒頭の語による分類の印度本であり，内容から見ると「堯空本」(宮内庁書陵部蔵) にひじように近い関係のあるものと思われる。

来年度以降に，25年度に調査した「天正18年本」と「易林本」，26年度の「饅頭屋本」と「黒本本」，来年度計画している「伊京集」とあわせて，語彙の仮名索引，漢字索引を作成する予定である。

この仕事は，岩淵悦太郎と広浜文雄が担当した。 (広　浜)

辞典の編集方法に関する調査

継続の国語辞典3種（大日本国語辞典・大言海・言泉）の収録語彙別一覧の作成を完成した。しかし，これを整理して利用できる段階にまではなっていない。 (広　浜)

国語関係文献の調査

言語・国語に関する学問の水準を知り，学界の動向や世論の動きをとらえるために，前年度に引き続き，文献調査を行っているが，本年度は次のような仕事をした。担当者は有賀憲三である。

A. 刊行書の調査

言語学・国語学・国語問題・国語教育・言語技術・国語資料・辞典等の刊行書について調べ，1952年（1月～12月）の刊行書285点を収めた目録を謄写印刷した。

B. 雑誌論文の調査

下記の雑誌類について，関係論文を調査し，分類別・雑誌別・筆者別の3種類のカード目録を作った。うち分類別にした2078点の「雑誌所載国語関係文献目録（3）1952年分」を謄写印刷した。これで1951年10月に謄写印刷にした1950年分と1951年分とを合せて未定稿ながら3冊の目録ができたわけである。

（A）アジア言語研究　新しい教室　潮　英文学思想　演劇　ORBIS　解釈と鑑賞　改造　学苑　学術月報　カナノヒカリ　カリキュラム　漢文学　教育　教育技術　教育研究　教育手帖　教育統計　近畿方言　経済研究　螢雪時代　言語研究　言語生活　語学教育　国学院雑誌　国語　国語学　国語教育　国語教室　国語研究（愛媛国語研究会）　国語研究（国学院大学国語研究会）　国語・国文　国語・国文研究　国語と国文学　国語方言　国文学　国文学研究　国文学攷　心　コトバの科学　ことばの教育　語文　サンデー毎日　実践国語　児童心理　信濃教育　社会学評論　週刊朝日　自由国民　衆友　出版ニュース　主婦之友　女子大文学（大阪女子大文学会）　初等教育資料　新聞学評論　新聞研究　人文研究　新聞放送広告　新聞用語研究　人文論究　青年心理　世界　測

定と評価　中央公論　中学時代　中学教育資料　東方学報　読書春秋　読書相談　日本　日本の遠記　日本文化　日本文学　日本文学論究　ニューエイジ　ニュースレター　ばんせ　びぶろす　婦人生活　文化　文学　文学界　文学研究　文学論藻　文化思想研究　文化と教育　文芸研究　文芸春秋　文芸と思想　文研月報　文書と能率　法政　放送文化　マネジメント　万葉　民間伝承　民間放送　民族学研究　文部事報　文部統計速報　リーダースダイジェスト　立命館大学　ROMAZISEKAI　Romgi no Nippon　6-3 教室

（B）愛知県教育文化研究所研究紀要　愛知女子短期大学紀要　跡見学園国語科紀要　茨城県教育研究所茨城教育時報　茨城大学文理学部紀要　印刷庁研究所時報　宇都宮大学学芸学部研究論集　愛媛県教育研究所紀要　愛媛県教育研究所報　大分県教育研究所報告　大分大学学芸学部研究紀要　大谷大学大谷学報　岡山大学法文学部学術紀要　お茶の水女子大学人文科学紀要　小野田高等学校研究論叢　鹿児島大学教育学部教育研究所紀要　九州大学九州文化研究所紀要　京都女子大学紀要　京都大学人文科学研究所紀要　京都大学人文科学研究所報　京都大学人文科学研究所「人文学報」　京都大学人文科学研究所調査報告　熊本女子大学学術紀要　熊本大学教育学部紀要　熊本大学法文論叢　高知大学研究報告（人文科学教育学部）　神戸外大論叢　国学院大学国語研究会会報　国立教育研究所紀要　国立教育研究所所報　国立国会図書館公報　西京大学学術報告「人文」　埼玉大学紀要　滋賀県教育委員会「教育時報」　静岡大学文理学部研究報告　島根大学人文科学論集（人文科学教育学関係）　信州大学教育学部研究論集（人文，自然）　聖心女子大学論叢　天理大学学報　天理大学中国語研究会会報　東京外国語大学論集　東京学芸大学研究報告　東京女子大学論集　東京文理科大学国語国文学会紀要　統計局研究彙報　統計数理研究所講究録　統計数理研究所彙報　同志社女子大学学術研究年報　東大東洋文化研究所紀要　東北大学文学部研究年報　徳島県教育月報　徳島大学学芸学部紀要　長崎大学人文・社会科学研究報告　奈良学芸大学紀要　日本音響学会会誌　日本音声学会会報　日本学術振興会科学試験研究報告集録　日本学術振興会総合研究報告集録　広島女子短期大学研究紀要　福井大学学芸学部紀要　福島県教育委員会「学力調査の報告書」　北海道学芸大学学芸　北海道大学教育学部学報　三重県立大学研究年報　宮城学院女子大学研究論文集　山形県東田川郡余目中学校「言語生活の実態」　山形県東高校夜学部社会科学研究部栗島民俗誌　山口大学教育学部研究論叢　山口大学文学会誌　山梨大学学芸学部紀要　山梨大学学芸学部研究報告　横浜市立大学紀要　竜谷大学論集　和歌山大学学芸学部「学芸研究」―人文科学―　早稲田大学教育学部学術研究　国立国語研究所年報

C. 新聞記事の調査

前年度に引き続き，諸新聞から，関係記事を切抜き，その整理に当るとともに，分類別および日付順のカード目録を作つた。分類別にしたものは，前年分同様一応謄写印刷にし，「国語関係新聞記事目録（3）1952年分」を作成した。調査した新聞と収録した記事の点数は下のとおりである。

(1) 東京出版（日刊）　朝日　毎日　読売　東京日日　東京タイムズ
（夕刊）　朝日　毎日　読売　時事　東京

(2) 地方出版　大阪在住の山田房一氏から関係記事のあるごとに，恵送された京阪地方の諸紙　朝日（大阪）　毎日（大阪）　新大阪など。

(3) 特殊新聞（寄贈）　読書　図書　教育　全国出版　学園（京大）など

1952年（1月～12月）切抜き868点。

図書の収集と整理

前年度に引き続き，研究活動を助けるために，研究書・参考書・調査資料文献の類を広く集め，整理し，管理した。担当者は村尾力・芳賀清一郎である。

研究書・参考書類は，言語学・国語学・国語国字問題・国語教育関係を中心として，社会学・心理学・教育学・民俗学・文学・統計学その他の関係諸科学のおもな文献，各種辞典・年鑑・書誌類のおもなものをもれなく集めるようにつとめた。旧刊のものは，すでに前年度までにかなりの程度まで集められたが，本年度はさらにそれを充足するとともに，新刊のものについてもなるべくもらさぬように努力した。

調査資料文献としては，やはり前年度からの方針に従って，明治初期から現代にかけての各種形態のものを収集することに心がけるとともに，歴史的研究のための資料として，各時代の古文献にも及んだ。

寄贈図書は前年度と大差なく，当研究所書庫の充実に大きな役割を果している。

次に本年度備え付けた図書の数を示す。

単行本	購入	986冊
	寄贈	1264冊（内，教科書1119冊）
雑誌	購入	44種（640冊）
	寄贈	107種（687冊）
新聞	購入	17種
	寄贈	5種

書庫の本年度末現在蔵書数（単行本だけ）は 16787 冊である。

昭和27年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名　　図書名

(1) **単行本**　（ ）内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。

愛知女子短期大学　「愛知女子短期大学古俳書目録」
岩井隆盛氏　「金沢地方の童謡選集」（金沢市小学教育研究会読方研究部）
石垣福雄氏　「濁音化現象」
市川信義氏　「小学校国語科の新しい教育」
茨城大学図書館　「茨城大学図書館増加図書目録」
井之口有一氏　「滋賀県言語の調査と対策―方語調査編―」
上野　勇氏　「万場の方言」「村のことば」（都丸十九一）
牛山初男氏　「語法上より見たる東西方言の境界線について」
遠藤嘉基氏　「訓点資料と訓点語の研究」「新講日本文法―古典解釈篇―」
岡山大学附属図書館　「池田家文庫仮目録」
香川県教育委員会　「昭和27年度香川県小・中学校学力検査成績についての考察」
加藤　諄氏　「北日向方言圏紀行」
金沢文庫　「金沢文庫古文書第一輯―武将書状篇―」「金沢文庫古文書第二輯―僧侶書状篇上―」
岐阜県教育委員会　「作文の話」
京都大学人文科学研究所　「東洋史研究文献類目―自昭和21年至昭和25年―」
国学院大学　「古典の新研究」
国立国会図書館支部上野図書館　「琉球文献目録稿―昭和27年3月―」「自昭和18年1月至昭和24年3月増加上野図書館和漢書書名目録―古書之

部一」「上野図書館所蔵本草関係図書目録上」

斎藤義七郎氏　「苦界船乗合咄」「奥州花巻方言蔵」「南部めくら暦」「蔵の千言」「出羽の方言」1号・2号（読売新聞所載）「湯の垢」「山形県方言資料」（山形新聞所載）「置賜方言集」（米沢高校郷土研究クラブ）「米沢地方の童謡」（米沢高校郷土研究クラブ）

佐伯隆治氏　「播州赤穂方言集」

堺市教育研究所　「国語・算数調査報告書―昭和26年度―」

佐藤　茂氏　「福井県の言語調査」

志津田藤四郎氏　「漢字頻度調査に就いて」

新村　出氏　「宮庭敬語」（日本放送協会）

全国大学国語教育学会　「国語科教育」

総理府統計局　「昭和25年国勢調査報告」第2巻・第3巻その1・2第7巻その16・19・22・30・31

田口　三郎氏　"A QUANTITATIUE STUDY OF THE PERCEPTIBILITY OF SOUND WANING IN MODIFYING SOUND CHARACTERISTICS"

多々良鎮男氏　「栃木県方言の概観」

手塚邦一郎氏　「栃木県塩谷郡喜連川町方言集」

寺川喜四郎氏　「国語アクセント論叢」

東京大学史料編纂所　「大日本史料」第五編三十四・第六編之二十九・第七編之三十・第十一編之八・第十一編之九　「大日本古文書」家わけ第十七之二・第十八・幕末外国関係文書之二十三　「大日本古記録」御堂関白記上・新井白石日記上

東京天文台　「理科年表―昭和28年―」

富山市教育委員会　「富山市児童言語調査」

富山県教育研究所　「小学校中学校国語科学習内容の構成と指導系統」

日本放送協会　「難語言いかえ集」「スポット・アナウンスの理解度と効果の研究」「北海道地名の呼び方」

日本民間放送連盟　「商業放送講座」

野地潤家氏　「話しことばの教育」

福島県教育委員会　「学力調査の報告書」

藤原与一氏　「ことばの歴史」

文教書院　「わたくしたちのことばと文法―口語文章篇―」（遠藤嘉基外）

毎日新聞調査課　「東大寺」（小林剛）

前田育徳会　「建治三年記」（前田本）
三宅武郎氏　「基礎日本語」
民族学研究所　「民俗学研究」第三輯
武蔵野書院　「校註　十六夜日記」（永積安明）　「要註　日本永代蔵・世間胸算用」（大藪虎亮）　「改訂　謡曲狂言新選」（吉川久）　「校註　源氏物語―玉鬘―」（秋山虔）　「校註　源氏物語―浮舟―」（竹下数馬）　「昭和校註　堤中納言物語」（松尾聰）
虫明吉次郎氏　「国語科教育課程の基準」（岡山県教育委員会）
明治神宮社務所　「明治天皇・昭憲皇太后御集」
文部省　「話しことばの性格・話しことばの表現―国語シリーズ６―」　「国語問題をこう考える―国語シリーズ７―」　「現代かなづかいの意義―国語シリーズ８―」　「入門期におけるローマ字文の学習指導―国語シリーズ９―」　「文部省刊行物制作便覧」　「教育用音楽用語」楽典編・第２編　「中学校高等学校学習指導要領」理科編・社会科編・図画工作編・外国語科編　「小学校学習指導要領―理科編―」　「小学校における家庭生活指導の手びき」　「学校弓道指導の手びき」　「国語審議会の記録」　「これからの敬語」　「児童生徒の漢字を書く能力とその基準」　「高等学校定時制課程体育指導の手びき」　「学制七十年史」　「国語審議会報告書―昭和24年６月～27年４月―」　「算数実験」学校の研究報告」　「幼稚園のための指導書―音楽リズム編―」　「身体虚弱児童生徒の健康指導の手びき」　「中学校高等学校職業指導の手びき―実践編―」　「小学校の合奏」　「小学校学習指導書―理科編｜上―」
ローマ字教育会　「イソップの話」　「春を待つどんぐり」　「竹取物語」
ACOUSTICS LABORATORY　“PRELIMINARIES TO SPEECH ANALYSIS” (ROMAN JAKOBSON)
AMERICAN DIALECT SOCIETY　“THE ARGOT OF THE RACETRACK No. 16” (DAVJD W. MAURER)
JOHANNES RAHDER　“LANGUAGE” (LINGUISTIC SOCIETY OF AMERICA)　“NINTH SUPPLEMENT TO A MANUAL OF THE WRITINGS IN MIDDLE ENGLISH” (BEATRICE DAW BROWN)
SEVER POP　“LA DIALECTOLOGIE” PREMIERE PARTIE・SECONDE PARTIE

SUMMER INSTITUTE OF LINGUISTICS "BIBLIOGRAPHY OF THE SUMMER INSTITUTE OF LINGUISTICS 1951—9" "THE USE OF PRE-PRIMER SYLLABLE CHARTS IN CHOL LITERACY WORK" (JOHN BEEKMAN) "NONPHONEMIC STRESS : A PROBLEM IN STRESS PLACEMENT IN ISTHMUS ZAPOTEC', (UELMA PICKETT) "A SYSTEM FOR THE DESCRIPTI ON OF SEMAMTIC ELEMENTS" (EUGENE A NIDA) "ZOQUE Ⅱ : PHONEMES AND MORPHOPHONEMES" (WILLIAM L. WONDERLY) "ZOQUE Ⅲ : MORPHOLGICAL CLASSES, AFFIX LIST, AND VERBS" (WILLIAM L. WONDERLY) "ZOQUE Ⅳ : AUXILIARIES AND NOUNS" (WILLIAM L. WONDERLY)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS "UCJ : AN ORTHOGRAPHIC SYSTEM OF NOTATION AND TRANSCRIPTION FOR SINO -JAPANESE" (PETER A BOODBERG) "THE HISPANIC SUFFIX -(i) ego" (YAKOV MALKIEL) "STUDIES IN VIETNAMESE CANNAMESE GRAMMAR" (M. B. EMENEAU)

(2) **逐次刊行物**(おもなもの)

朝日新聞社	「ことば」1号～12号
大阪市立大学文学会	「人文研究」3巻2号～4巻2号
大阪大学文学部国文学研究室	「語文」5輯～7輯
大谷学会	「大谷学報」31巻3・4号～32巻2号
カナモジカイ	「カナノヒカリ」359号～369号
関西大学国文学会	「国文学」7号～9号
教育技術連盟	「教育技術」7巻2号～13号・8巻1号 「小一教育技術」6巻2号～13号・7巻1号 「小二教育技術」5巻2号～13号・6巻1号 「小三教育技術」6巻2号～13号・7巻1号 「小四教育技術」5巻2号～13号・6巻1号 「小五教育技術」6巻2号～13号・7巻1号 「小六教育技術」5巻2号～13号・6巻1号 「中学—国語：社会：英語—教育技術」4巻2号～13号・5巻1号 「中学—数学：理科：図工—教育技術」2巻2号～12号・3巻1号 「中学—職家：音楽：体育—教育技術」2巻2号～12号・3巻1号

京都大学国文学会　「国語国文」211号～222号
京都大学人文科学研究所　「紀要」6号～8号　「所報」29号～33号　「調査報告」2号・7号・8号
京都女子大学　「京都女子大学紀要」1号～5号
近畿方言学会　「近畿方言」12号～15号
神戸市外国語大学　「神戸外大論叢」2巻5号・3巻1号～2号
語学教育研究所　「語学教育」216号～220号
国語学会　「国語学」9輯～11輯
国立教育研究所　「国立教育研究所報」10号～15号
国学院大学　「国学院雑誌」53巻1号3号
国学院大学国文学会　「日本文学論究」第8冊～10冊
静岡大学文理学部　「静岡大学文理学部研究報告｜人文科学—」1号～3号
静岡大学教育学部教育研究所　「文化と教育」29号～39号
信濃教育会　「信濃教育」784号～795号
昭和女子大学光葉会　「学苑」136号～145号
初等教育研究会　「教育研究」7巻4号～12号・8巻1号～3号
誠文堂新光社　「カリキュラム」41号～51号
全国出版協会　「全国出版新聞」56号～75号
大修館　「国語教室」11号～20号
中教出版K．K　「新しい教室」7巻4号12号・8巻2号・4号
中国語学研究会　「中国語学研究会会報」9号～12号
塚原鉄雄氏　「ばんせ」21号～24号
天理大学人文学会　「天理大学学報」7輯～9輯
東京文理科大学国語国文学会　「国語」1巻2号～4号・2巻1号
東京堂　「日本読書新聞」638号～688号　「図書新聞」139号～188号　「出版ニュース」194号～229号
統計数理研究所　「輯報」8号～11号　「講究録」7巻9号～12号・8巻1号～6号
徳島県教育庁　「徳島県教育月報」29号～31号・36号～37号
日本音響学会　「日本音響学会報」8巻1号～4号
日本教職員組合出版部　「教育新聞」160号～210号
日本書籍K．K　「教育手帖」24号～29号
日本電報通信社　「電通月報」7巻9号～10号・8巻1号～3号
日本文学協会　「日本文学」1巻1号～2号・2巻1号
日本文芸研究会　「文芸研究」9集～12集
日本民間放送連盟　「民間放送」2号10号

日本のローマ字社　“ROMAZI NO NIPPON” 4号～15号
日本ローマ字会　「ローマ字世界」443号～454号
日本放送協会　「放送文化」7巻4号～12号・8巻1号～3号
日本放送協会放送文化研究所　「文研月報」12号～22号
一橋大学経済研究所　「経済研究」3巻2号～4号・4巻1号
北海道学芸大学函館人文学会　「人文研究」3号～6号
北方民俗方言学会　「北方民俗方言学会報」2号～8号
穂波出版社　「実践国語」142号～150号
文学研究会　「文学研究」8号～10号
万葉学会　「万葉」3号～6号
民主々義科学者協会　「コトバの科学」7号～9号
文部省　「文部時報」896号～902号・905号・906号　「教育統計」14号～21号　「文部統計速報」58号～62号　「初等教育資料」23号34号　「中等教育資料」1巻3号～12号・2巻1号～2号　「びぶろす」3巻2号～12号・4巻1号～2号
山口大学文理学部　「山口大学文学会誌」創刊号・2巻1号～2号・3巻1号～2号
山口大学教育学部　「山口大学教育学部研究論叢」1巻1号～3号・2巻1号
立命館大学人文学会　「立命館文学」83号～94号
ローマ字教育会　「ことばの教育」33号～43号
THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN “BULLETIN” Vol. XV. Part 1. 2. 3.
WASHINGTON UNIVERSITY “MODERN LANGUAGE QUARTERY” Vol. 13 No. 1 No. 2 No. 3 No. 4

庶務報告

A. 庁舎および経費

(1) 庁　　舎

1948 (昭和 23 年) 12 月創立当時からひきつづき, 宗教法人明治神宮所有の絵画館の一部を借用しているが, 実験室・研究室の設備をする余地がないため研究上支障が多い。

なお, 昭和 26 年 12 月からは, 三鷹市下連雀 91 番地 山本有三氏所有の建物を借用し, 仮分室を設け, 研究第 2 部が勤務している。

(2) 経　　費

昭和 27 年度	総　額	19,200.000 円
内訳	人件費	9,970,000 円
	事業費	9,230,000 円

B. 評議員会

会長	安藤正次	副会長 山崎匡輔
阿部知二	金田一京助	倉石武四郎
桑原武夫	颯田琴次	沢登哲一
高木貞二	土岐善麿	土居光知
東條操	時枝誠記	中島健蔵
服部四郎	古垣鉄郎	松方義三郎
松坂忠則	柳田国男	

C. 人的構成

(1) 予算定員

教　官　30　　事務職員　21　　計　51

（2）　組織および職員

	職　名	氏　名	備　考
国語研究所	所　長	西尾　実	
研究第1部	部　長	岩淵悦太郎	
第1研究室	主　任	中村通夫	
		大石初太郎	
		飯豊毅一	
		宇野義方	
		進藤咲子	
	非常勤	金田一春彦	
第2研究室	主　任	林　大	
		永野　賢	
		大野弥穂子	28. 3. 31 辞職
		斎賀秀夫	
		水谷静夫	
第6研究室	主任(兼)	岩淵悦太郎	
		柴田　武	
		北村　甫	
		野元菊雄	
		島崎　稔	27. 4. 15 高崎市立経済短期大学へ転出
		上村幸雄	27. 5. 1 採用
		山之内るり	
	非常勤	島崎　稔	25. 5. 1 採用
研究第2部	部　長	草島時介	
第3研究室	主　任	平井昌夫	
		上甲幹一	
		高橋　進	27. 4. 1 採用
		寺島　愛	
第4研究室	主　任	興水　実	
		高橋一夫	
		芦沢　節	
第5研究室	主任(兼)	草島時介	
		森岡健二	
	非常勤	村石昭三	27. 6. 1 採用

資料室	主任(兼)	岩淵悦太郎	
		有賀憲三	
		村尾力	
		広浜文雄	
		友部浩	
		高田正治	28. 3. 31 復職
	兼任所員	遠藤嘉基	京都大学教授
	〃	藤原与一	広島大学助教授
	〃	浅井恵倫	金沢大学教授
	〃	佐藤喜代治	東北大学教授
庶務部	部長	細井房夫	
	課長	真坂正二	
		芳賀清一郎	
		上原孝敬	28. 3. 31 辞職
		加藤ふみ	
		若宮博	
		江頭よね子	
		味岡善子	28. 3. 31 休職
		増山治子	
		三枝やす江	
会計課	課長	黄木得二郎	25. 5. 1東京大学事務局器材調達課運営掛長より配置替
	〃	宮沢幹郎	25. 5. 1 東京大学器材調達課へ転出
		伊藤仲二	
		鈴木享	
		三浦清伍	
		藤山健次	
		渋谷正則	
		八島秀一	27. 10. 31 辞職
		斎藤静志	
		浜田好代	
		塚田と志	
		江頭健一	27. 11. 1採用

D. 内地留学生の受け入れ

昨年度に引き続き，全国都道府県派遣の内地留学生を迎えて，各研究室で研究の便をはかっている。次にその氏名・研究題目等を掲げる。

氏名	学校	研究題目	期間
佐野芳夫	甲府市立穴切小学校教諭	読むことを中心とした国語学習指導法の研究	昭27. 4. 1から 〃28. 3.31まで
本宮敏治	今治市立花小学校教諭	国語音韻と仮名遣の研究について	昭27. 4. 1から 〃27.10.10まで
内山直	宇和島市立北中学校教諭	国語教育史および国語教育学について	昭27. 4. 1から 〃27.10.10まで
松原三夫	山口市良城小学校教諭	小学校における文法指導について	昭27. 4.10から 〃27.10.10まで
川野正一	宮崎市立大宮中学校教諭	国語教育における作文(詩を含む)指導について	昭27. 8. 5から 〃27.11.26まで
小河正介	山口県阿武郡亀山小学校長	小学校の学習指導の立場から教育漢字の指導 学習基本語彙と語彙指導 文法教育指導について	昭27. 9. 1から 〃27.11.29まで
福島外喜雄	富山県西礪波郡石動小学校教頭	国語学習指導の技術について	昭27. 9. 3から 〃27.12.12まで
中尾温雄	鹿児島県公立小学校教諭	国語教育および言語調査について	昭27.10. 2から 〃27.11. 6まで
菊地吉治	北海道苫小牧市弥生中学校教諭	国語問題と国語教育	昭28. 1.10から 〃28. 3.31まで

E. 日誌抄

1952. 4.15 (昭27) 所員島崎稔高崎市立経済短期大学へ転出のため辞職。

5. 1 会計課長宮沢幹郎東京大学事務局器材調達課へ転勤，同日後任として東京大学事務局器材調達課運営掛長黄木得二郎着任。

5.16～17 第8回文部省所轄機関並びに国立大学附置研究所長会議（日本学術会議で）

5.27～28 第3回文部省所轄研究所庶務部長連絡協議会（緯度観測所で）

5.28 各省直轄研究所長連絡懇談会（電気試験所田無分室で）

7.11 第19回国立国語研究所評議員会

7.29　文部省所轄機関並びに国立大学附置研究所事務協議会（東京大学法文経36番教室で）

10. 1　原国語課長，社会教育局視聴覚教育課長に配置替の後任として白石大二氏が任命された。

11.19　安藤評議員会会長死去。

11.21　文部省所轄研究所長会議（国立遺伝学研究所で）

11.27　各省直轄研究所長会議（鉄道技術研究所で）

12.12　第20回国立国語研究所評議員会

議　事

1. 安藤会長死去にともなう後任会長の選挙は，28年2月に評議員半数改任後に行い，それまでは山崎副会長が代行することが決議された。
2. 研究の成果に関する中間報告

1953. 2.27（昭28）　第21回国立国語研究所評議員会

議　事

1. 評議員半数改任の経過報告ならびに欠員補充について

半数改任の評議員

金田一，倉石，颯田，土居，東條，松坂，柳田，服部，波多野各評議員

2. 会長選挙……柳田評議員当選
3. 副会長選挙……山崎副会長当選
4. 柳田会長，山崎副会長就任のあいさつ
5. 評議員欠員補充，研究所庁舎28年度予算等についての懇談があった。

3.28　第2回国立国語研究所研究発表会

ところ　　お茶の水女子大学講堂

1. 基本語彙を考える　　水谷静夫
2. 地域社会と敬語　　柴田武
3. 国語学力の水準　　輿水実

3.31 三鷹仮分室を山本家へ返還，研究第2部は新宿区立四谷第六小学校内に移転することとなる。

国立国語研究所刊行書

国立国語研究所報告1	八丈島の言語調査	
国立国語研究所報告2	言語生活の実態 —白河市および附近の農村における—	(秀英出版刊 ¥.300.00)
国立国語研究所報告3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	
国立国語研究所報告4	現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語	
国立国語研究所報告5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	(秀英出版刊 ¥.600.00)
国立国語研究所報告6	少年と新聞 ——小・中学生の新聞への接近と理解——	
国立国語研究所報告7	入門期の言語能力	

国立国語研究所資料集1	国語関係刊行書目(昭和17-24年)	
国立国語研究所資料集2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	
国立国語研究所資料集3	送り仮名法資料集	

昭和24年度	国立国語研究所年報	1
昭和25年度	国立国語研究所年報	2
昭和26年度	国立国語研究所年報	3
昭和27年度	国立国語研究所年報	4

191

昭和28年12月

国立国語研究所

東京都新宿区四谷霞丘
聖徳記念絵画館内
電話青山(40) 0992
2874

1952~1953

ANNUAL REPORT OF NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword
Outline of Researches from April 1952 to March 1953
Analysis of Spoken Common Japanese
Analysis of Vocabulary in Women's Magazines
Survey of Local Dialects from Honorifics
Social Psychology of Honorifics in Ueno City, Mie Pref.
Study of Learning Difficulties of Written Language
Making of a Scale for Standard of Language Abilities
Researches of Improvement of Atitude, Experiment, and Reading Ability of Newspapers
Fundamental Study of Readability
Style Analysis of Radio News
Experimental Study on Efficiency in Reading
Others
General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
YOTUYA, SINZYUKU, TOKYO
1953